
風の旅人、三国を歩く

ヒマワリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の旅人、三国を歩く

【Nコード】

N0431W

【作者名】

ヒマワリ

【あらすじ】

女禍との戦いを終え、とある部屋にいた太公望。

その時彼が目にしたモノ、それは……女禍の残した『遺産』だった。

もし太公望が恋姫無双の舞台へ行ったら？
という物語になります。

8月30日追加……話の展開上、太公望の思想及び主義に反する部分（人間界の戦に介入等）がありますので、ご理解頂けない方はお戻りする事をお勧めします。

新しい世界

女禍との戦いを終え、自分の役割を終えた太公望は後始末をその他に任せ旅を続けていた。

そして、とあるモノを見つけてしまう。

これにより太公望は新たな世界へと旅立つのだった。

新しい世界に於いて悠々自適な生活を目指す彼にどんな未来が待っているのか……。

これは封神演義と恋姫無双のクロスオーバーです。

もし太公望が恋姫の舞台に降り立ったら？ という前提の物語になります。

注意

恋姫には出てこない武将

ご都合主義（横文字、時代錯誤含）

独自解釈及び独自設定があります

序章

とある空間。

此処は『部屋』と呼ばれ……その名の通り、ある人物が創り出した空間。

この『部屋』には幾つもの小窓が在り、『外界』の様々な様子を映し出している。

大きな針時計の下にある、ソファのような腰掛椅子。そこにこの『部屋』の主達が座っていた。

「太公望よお……どうするよ？」

「うーむ……面倒な事になったのう」

この部屋の主、それは太公望と王天君……つまりは伏儀。彼らは女禍との戦いを終え、ようやく『道標』から外れる事ができた世界を見守る者。

彼らは『道標』から外れた世界にとって、自分達は不要と判断を下し……もとい、後始末が面倒だと言う事で世界から身をくらししていた。

この『部屋』こそ、隠れ家の最たるものと言っても過言ではない。空間使いである伏儀にしか侵入を許さないこの『部屋』は、かの千里眼からも逃げられる唯一無二の空間だからだ。

始祖と自覚してから、その能力を最大限に生かしてたらだら過ぎしてきた太公望だったが、ある問題が発生した。
わざわざ分身たる王天君を呼び出している事から、その問題は面倒なものであるとわかる。

「女禍の奴は死んでないのか？」

「いや、それはない。魂魄すら残っていない。それは間違いない」

「……じゃあ、『これ』はどう説明すんだよ」

そう言つて王天君が指差した先にあるのは、一つの小窓。

先程も説明したが、この『部屋』にある小窓は外の世界を映し出すもの。

だが、王天君が指差した小窓だけは異質なものであり、彼らの目下の問題そのものである。

ところで、その小窓に何が写っているのかと言うと……他の小窓に映る景色と変わらず、外の世界の景色。

それが何故問題かと言うと……

「間違いなく、『別の世界』の景色だのう」

そう、その小窓が映し出している景色は、別の世界のものだった。

「これは……あれだろ？」

「恐らく今王天君が考えてるもので間違いない」

「マジかよ……。じゃあやっぱり……」

「うむ。かつて女禍の創り出した世界の『遺産』だ」

かつて女禍は、始祖としての故郷を求め世界を作り直してきた。失敗するたびに、何度も、何度も。

そうして繰り返し返されてきた歴史を止めるべく、始祖の唯一の生き残りである伏儀が、『太公望』と『王天君』として戦った。

この小窓に映っている『世界』は、その繰り返し返されてきた歴史の一部。

「あー、待て。納得いかねえ」

「どうしてこの『世界』が切り離されているか、という事だな？」

「ああ、歴史は確かに繰り返し返されてきた。それが『別世界』として剥離された理由がわからねえ」

そう、歴史は繰り返し返されてきたものの、同じ『世界』として存在してきた。

だが……何故この『世界』だけが『歴史の道標』を外れ、別の次元として存在しているのか。

実は、太公望にはおおよその見当がついていた。

「これはわしの考えだが……恐らくこの『世界』は、女禍が『保険』として残していたものなのでは？」

「『保険』？」

「うむ。女禍が最初からわしらの事に……封神計画に気がついており、大した障害にならぬと思っていたとして。念の為に用意しておいた保険。それがこの『世界』では？」

「……そうか、万が一俺らに邪魔された時に逃げられる『世界』を予め創って……いや、離しておいたって事か」

「そうだ。だが結果として、女禍は逃げる前に魂魄ごと消え去ってしまった」

「じゃあ、この『世界』は女禍はいないものの……本来の流れから離れちゃった、完全に別の世界って事か」

「恐らくは……そうなのう」

つまり、女禍の『逃げ道』として残しておいた『歴史』だけがそのまま残ってしまった。

道標を外れてはいるものの、それは本来存在しない世界。女禍の創り出した『第二の世界』なのだ。

しかし、ここで勘違いしてはいけないのは……この『世界』は存在してはいけないものではない。

この『世界』にも流れがあり、それはその『世界』が作り出した独自のもの。

元はオリジナルだが、そこから先は本来の世界とは違う流れで生まれたもの。

だからこそ、2人は悩んでいた。

「結局どうすんだ？ このまま窓を閉じるか？」

王天君の言う『窓を閉じる』行為は、彼らにしか……この空間でしか出来ない事。

つまりはその『世界』を映している窓を消す事により、一切の干渉を不可能にするというもの。

「……いや、ダメだ」

「ああ？ なんでだよ」

「それは仮にも同志が生み出した世界だ。面倒くさいが、管理する義務がある……面倒くさいがのう」

太公望にとっては二回も言う程大事な事、つまりは面倒なのだが…
…彼の言う通り、これは『始祖』として責任を負わなくてはならなかった。

「つつても女禍はいねえんだろ？ 下手に干渉しねえ方がいいと思うんだが」

「それは尤もだがのう……万が一何かあった時、対応できるのはわしだけというのもまた事実よ」

「ちつ……厄介なもん残しやがって……」

「全くだ。せつかくスーピー達から逃げながら、ダラダラ過ごそうと……」

そこまで言つて、太公望の動きが止まる。

急に停止した彼を見て、王天君は怪訝な表情を浮かべるが……次に王天君が見たのは、かつて何度も見た……策士としての太公望の腹黒い笑み。

「おい、あんた何考えて……」

「よし、仕方がないがわしがその世界を監視してやるのではないか」

ニヤリとしながら言うその言葉の意味を、王天君は一瞬で察した。

仮にも自分の半身、ある程度なにを考えているかは検討がつく。

「……待て、あんたの考えてることわかってんだよ。こつちの世界の後始末放り出してサボる気だろ」

「何を言う！ わしは同志の尻拭いを仕方がなくするのだ！ 決してそのような疚しい気持ちではない！」

ビンゴである。

「とぼけてんじゃねえよ！」

「とぼけてなどおらーぬ。というわけで、わしは早速この世界に飛び立つ！」

「あ、ちよつと待てコラ！」

「わーはははは！ しばらく休みを満喫したら戻ってくる！ さらばだ王天君！」

高笑いをしながら小窓に飛び込む太公望。

王天君の、彼を止めようと出した手は虚しく空を切り、次第に小刻みに震え始める。

「あの野郎……逃げやがった」

こうして、王天君の怒りを買った太公望の……別世界におけるサボ
タージュの旅が始まったのだった。

これからサボることすら叶わぬ程の大事に巻き込まれるとも知らず
に……。

「ちっ……アイツの仮定通りだとしても矛盾がある。ま、それは後
々アイツがなんとかすんだろ」

序章（後書き）

更新はとても不定期です。
なので長い目でみてください。

新たな世界に起こる風

「ふむ、見た感じは元の世界とあまり変わらぬようだのう」

王天君を振り切って、自称『管理』……真意として『サボる』為に別世界にやってきた太公望。

周囲を見回しての第一印象がそれだった。

雄大に聳える山。青々と茂る草原。

「まさに今のわしにとつてうってつけだのう……大体わしは今まで死ぬほど働いたうちゅーの、少しくらい休んでもよかるうに」

ぶつぶつと文句を言いながら歩き始める。

小高い丘に登ると、周囲の景色が一層わかりやすい。

サボるのが名目とは言え、一応『管理』もしなければならぬのは太公望もわかっている。

なにせ女禍が創り出した世界故、油断はできない。

王天君を残してきたのは万が一の事を考えての事だった。決して後始末を押し付けてきたわけではない事をここに記しておく。

「それにしてもいい天気だのう……このまま一眠り……」

適当な木陰さえ見つけたら、宣言通り仰向けに倒れて昼寝をしているところだった。

それを止めたのは、遠くの方から大きな音が聞こえてきたからである。

「馬の蹄の音……それもかなりの数だ。なにやら悲鳴も聞こえるのう」

目を凝らして見てみると、遠くに砂塵が巻き起こっている。

「やれやれ、何処の世界においても戦はあるものとわかっていても……気分がいいものではないわ」

そう一人ごち、スーパー宝贝つき打神鞭を軽く振るう。
音もなくふわりと舞い、砂塵の方へと向かって飛んでいく。

「戦かと思っただが……違うようだのう」

砂塵の近くまで飛び、付近の丘の上で呟く。

太公望の目に飛び込んできた光景は、予想通りの騎馬軍団。

しかしそれは軍と軍による戦争ではなく……

「逃げているのは……民か。どうやら賊に追われているのだな」

悲鳴を上げながら必死に逃げ惑っているのは、どこからどう見ても民草。

追っている騎馬の一団は、揃って黄色い布を身につけ、武器を構えている。

どう鼻屑目に見ても、賊が罪無き民を襲っているようにしか見えない。

「さて、どうするか……女禍が原因とは言え、この世界は既に『道標』を外れておる。故にわしが関わってよいものか……」

太公望はこの惨状を目の前にして迷っていた。

元はと言えば女禍の創り出した、言わば副流であるこの世界。

彼女が消滅した現在では、既に『歴史の道標』は外れており、副流として独自の流れを歩んでいる。

『始祖』であるからこそ、それに関与していいものか太公望は迷っているのだ。

「いかん、取り残されている者がある。このままでは追いつかれるぞ……」

暫く傍観していたが、民の一団に取り残されている者たちを見つけってしまった。

このままでは救助に間に合わず、賊の騎馬に飲み込まれてしまう。

「まずい！」

そう判断した太公望は、再び宙を舞い、取り残された一団を救うべく飛んでいく。

関与してはいけなしかも思えないとは思いつつ、目の前で殺されるであろう民草を放っておけるほど、彼は薄情ではなかった。

「関羽將軍！ このままでは救出に間に合いません！！」

「ちいつ……諦めるな！ 馬を飛ばせ！！」

黒髪を靡かせ、青龍堰月刀を手に馬を駆ける少女。

関羽と呼ばれた少女は民が襲われていると聞き、救出すべく出撃した。

なんとか救出に間に合った。

そう思ったのも束の間、後方の一団が取り残されているとの情報が入って来た。

この場を部下に任せ、数人を引き連れて救出に向かう。

「見えたっ！ くっ、このままでは……！」

遠目に見える取り残された民の集団。その背後には既に賊が迫っている。

馬を飛ばしているものの、どうやら間に合いそうもない。

何とか間に合う事を願って必死に馬を飛ばしていると、その願いが通じたのか――

民を守るように、一陣の『風』が姿を現す。

軍神と出会うは一陣の風

「怪我はないか？」

「え……？」

民の集団に届いたのは、馬の足音でも、汚い罵声でも、無情な刃でもなかった。

青年と思われる、優しい声。

そこにいたのは、不思議な服を纏った一人の青年。

「よくぞ守った。あとはわしに任せておけ」

「え、あ……あ、貴方様は……？」

賊はあと一歩という所まで迫っていた。

彼らも突然現れた青年に戸惑っているようで、連中の叫び声が飛んできた。

「なんだてめえ！」

「邪魔するならお前も殺すぞ！」

汚い罵声、恫喝。

しかし、それに臆する事無く青年は小さな声で呟く。

「やれやれ……仙道でもない人間に宝貝を使うのは気が退けるが…
…仕方ない」

「何言つてんだ、こいつ？」

「構わねえ、斬れ！」

「命まではとらぬ故、我慢するのだぞ」

乱入者により止まっていた場が再び動き出す。
次に飛んで来たのは罵声でも恫喝でもなく、槍や剣。

「死ね！！」

「ひゃあああつ！？」

「疾っ！」

本来であれば民の悲鳴と共に青年に突き刺されるであろう刃は、風によって阻まれた。

青年が持っている、まるで教鞭のような物を振るって起こされた風が届く筈の刃を文字通り吹き飛ばした。

「え……？」

「か、風を起こした……！？」

驚いているのは助けられた民達だけではない。
賊もまた、目の前で起きた現象に戸惑っていた。

「な、なんだ今の……」

「風が急に……」

「なんなんだこいつ！？」

明らかに動揺している賊を一瞥し、ニタリと笑う青年。
その笑みは、どちらが賊かわからない程に歪んでいる。

簡単に言つと悪人の笑みだ。

「退け。お主らではわしに勝てぬ。それとも今度は風の刃に斬られたいのかのう？」

そう言つと、青年は再び鞭を振るう。
すると今度は突風ではなく風の刃が地面を切り裂いた。

まるで、鎌鼬のように。

――

「関羽將軍……あれ、何なんですか……？」

「……わからん」

民を助けに来た関羽もまた戸惑っていた。
取り残された一団の救助を諦めかけた時、何処からか突然現れた青
年が風を操り賊の行く手を阻んでいた。

それも、たった一人で。

「……とにかく今は民の救出を急げ！」

「わ、わかりました!!」

（風を操る……妖術の類か？）

同じく目の前の光景を理解できていない部下に指示を出し、再び馬を飛ばす。

あの風の正体が、あの青年の正体が何にせよ……今自分がすべき事は変わらない。

「大丈夫か!？」

「あ、貴女たちは……?」

「安心するといい。私たちは義勇軍。助けに来た」

「じゃ、じゃあ貴女達が劉備様の……」

「ああ、関羽という。さあ、行くぞ!」

ひょいと馬から降り、部下に自分の馬を使って民を連れて行くように指示を出す。
自身は堰月刀を握り締め、風を起こしている青年へと近づいて行った。

「っ……」

そして、改めて目の前の光景に驚愕する。

風を隔てて賊は一切近づいて来れない。

気づかぬ内に……それを起こしている、目の前の青年の姿に目を奪われていた。

「私は義勇軍の将。貴方は……何者ですか？」

関羽の名乗りと問いに、未だに動かない……否、動けない賊と対峙したままの青年は、首だけこちらに向けて言葉を放つ。

「おお、義勇軍か。では民は大丈夫そうなのう」

見た事のない服、大きな手袋、まるで角をあしらったかのような頭の布。

格好こそ奇妙なもの、振り返ったのは精悍な顔つきをした黒髪の青年だった。

「先に行け。一旦近づけないようにするのにな」

「近づけないようにするって……一体何を……」

関羽が言い終わる前に、青年が三度鞭を振るう。
すると今度は砂塵が巻き起こり、視界を覆いつくしていくではないか。

「なつ……」

「ほれ、呆けておる場合ではなからう！ さっさと行くがよい！」

絶句する関羽を叱責し先に行くよう促す青年。
しかし目の前の状況についていけないようで、固まっただま。それを見た青年は苦笑いをした。

「まったく、仕方がないのう。しっかり掴まっておれよ？」

「……な、何を？」

「わしらも逃げるぞ」

「は？　つて……えええええええ！？」

我に歸つた彼女を抱き抱えたと大空へと飛び立った。そのまま民が逃げて行つた方へ向けて飛んで行く。

この展開に、再び関羽は言葉を失うのだった。

――

一方その頃……

「愛紗ちゃん大丈夫かなあ？」

「愛紗なら大丈夫なのだ！」

桃色の髪をした少女――劉備と、小柄な少女――張飛が馬を並べて会話をしている。

先程入ってきた情報をもとに、取り残されている民の団を救うべく関羽を派遣した。

既に民は合流を果たし、今は関羽の帰りを待つばかり。

「とととと、桃香様あー!!」

「たたたた、大変でしゅっ!!」

身を案じる二人の下に、これまた小柄な二人の少女が飛び込んできた。

ベレー帽のようなものを被る諸葛亮と魔女帽のようなものを被る鳳統で、義勇軍の誇る軍師。

「ど、どうしたの二人とも!？」

「そそ、それが……!!」

「もしかして、愛紗ちゃんに何かあったの!？」

「あの……えっと……」

二人の酷く慌てた様子を見て、劉備と張飛はただ事ではないと悟る。

もしかしたら――

そんな最悪の展開が頭に過ぎる中、二人の報告は予想外のものだった。

「愛紗さんが……空を飛んでましゅ！」

「……は？」

古より流れし風

「む、あれがお主の仲間連中か？」

「は、はい……」

目下に民の一団と、義勇軍と思しき集団を確認した太公望はゆっくりと降り立つ。

その光景に啞然とする一同。

青年が空を飛んでこちらに向かってきたと思えば、自分たちの目の前でふわりと降り立ったのだから当然なのだが。

人間が空を飛ぶ。

その非常識な出来事に、その場にいた全員が驚愕の声を上げた。

「あ、あ、あ、あんた一体何者だ!？」

「空を飛ぶなんて……なんなんだ？」

様々な声もどこ吹く風、太公望はキョロキョロとあたりを見回す。

ひとまず抱えていた関羽を降ろし、状況を確認。

「ふむ、義勇軍というのはどれかのう？」

「え、あ……」

未だに混乱したままの関羽。

名誉の為に言っておくが、普段の彼女は冷静沈着である。
するとそこへ、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「愛紗ちゃん！？」

「愛紗ー！ 無事だったのだー！！」

「と、桃香様！ 鈴々！！」

その声に安心したのか、ようやく我に帰る関羽。

駆け寄ってきた二人は手を取って無事を喜んでいたが、ふと彼女の隣にいる青年に気づく。

そして劉備が恐る恐る声を掛けた。

「あ、あなたは……？」

「桃香様……このお方は民を助けてくださいました」

助けてくれた、と聞いて破顔した劉備は何度も何度も頭を下げる。するとその横にいた張飛が、なにやら目を輝かせていた。

「お兄ちゃん空飛んでたけど、仙人なのか？」

「い、くら鈴々！」

「いや、わしは道士だ。正確には仙人ではない」

「いくらなんでも仙人なんて……っつて、ええええええええ！？」

急に大声で叫んだ桃色髪の少女を、先程の黒髪の少女が慌てて嗜める。

「と、桃香様！？」

「はっ！ す、すみません道士様！」

「そんなに畏まらんでもよい。お主らは民を助けに来たようだの？」

「そうだよー、鈴々たちは義勇軍なのだ！」

「鈴々!？」

頭の後ろで手を組んだ小柄な少女が得意気に言うのを、
またも黒髪

の少女が慌てて嗜める。

「ほう、義勇軍か」

「はい。私は劉備玄德と申します。」

桃色髪の少女の名は劉備。

彼女に続いて黒髪 of 少女と小柄な少女が名乗る。

「わ、私は姓を関、名を羽。字を雲長と申します!」

「鈴々は張飛! 字は翼徳なのだ!」

「あの、詳しい話をお伺いしても宜しいですか……?」

自己紹介を終えた後、劉備が控えめに聞いてくる。

先程の現象の事だろうと理解した太公望は、ゆっくりと頷く。

義勇軍本陣――

本陣とは言っても立派な天幕があるでもなく、他の兵士から離れた所に場所を取っただけの簡素なもの。
そこにいるのは6人。

「わ、私は鳳士元でし！」

「はわわ……私は、その……諸葛孔明です！」

「お主ら……少し落ち着くがよい」

ちんまりした少女に一瞬あっけにとられてしまった太公望。

一方、呆れたような溜息をつかれた二人は更にアワアワしてしまう。
その微笑ましい光景に笑みを浮かべながら、劉備が質問する。

「それで、貴方は道士と仰いましたか……」

「うむ。そうだ」

「じゃ、じゃあさっきの風は、貴方が起こしたもののですね……
？」

「相違ないのう」

ほへー、と感心したように息をつく三人の小柄な少女たち。
それを横目に、今度は関羽が控えめに質問してきた。

「道士様、お名前を伺ってもいいですか？」

「わしは太公望。字などはないが」

「……」

「へー、字がないなんて珍しいのだ！」

名乗りを受けて張飛を除いた4人の動きが止まる。

ピシリ、と石化した彼女達に太公望と張飛が同時に首を傾げた。

「うん？ どうしたのだ？」

そして、石化から解けた彼女達が次第に口を開いていく。

「あ、あの……愛紗ちゃん、私の聞き間違いかな？ かな？」

「え……え？」

「あわわわ……き、きき、聞き間違いじゃないかと思いましゅ、ます」

「はわわ……え、あれ……？」

その様子に怪訝な表情を浮かべる太公望。

「どうしたのだ皆？」

「なんか様子がおかしいのう」

顔を見合わせた4人は、お互い頷き、再び質問する。

「も、もう一度お名前伺っても……？」

「聞いておらんかったのか？ 太公望と言ったのだが」

「あわわわわっ！？」

「はわわわわっ！？」

今度は絶対に聞き間違いではないことを悟ったチビツコ二人が卒倒する勢いで焦り出す。

直接質問した劉備でさえ、笑顔のまま再度固まってしまった。

そして関羽はというと……

「お、おのれ！　かの大賢者の名を語る俗物か！」

太公望をたたつ斬る勢いで青龍円月刀を振り降ろした。

「のわっ！？　な、何をする！？」

「あ、愛紗ちゃん！」

「愛紗、何してるのだ！」

「黙れ！　大陸の英雄の名を語る不屈き者め！」

ぶんぶんと振り回される鋭い刃を躲しつつ、太公望は何がなにやら言った感じで弁明する。
ちなみに、他の少女たちは関羽を止めようにも振り回される刃に近づけない。

「大陸の英雄だかなんだか知らぬが、わしは太公望だと言っに！」

「まだ言うか！ 太公望様はかつての英雄ではないか！」

「待て待て、かつての英雄とはどういう意味だ？」

少し距離を置き、肩で息をする関羽に問いかける。
が、答えはチビッコ二人組みから返ってきた。

「た、太公望様が生きてる筈ないですよ……」

「はわわ、過去の……周の国を支えた軍師様じゃないですか……」

「……はい？」

今度は太公望が固まった。

旅人は世界を見据え立ち上がる

幽州琢郡琢県――

ここは現在義勇軍の本拠地であり、逃げ出した県令に代わって劉備が治める土地。

民の救出を終え、無事帰還した劉備たちは先程現れた大陸の英雄――太公望を客間に招き、会談していた。

「……つまり、現在は漢という王朝である、と」

「は、はい」

「マジかい……」

桃香の言葉に頭を抱えてしまう太公望。
今までの、彼女たちから得た情報を整理する。

漢王朝、かつての英雄、大陸の英雄、大賢者、生きてるはずのない過去の軍師……

それらが生み出す答えを太公望は考える。
目を手で覆い……そして気づいてしまった。

（……此処は、元の世界よりも進んだ世界なのだ）

その事実として。

（女禍が保険として残しておいたもの……元の世界よりも時間が進んでいて当然、か。何故わしは頭になかったのだ）

そう、女禍が主流から切り離れたこの『世界』は、繰り返されてきた主流と違い、時間が進んでいる。

太公望はこの世界に来るにあたってそれを失念していた。

それでいて、今自分はなんと名乗った？

何年後かは知らないが、とうの昔の時代を生きた人物を名乗る者は怪しいに決まってる。

現在疑惑の目を向けられているのは、完全に自業自得なのだ。

「あー……その、なんというかだな」

「……で、何者なのだ？」

「……はあ。わしが迂闊だった。が、仕方ない」

ブツブツと独り言を言う男を不審な目で見る愛紗。

男は小さく咳払いすると、逃げも隠れもしないと言ったように向き直る。

「オホン……わしは太公望。間違いない」

「貴様……まだ！」

「待て待て。わしは本人だ。太公望本人なのだ」

「で、でも生きてるはずないじゃないですか！」

「道士は不老不死なのだ。わしが道士なのはお主ら自身の目で確認したはず」

「そ、それは……っ」

ピツと人差し指を立て、穏やかな声で話す。

（確かにこの男は風を操り、私たちを助けてくれたが……）

先程の、自分が体験した信じられないような出来事を思い出す関羽。しかしそれでも納得のいかないようで、なおも詰問を続ける。

「貴方が道士なのはわかりますけど……貴方がかの大賢者であるという証拠にはなりません」

「証拠……証拠、ねえ……」

いざそう言われてみても、自分が太公望であるという証拠はない。写真でもあれば簡単に解決するのであるが、この時代にそんなものが存在するわけでもなく。

証拠、と言われて考え込んでしまう太公望。

「証拠と言われてものう……」

「はわわわ、た、太公望様はあの六韜の著者ですよね？」

「六韜？」

六韜三略とは、太公望の著した軍事関係の書物。

それは時を過ぎてなお、孫子などと並んで偉大なものとして太公望の名を後世に遺すに至った書物。

「六韜を知らぬとは……やはり偽者か！」

「あわわわっ、で、でも……仮に偽者を名乗るとしても、六韜を知らずに名乗るとは思えませんよう」

「……確かに。太公望を名乗る以上、自分が書いたもの知らないとはおかしいが……」

「六韜、とはなんなのだ？」

目の前で慌てふためく、魔女帽を被った少女に質問する。

しかし答えたのは眉を潜めたままの関羽だった。

「……太公望様が著した軍略本だ。その内容故、太公望様の名を世に広めるに至った一冊……本当に知らないのか？」

「ふむ、軍略本とな？ わしが書いたと言えば、殷との決戦の際に武王に手渡した『コレ』であるが……」

武王という単語に反応する一同を尻目に、太公望はなにやら己の懐をガサゴソと漁る。

何が出るのか、と全員が注目する中……マヌケな効果音と共に太公望は一冊の本を取り出した。

「そ、それは……？」

「悪の戦争教本ボリウムワンだ！」

「はわわ、悪の戦争教本、ですか？」

「うむ。武王に直接指揮を採らせる際に渡した軍事マニュアルだ。六韜とは知らぬが、幾つものパターンを想定して書いてある」

ほれ、と手渡された一冊の本を四人が恐る恐る開く。
そして、小さな二人が一番大きな反応を示した。

「あ、あわわ、あわわわっ」

「こ、これって……」

「ど、どうしたの二人とも？」

突然青冷め始めた二人を見て焦る劉備。

「わ、私達の知っている六韜とは少し違いますが……恐らく六韜の元になったもの、かと」

「ええっ！？」

「す、凄いです……色んな戦局においての、最適な対応が細かに書かれて……あわわ」

「その時の武王はまだ一人で全軍指揮を採れる程ではなかったからのう。それに、むしろ仙道ではなく王自らが指揮を採る事に意味があつた戦故、細かく記す必要があつたのだ」

後に『牧野の戦い』と呼ばれる、周の時代を作り上げるに一役買った一大戦争。

数で劣るものの、見事な采配で大群を圧倒した戦を思い出しながら、太公望はウンウンと頷いている。

「こ、これは本当にあなたが……？」

「何度も言っておるだろうが。一冊は武王に渡した故、残りはそれしかないが。あと、証拠になる物は……」

再び懷をあさり始める太公望。

次に彼が取り出したのは、一枚の書状。

【太公望、軍師としてオメーに周軍の全てを任せるー姫発】

それは、周国を立ち上げた際に武王から下された辞令だった。

「こ、これって……」

「辞令だ。周の軍を一任する、とのう」

「姫発というのは……？」

「武王の名だ。文王……元西伯侯、姬昌の次男が姫発よ」

「で、では貴方は本当に太公望様で……太公望様は仙人様で……はわわわわ」

ぐるぐると目を回す小さな少女に苦笑いしつつ答える。

「落ち着けと言うに。わしは道士ながら軍師として周に従事した。尤も、わしが道士である事は知られていないようだがのう」

「で、でもこれは本当に六韜っぽい……ううん、完全に六韜の元になったもの」

「じゃあ……この御方は本当に、本物の太公望様……？」

「道士が不老不死だと言うのであれば、太公望様が今生きているのはおかしくない……」

そこでハツとしたように、四人は一斉に跪いた。

その光景に面食らった太公望が口を開こうとした瞬間、それを遮って次々と言葉が飛んでくる。

「も、申し訳ありませんでした！」

「かの太公望様とは知らず、御無礼をお許し下さい！」

「しゅ、すみませんでしたっ！」

「はわわ……」

必死に頭を垂れる少女たちを見て、太公望は諫めるでもなく、優しく声を掛ける。

「いや、信じられぬのも当然よ。だが、どうやら信用してもらえたようだの」

「は、はいっ!」

その様子を眺めていた張飛と名乗る少女は、一人ついてゆけずに立ちずくんでいた。

そして、彼女の発した一言で再び黒髪の少女から怒号が飛ぶことになる。

「皆どうしたのだ? そのお兄ちゃんはそんなに凄い人なのか?」

「鈴々!?!」

「たたた、太公望様、本当に申し訳ありませんでした」

「構わぬ。迂闊に名乗ったわしにも非があるしの」

「そ、そんな……とんでもありませんっ! 私は、太公望様に刃を……」

自分で言った言葉に血の気が引く関羽。

太公望は気にするな、と手で制しながら現状の確認をする。

「どうやらわしは時間の流れを把握しておらぬようだ。今は漢、という時代だったな？」

「は、はい！　今は漢王朝の時代でございます！」

「ふむ……漢、とな。それで、先程の賊は？」

「あわわ……あれは最近各地で暴れている賊です」

各地で、という事は恐らくそれなりに大きな規模であることは間違いない。
折角新しい国を立ち上げ、戦乱を鎮めた太公望にとってなんとも苦々しい現実だった。

「何時になっても争いは絶えぬ、か……わかつていた事だが。それで、お主らは義勇軍らしいが？」

「はい、私たちは賊を……ひいてはこの乱世を静めるべく立ち上がりました」

「ほう……お主らのような女子がのう……」

「それで、義勇軍として賊の討伐にあたっていたところ、此方で賊の出現を耳にして出陣しました。そして……」

「わしに出会った、というわけじゃな？」

「は、はいっ！」

未だに緊張している少女たちに質問し、臆気ながらも現在の状況を掴む。

頭の中で整理し、うんうんと頷く。

「漢王朝と言ったか……討伐に義勇軍が立ち上がる程の賊の規模という事は、王朝は既に衰えておるようだな」

「はい……官軍はいるものの、それでも手が回らない状態です」

「ふむ、そうであろうな。して、劉備と言ったか。お主がこの義勇軍を率いる者か？」

「は、はいっ！ あ……太公望様に御願ひがあるのですが……」

お願いがある、と言った劉備の目には、固い決意の光が宿っていた。

「なんだ？」

「どうか私たちに御力を貸していただけないでしょうか？」

「わしが？」

「私たちは乱世を静めて平和な世の中を作りたいと思って立ち上がりました」

照れくさそうに話す劉備の目を見据えたまま、黙って耳を傾ける太公望。

「皆が笑って暮らせるような世の中を作りたいんです。その為に、どうか力を貸して下さい！」

深々と頭を下げる劉備。

それに続くように、横にいた二人も頭を下げる。

「太公望様！ 私も同じ気持ちです！」

「鈴々もなのだ！ お兄ちゃんが凄い人なら、力を貸して欲しいのだ！」

未だにいまいち太公望の事をわかっていない張飛だが、周りの反応からとりあえず『凄い人』であると判断した彼女も頭を下げる。

暫く口に手を置いたまま考え込んでいる太公望。

返事がこない事に戸惑った劉備が答えを聞こうとする前に、太公望が静かに口を開いた。

「ふむ……平和な世を作りたい。お主達はそう言っただな？」

「は、はい！」

「詭弁、だのう」

「……え？」

その場に居た全員が固まった。
これまで信じてついてきた、主の理想、思想がたった一言で否定されてしまったのだから。

「争いごとはなくならぬよ。これは間違いない」

「……で、でも、話し合えばきっと分かり合えます！」

「では何故お主は剣を持ち立ち上がる？」

「っ……！？」

「その時点で矛盾しておる。それとも、お主は自分の身内又は仲間だけが笑っていらればよいのか？」

太公望の厳しい詰問に固まる劉備たち。
そんな彼女たちを無視して、更に言葉を繋げる。

「わしとて同じ気持ちであった。だから周の軍師として殷を滅ぼした……だが結果はどうだ？ 時が経った現在でも再び争いが起きている」

「……」

「いくら平和を願い、それを掲げたところで現実はそう甘いものではない」

「で、でも……」

「戦乱を鎮めるといふのであれば、これから大量の血が流れる。それも理解しておるのか？」

「っ……それでも！ 流れる血を少なくすれば……！」

そして真剣な目を向ける太公望。

その射抜かれるような視線を受けた劉備は身体が硬直する。

「では今は？ 戦乱を鎮める為に剣を取って戦う以上、死人が出る。それはどう思っておるのだ？」

「そ、それは……仕方のない事だと……」

「仕方のない、か……確かにそうなのう」

劉備の言う理想は、言ってみれば綺麗事。

少しでも流れる血を減らしたいという気持ちはわからなくもないが、戦乱の世に於いては甘い言葉に他ならない。

「お主の理想はよくわかった。そこであえて問うぞ？」

「な、なんですか……？」

「理想を語るには、相応の力が必要だという事はわかっておるか？」

「っ……！」

その言葉は、かつてのライバルから言われたもの。

立場は違えど、互いの掲げる理想、思想の為に切磋琢磨し、最終的に認め合った偉大なライバル……殷の太子、聞仲から言われた言葉。

太公望もこの言葉に戸惑い、悩んだ。

だがそれでも己の歩む道を信じて立ち上がった。

「お主の理想は綺麗事ではない。何故なら、覚悟が籠っておらぬからだ」

「覚悟……」

正直、目の前の少女には重い言葉である事は否めない。
それ程彼女の掲げる理想は遠く険しい道であるからだ。

「皆を、と言ったが……戦いを続けていけば当然自陣にも被害は出る。望まぬとは言え、犠牲は必ず生まれる」

「……はい」

「流れる血を減らしたいという理想は悪いものではない。が、それ故に道は厳しい。他の選択肢よりも遥かにのう」

「……」

「……それでも、お主はその道を諦めぬのか？」

全員が注目する中、劉備がゆつくりと顔を上げる。

そして、太公望の目を見据えてはつきりとした言葉で自らの思いを告げる。

「……諦めません。私は、どんなに厳しい道でも決して諦めずに……平和を目指します」

その言葉を聞いて、太公望は微笑を浮かべる。

「わかった。それならばわしも力を貸そう」

「ほ、ほ、本当ですかっ!？」

太公望の言葉に破顔する劉備。

他の四人も手を取り合って喜んでいた。

「だが条件がある」

「じよ、条件……？」

「うむ。決して掲げる理想だけを見ない事だ」

その条件に首を傾げたのは劉備だけではない。

他の四人も劉備と同じく、太公望の言葉の真意がわからずにいた。

「お主の掲げる理想は……乱世故に甘く、光輝いて見える。それ故、現実を見落としてしまう可能性が高い」

「現実を、見落とす？」

「うむ。平和の為とは言え、己のしている行動は人を殺め、その屍の上に立っているという事だ」

「……」

「それを理解せずにただ眩しい理想だけを追い求めるのであれば、足が纏れ、いつしか転んでしまうであろう」

「現実を見る……」

「そうだ。減らしたいとは言っても、流れる血は零ではない。それをしかと受け止める覚悟はあるか？」

目を足元に落としていた劉備は、再び顔を上げ……今一度宣言する。

「……あります。私は、現実を受け止めます。確かに私の行為で奪われる命もありますが……それでも！」

劉備の答えに満足そうに頷く太公望。

そして、彼女の前に手を差し出すと、こう告げた。

「よかるう。お主が道を踏み外さぬよう、わしが手伝いをする『風』
となろうではないか」

「……は、はいっ！」

「お主らもだ。主が道を踏み外しそうになったら、容赦なく立ち直らせるのだぞ？」

「わかったのだ！」

「はい！」

こうして太公望は、別世界に於いても、乱世を鎮めるべく再び立ち上がるのだった。

（やっぱりわしは甘い方が好きみたいだのう……聞仲、王天君）

自身の好敵手と半身に向けた言葉と共に、自虐的な笑みを浮かべる太公望だった。

太公望、竹簡の山に投げ出されること

「真名？」

少女たちと共に、再び戦乱の世を鎮めるべく立ち上がった太公望。そんな彼の耳に聞いたことのない言葉が飛び込んできた。

「はい。姓名や字と違い、その人となりの真実を表す名前です」

「ほう」

「例えば知らずに勝手に呼んでしまえば、その場で斬り捨てられても仕方のない程大事な名なんですよ」

太公望は素直に感心した。

少なくとも彼の生きる時代において存在しなかった風習である。

「成る程のう……して、そんな大事なものをわしに預けるといいのか？」

「はい！ 太公望様は私たちに御力を貸していただけるという事なので、信頼の証として受け取っていただけませんか？」

「うむ……わかった。そういう事であれば受け取るわけではないか」

「では改めて……姓を劉、名を備。字を玄德。真名は桃香です。宜しく願います」

「私は関雲長、真名を愛紗と申します」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！」

「わ、私は朱里です！」

「離里でしゅ！……あう」

それぞれの真名を受け取る太公望。

ふと、ある視線に気づいた。桃香たちが何やら物欲しげな表情を浮かべているのだ。

思案するでもなくその真意に気づいた。

「わしの名は太公望。真名というものは存在せぬが、太公望でも呂望でも好きに呼ぶがよい」

「真名がないのですか……？」

「うむ。わしらの時代において真名という風習はなかった故」

「わかりました。では改めて宜しく願います、太公望様」

こうして、太公望は桃香をはじめとする全員と真名の交換をし、共に歩んで行く仲間になった。

――

真名の交換を終え、いざ共に乱世を鎮めようと士気の高まる一同はそれぞれの仕事へと取り組みに掛かった。
そして、太公望はというと……現在執務室にいる。

「……なんなのだ、これは？」

大量の竹簡に埋もれて。

「太公望様は我々の軍師として協力していただけなんですよね？」

「それはそうだが……」

「実は私達だけじゃ処理しきれなくて困ってたんですよ……量多
くて」

テヘペロする桃香。

容姿と相まって、この彼女の行動は一般の男であれば心の臓を矢で
射止められること請け合いである。

しかし太公望は道士であるため、実は正体は100歳に近い老人。
加えて彼の色欲など限りなく薄い。どちらかというと甘味に対して
の方が執心。

なので、そんな桃香の様子をただただジト目で睨みつける太公望で
あった。

「これをわしに押し付けるのか？」

「いえ、もちろん朱里ちゃんと雛里ちゃんにも手伝ってもらいます
よ？ それに、愛紗ちゃんも」

「だからと言ってこの量は……」

目の前には竹簡の山が広がっていた。

とてもじゃないが一人では到底処理できる量ではない。

それを目の前に太公望は一人葛藤していた。

（何故だ！？ わしは元々骨休めのつもりでこっちに來たのだぞ！
？ なのに何故また政務などせにやならぬのだ！）

敢えて言う事でもないが、完全に自業自得である。

もとより軍師というものは文官であり、武官と違って政務処理が主な仕事。

なので、所謂デスクワークなるものは軍師にとって当然なのであるが……彼に言わせて見れば地獄の作業のほかならない。

何故なら彼は生粋の面倒くさがりであり、ダラける、怠ける事をまず第一に考える男だからだ。

そんな彼にとって目の前に広がる光景は地獄以外のなにものでもない。

「太公望様……ダメですか……？」

引き攣った顔で竹簡を睨む太公望を見て、恐る恐る声を掛ける桃香。

彼女の泣き出しそうな、申し訳そうなその表情を見て、太公望は大きく溜息をつき、そして諦めた。

自分で軍師を引き受けると言った以上、仕事を放棄するわけにはいかなかった。

「やれやれ……引き受けたものは仕方がないか」

「あ、ありがとうございます！ 助かります！」

「朱里と雛里をなるべく早く回してくれ。さすがにわし一人では終わらぬ」

「はい、わかりました！ えへへ……」

うって変わって二ヘラとだらしない笑みを浮かべる桃香を見て、太公望はある事を思い出す。
そして手をポン、と叩いた。

「ところでおぬし……太公望様というのはやめてくれぬか？ どうにも慣れぬ」

「え、え？ だって……太公望様は大賢者様ですし……」

「他の者は仕方がないにしろ、わしは仮にもおぬしの軍師だ。主たるおぬしがそこまで畏まる必要もあるまい」

かつての世界においても、太公望は色々な人と訳隔てなく接してきた。

そんな彼は色々な立場な人間から好かれている。

どちらかと言えば主従関係ではなく、仲間としての接し方に慣れ親しんできたのだ。

そんな彼にとって『大賢者』だの『大陸の英雄』だの『大軍師』などという呼び名は極めてむず痒い。

「で、でも……わかりました。太公望さん、でいいですか？」

「敬語もだ」

「う……わかりまし……わかった。これでいい？ 太公望さん」

大きく頷いた太公望に、桃香は再び破顔する。
そして照れくさそうに頬を掻いて部屋の入り口へと向かって行った。

「じゃあ朱里ちゃんと雛里ちゃん呼んでくるね、太公望さん！」

手を振って去っていく彼女を見て、太公望は一言。

「おのれは手伝わないんかい……」

やれやれと溜息をついた後、黙っていても仕方がないので目に付いた竹簡から処理していった。

政務を始めてから半刻、太公望は現在の状況を整理していた。
現在の状況と言っても、それは目の前の政務の事ではなく……

（この世界に在る矛盾はなんなのだ？）

太公望はこの世界に違和感を感じていた。
それを感じ取ったのは、桃香たちに名乗った時。

「桃香たちは……この世界の住人はわしの事を知っておる……いや、
わしではなく『太公望』の事だのう」

彼女たちは太公望の名を知っていた。かつての英雄、古の軍師であると。

「周に従事したのもどうやら史実か……となると、この世界の『太公望』はどうなったのだ？」

この世界は、女禍が主流から切り離したものである為、言ってみれば……元の世界の『歴史の一部』でしかない。

その『歴史の一部』が女禍という『道標』を外れ、独自に進んだ世界が現在太公望がいる世界なのだ。

つまり、元が同じである以上は太公望だけでなく仙界も存在した筈となると、この世界にはもう一人『太公望』がいてもおかしくないのだ。

「いや待てよ……女禍が保険として切り離した世界に、わざわざ障害をおいておくか？」

否、それは有り得ない。

何故なら……女禍の障害と成りえるのは彼女と同等の力を持つ『始祖』、つまりは伏儀しかない。

自身にとって最大の懸念材料を残しておく意味はないのだ。

尤も、最終決戦まで『伏義』の存在は気づかれてなかったのではあるが。

「女禍が『伏儀』として立ち上がる前に『太公望』として処理し

たか、或いは……この世界における『太公望』とは単なる人間で、
周の軍師以外の何者でもないか……うーむ」

先の桃香達の反応を見る限り、少なくとも仙道の類は決して在り得ぬものではないとわかる。

信仰心の強い者だけでなく、桃香たちも戸惑ってはいたものの決して否定的ではなかった。

仙道というのは、本来『始祖』の力を色濃く受け継いだ者たちの事。というのであれば、この世界にも『始祖』は存在したという証拠。

この世界について、現在考えられる可能性の中で尤も合理的な答え

――

【ここは女禍が障害と成りえる者を排除し終わった後、本来の歴史の『一部』を切り離した世界。】

そして、太公望はその仮説を前提として生ずる謎を纏めた。

- ・女禍がどのようにして『歴史の一部』を切り離したのか。
- ・切り離れた『歴史の一部』と、元の世界との関係。
- ・この世界における、『始祖』をはじめとする仙道の有無。

「むう……王天君を残してきて正解だったようだな。どうにもキナ

くさい」

ガリガリと走らせる筆を置き、天井を見つめる。

結論を導くには情報が圧倒的に足りない。

故に、この世界について調べなくてはならない事は山ほどある。

なのだが……

「当面の課題はこのアホのような量の仕事だのう……」

とりあえずは目の前に広がる桃香に半ば投げ出された政務を処理しなければならぬ。

考える事はたくさんあるが、今はそれどころではない。

「オラオラ竹簡どもよ！ とにかく今はおぬしらから処理してくれ
る！―」

異常なスピードで筆を進めていく太公望であった。

……彼は決して壊れていない事をここに記しておこう。

大徳と蜀の忠臣

朱里と雛里はとある部屋に向かっていた。

幼いとは言え、軍師を勤めている二人にも当然担当する仕事がある。

その内の一つが政務処理。

桃香に指定された部屋へと向かう二人だったが、その顔には緊張の色が伺える。

理由は、そこで既に政務を処理しているであろう太公望にあった。

軍事学や政治学を学んできた彼女たちにとって、太公望という人物は神に等しい程の偉人。

その人物と共に働けるといふのだから緊張して当然といえる。

「し、失礼しましゅ……あう」

「お、お、お手伝いにきました！」

緊張しすぎの朱里と盛大に噛んだ雛里が落ち込みながら部屋に入ると、そこにあるのは竹間の山、山、山……

尊敬する人物はその山の一角で一心不乱に筆を進めていた。

「おお、雛里と朱里ではないか。待っておったぞ」

「ひゃ、はいっ！」

「緊張せずともよいと言つに……とりあえず座るがよい」

「す、凄い量ですね……」

これも全ては逃げ出した県令にある！ とぼやきながら筆を進める太公望を見た二人は、いそいそと着席し筆に手を伸ばす。そして山の一角に手を伸ばそうとした時。

「あー、そつちは既に終わつておる」

「ふえっ！？」

「ちなみにこつちとこつちも終わつておるよ」

太公望が指をさしたのは、いくつかの竹間の山。それらが全て終わつていふというのだから驚きである。

「こ、この量を終えたんですか……？」

「まだ残つておるがな。二人にはこつちのから始めてもらつ」

「は、はいっ！」

本来だらけ者であり怠け者ではあるが、太公望自身の政務処理能力

は飛び抜けていた。

朱里と雛里がその手際の良さに感心していると、その視線に気がついた太公望が微笑む。

「わしがこうして手早く仕事を終えるのには訳があるのだ」

「訳……？」

太公望という賢者は、軍略だけでなく政務をこなすスピードにも長けている。

その圧倒的な能力を発揮する理由、と聞いて目を輝かせる二人。しかし、返ってきた答えは完全に予想外だった。

「少しでも早くダラダラした生活を送る為よ！」

筆を二人にビシッと向け、高らかに言い放つ。

当の朱里と雛里は啞然としていたが、太公望にとっては至極当然の言い分。

——彼はダラダラした生活を送る為には労力を惜しまない人間なのだ。

「ふいー、ある程度片付いたのう」

「大分減りましたあ……」

三人で仕事を始めて一刻後、山のようにあつた仕事はある程度まで減っていた。

尋常ではないスピードで処理していく太公望を横目に、朱里と雛里もせっせと進めていた結果だ。

太公望に加え臥龍と鳳雛という、大陸きつての実力者三人の共同作業による政務のスピードは恐らく古今東西最速である。

「どれ、ここいらで休憩でもするかの」

「た、太公望様……お聞きしたい事があるのですが……」

「む、なんだ？」

もじもじと言い辛そうにしている朱里。

何やら顔を赤くして『ああ……』とか『うう……』とか呻っていたが、やがて意を決したように口を開いた。

「せ、仙人様のお話や、太公望様のお話を聞かせて下さい！」

「わしの？」

「は、はい。太公望様は『時間の流れがわからない』と仰っていたが、これまで何をしていたか……とか」

朱里の質問に太公望は内心舌を巻いていた。

会話の中で重要と思われるポイントをしっかりと押さえている。一目見て六韜の原本だと気づいたその知識だけでなく、その能力に……やはりこの二人は相当の逸材であると再認識させられた。

「では休憩がてら話すとするか」

「お、お茶を淹れてきましょうっ」

「あー……よい。三人で食堂でも行くか」

未だに噛みまくりな雞里の頭を一撫でし、優しく微笑む。
そして三人は休憩を兼ねて食堂へと向かった。

――

食堂に席を移した三人を待っていたのは、桃香と愛紗、鈴々。

彼女たちもまた自分の仕事にひと段落をつけて休憩しているところだった。

あの量をほぼ終えた事に驚いていた桃香と愛紗だったが、これから太公望の話を聞くということで同席する事に。

お茶を一啜りし、太公望が開口一番言った言葉は……

「話をするのは構わぬ……タダで、とはいかんのう」

黒い笑みを浮かべる太公望と呆ける五人。

なんと言ったらいいのか……あろう事が太公望は何十歳も年下の少女達にたかるのだった。

暫く固まっていた面々のうち言葉の意味を理解した桃香が聞く。

「な、何か条件があるの？」

「うむ。世の中ギブアンドテイク、持ちつ持たれつよ」

「でも、私達何も持ってないし……」

手でお金マークを作る太公望と困ったように慌てる桃香。

なんとも大人気ない老人である。

その時、鈴々が空気をぶち壊す勢いで勢いよく手を挙げた。

「鈴々、さっき桃饅頭買ってきたのだ！」

「鈴々……お前じゃないんだから、桃饅頭などで太公望様が……」

「よし、なんでも聞くがよい」

「「嘘おつ!?!」」

予想外の即答に愛紗と桃香が同時にツツコミをいれる。

この男、甘味には目がないのだ。

「わしは桃と甘味が好物だ、覚えておくがよい」

鈴々から貰った桃饅頭を頬張る彼に思わず苦笑いが出る一同。
大陸の英雄とも称される男を庶民的で身近に感じる事ができた瞬間だった。

「無論、話せない事は伏せるが……それでもよいか？」

「は、はい!」

「よし、では朱里と雛里。聞きたい事はあるかの？」

一通り桃饅頭を堪能した太公望は手を拭いて一息入れる。
そしてこの場のきっかけを作った二人を促し、まず朱里から最初の質問を受けた。

「先程も言いましたが……『時間の流れがわからない』というのは……?」

「うむ。それについてなんだが、わしが不老不死の道士である事は覚えておるな？」

全員が頷く。

本当であれば信じ難い事実であるが、実際に目の前で風を起こされたのだから信じざるを得ない。

「わしは殷を滅ぼした後、周を武王と周りの人間に任せて旅に出たのだ」

正確には女禍との戦いの後、であるが……女禍をはじめ、仙界大戦やその類の話を伏せる事にした。

理解しきれないだろうし、色々と不都合が生じて後々困るからだ。

「そして旅の途中、誰にも邪魔されぬ空間において眠りについたのだ」

「誰にも邪魔されない空間ってどこなのだ？」

「詳しくは話せぬが、道士であるわしにしか入れぬ空間よ」

誤解のないように説明しておくが、仙人や道士とは言え空間に干渉できる能力を持つのは『始祖』の一人である彼だけなのだ。

ある意味では十天君も『自分だけの空間』を使えるが、ここでは省

かせてもらっつ。

「そして眠りから覚め、再び旅をしようとした時に出会ったのがおぬしたち……というわけだ」

「にやはは、何百年も寝てるなんて、お兄ちゃんはねぼすけさんなのだ」

「鈴々！」

正直な感想を述べる鈴々を叱る愛紗。

太公望はその率直な言葉に思わず苦笑いしてしまう。

「故に時間の感覚がなかったのだよ。わしもまさかこんなに時代が流れているとは思わなんだ」

「太公望様は斉の国に奉じられたのではないんですか？」

「雖里、それはどこから聞いたのだ？ 確かにわしは大公に任せられたが……」

「あわわ、歴史を知っていれば誰でもわかりますよう……」

「ふむ。だがわしは断ったぞ？ どうやらそれは偽の情報らしいのう」

え？ と驚く雛里。

「やっとこさ全てを終えたと言うのに、大公など面倒な役職に就く
気があるわけなかるうに」

「め、面倒……」

「なんか……太公望さんの印象、大分変わったね」

「それだよ桃香」

いきなり指をさされた桃香は何事かと思う。

そして太公望は机をバンバンと叩きながら演説を始める。
なにやらご立腹の様子。

「そもそも、だ。わしは自他共に認める程の怠け者よ。それなのに
も関わらず、周りの人間は全てをわしに押し付ける……次から次へ
と問題を回しおって！ わしは便利者ではないのだ！」

封神計画や周の軍事行動……仙界大戦においては十二仙を束ねる総
司令に抜擢された。
その度に彼は奔走し、自由に動き回る周りの連中に頭を悩ませてい
た。

太公望なら出来る、太公望なら任せられる……そういった中で彼は
働き続けてきたのだ。

全員がプンスカと怒る太公望を呆然と眺めている中、見かねた愛紗が話題の転換を図る。

「そ、それで……太公望様は何故道士の身でありながら、周に仕えていたのですか？」

ある程度怒りが収まったのか、太公望はゆっくりと息を吐いた。そして、桃香をチラリと見て質問に答える。

「はあ……桃香と同じよ」

「え？ 私と同じ……？」

「うむ。おぬしと同じように、乱れた世を鎮める為に周に仕える事にしたのだ。当時の殷は圧政を敷き、民が虐げられていたからの」

彼が下界に降り立ったのには封神計画というモノがあったが、これも省略。

「そうだったんですか……」

「わしは元々争い事を好まぬ。だから一時は軍に参加する事に抵抗があったのだがのう……それでも、平和な世の中を求めて決意したのだ」

太公望の言葉を真剣に受け止める桃香。

本来太公望は争いごとが嫌いである。

戦の大小ではなく、争いごとそのものが嫌いなのだ。

そんな彼の良き理解者だった普賢が『返しのない釣り針』をプレゼントしたのだが……これが後世にも残る有名な逸話の一端となった。

「平和を求めつつも自分のしている事に常に矛盾を感じておった。それでも立ち止まるわけにはいかんかった」

「……」

「結果として殷を滅ぼす事は叶ったが、平和は一時的なものでしかなかったがのう……無意味と言われたらそれまでよ」

自虐的な笑みを浮かべる太公望。

それがあまりにも痛々しくて、思わず否定してしまう一同。

「そんな！ 太公望さんのした事は無意味なんかじゃないよ！」

「そ、そうですね！ 素晴らしい功績を残したから、偉大な人として語り継がれてましょ！」

「そうですね！」

矢継ぎ早に飛んでくる否定の言葉に、一瞬あつけにとられる太公望。そんな彼女たちを見て……この少女たちは本当に心優しいのだ、と思ひ笑みが零れる。

「そうであればよいのだが……他に聞きたい事はあるか？」

「はいはい！ お兄ちゃんはどうやって風を起こしたのだ？」

「そう言えば……術か何かなんですか？」

「術ではない。あの風はこれを使って起こしたのだよ」

太公望が懐から取り出したのは、教鞭のようなもの。

「棒なのだ」

「その棒に不思議な力があるの？」

桃香と鈴々の悪気のない辛辣な言葉に口元が引き攣る太公望。

一見、先端に奇妙な球形の異物がついている長つちろいだの棒……

…実はこれこそがスーパ―寶貝。

世界に七つしかない、対女禍用に創られた古代兵器……なのだが、彼女たちから言わせればただの棒らしい。

「棒って……これは寶貝と呼ばれる物だ。仙道の持つ生命力を吸って『奇跡』を起こす特殊な道具よ」

「寶貝、ですか」

「うむ。それぞれに固有の能力が備わっており、例えばこの打神鞭は知つてのとおり風を操る事ができる。その寶貝によつて……炎を起こしたり、水を纏つたり、空を飛んだり……とまあ、様々な力を得ることが可能だ」

太極図というスーパー寶貝つきである事はとりあえず伏せて説明する。

そして色々な能力がある、と聞いた鈴々が目を輝かせて迫ってきた。

「それを使えば鈴々でも風を起こせるのだ！ 使つてみたいのだ！」

「ところがそうもいかぬのだ。これは仙道にしか扱えぬ」

「え？」

「仙道以外の……普通の人間は持つただけでも力を吸われ絶命する。しかも、わしのコレは少々特殊での、おぬしらは触れた瞬間に木乃伊になってしまう代物なのだ」

触れた瞬間木乃伊、という言葉にゾッとする一同。

雛里と朱里に至っては小刻みに震えている。

太公望が使っているのは、寶貝の中でもスーパー寶貝という余りにも危険な代物だった。

「そんなぁ……」

「というわけで、悪戯にこれに触れぬように言うておくぞ。もし間違つて触れて命を落としても責任を取れぬ故」

ケケケ、と悪そうな表情で笑う太公望だったが、彼女たちにしてみれば笑えない。

全員が高速で首を縦に振る様子に満足した太公望。

……この老人、やはり大人気ない。

「あと聞きたい事はあるかの？」

「うーん……」

「軍事学や政治学について、いいですか？」

「うむ、それはこれから個人的に話をすると言う事でよいか？」

「はい！」

キラキラと目を輝かせる朱里と雛里。

二人からしてみれば目の前にいる太公望は知識の塊のような人物なのだ。

しかし、朱里と雛里に和んでいた食堂にその空気をぶち壊す一報が飛び込んできた。

「も、申し上げます！ 捕虜として捕らえていた黄巾賊が脱走しました！」

――

資金も人でも不足している桃香たちは、捕獲した黄巾賊たちを官軍

に引き渡す手筈を取っていた。

そして、つい先日捉えたばかりの賊が脱走したというのだ。
捕虜脱走の報告にいち早く反応したのは愛紗。

「なんだと！？ 見張りはどうした！？」

「そ、それが……少し目を離れた隙に逃げられたようで……」

言い辛そうにしている兵士に、太公望は冷静に聞く。

「人数は？」

「二人です！」

「して、捕虜は外に逃げたのか？」

「いえ、街の入り口には見張りがいるので……」

小さな街だとは言え、警備はしっかりと配置しており門番も常に置いている。

「と言う事は、まだ街中におるか……」

太公望の言葉に焦ったのは愛紗と桃香。

脱走した捕虜が街中にいた場合、万が一ということも考えられる。

「民に被害が出るかも知れません！ 桃香様！」

「うん、手遅れになる前に搜索隊を出そう！」

顔を青くさせ、食堂を飛び出そうとしたところにまたもや伝令が飛び込んできた。

それは……誰もが予想していなかったもの。

「も、申し上げます！」

「今度はなんだ！」

「は、はい……脱走した捕虜が面会を希望しております」

「……はえ？」

報告を受けた一同は県庁の入り口に来ていた。
朱里と雛里については、危ないということで念の為に室内に待機させている。

鈴々が桃香に、愛紗が太公望にそれぞれ護衛として張り付いたまま外に出ると……

多くの兵士に囲まれた、黄色い布を身につけた二人の男が平伏していた。

「その人たちが……脱走した捕虜の人？」

「はっ、我々が気づいた時にはこうして此処で平伏しており……捕らえようにも抵抗するのです」

その言葉に反応した愛紗が堰月刀を握り締め前に出ようとしたが……
…太公望に手で制された。

「太公望様……?」

「ふむ。おぬしら、一体なんの真似なのだ?」

威圧するでもなく、なんでもないかのように問う太公望。
そして二人の男は顔を上げてそれに答える。

「はい。我々は仕官したく、ここまで来ました」

「仕官? お主らは桃香達に捕まったのでは?」

「はっ、関羽將軍の武に惚れ、不肖ながらお仕えしたいと思いました」

顔を上げた二人の男。

愛紗はその顔をなんとなく覚えていた。
朱里と雛里の策によって瓦解する賊の中、最後まで奮闘した二人だった。

「愛紗ちゃん、覚えてる?」

「……ええ、次々と投降する中で最後まで戦っていた者たちです」

「あー! 二人がかりだけど愛紗とやり合ってた人たちなのだ!」

二人の証言で桃香もハツとする。
為す術なく崩れていく賊の中で、果敢に攻めてきた二人を思い出したのだ。

「はっ！ 我々は関將軍に負けて捕らえられました！」

「それでおぬしらは我々に仕えたい、と言っただな？」

「はい、劉備様の噂は常々聞いてました」

「是非我らを登用していただきたい！」

（ふむ、愛紗とやり合ってたという事は……それなりに武があるか）

懇願する二人の男を見ながら太公望は考えていた。

「桃香よ、この者達は悪しき者ではないと思うが」

「太公望様！？」

「愛紗、賊というのもそもそも不満を持った民が発祥だ。中には欲に塗れた連中もおるであろうが、この者たちは桃香の事を知って再び立ち上がった……まあ、だからと言って賊に成り果てた以上は賊のほかならぬがのう」

「それは……」

「……そうだね、私の考えを知っていて訪ねてきてくれたのなら、断る事もできないよ」

太公望と桃香に諭されて、愛紗は渋々ながらも納得したようだった。

「おぬしら、桃香の理想を知っておるのだな？」

「はい！ 劉備様であれば信ずるに値する御人であると思ってます！」

「我々は生きる為に賊をしていましたが……それも今日限りです」

虐げられた民は二通りに分かれる。

座して死を待つか、彼らのように生きる為に賊と成り下がるか。

乱世においてはこれが如実に現れ、仕方がなく賊に成り下がる民は決して少なくない。

太公望はそれを知っているし、桃香もまた自分を頼ってくる者を拒んだりはいしない。

「わかりました、あなた達の力を私に貸してください」

「……よろしいのですか？」

「うん、太公望さんが言うならきつといい人だよ！」

笑顔で言い放つ桃香に面食らう二人の男。

賊として敵対し、仕官する為とはいえ脱走した捕虜の身分である自分たちを笑顔で迎え入れる少女の姿に、いたく感銘を受けた。そして彼らも再び平伏して声を上げる。

「ありがとうございます！」

「今日より、我らは貴女達に仕える槍となりました！」

それを見た太公望は愛紗に目配せをし、気づいた愛紗が罰が悪そうに微笑んだ。

劉備玄德という人間は、良くも悪くもこういう人間なのだ。

「おぬしたちは今日から仲間だ。わしは太公望、おぬしらの名は？」

太公望、と聞いた二人は顔を見合わせ……そして何やら焦ったような表情を浮かべる。

そして、右側の男が名乗った。

肌は浅黒く、立派な髭を貯えている。

「はっ、周倉と申します！」

「周倉か。しておぬしは？」

「はっ、廖化と申します」

次いで、背の高い端正な顔をした男が廖化と名乗った。

「わかりました。周倉さん、廖化さん、宜しくお願いします」

「はっ！」

こうして、周倉と廖化という二人の男が新たに義勇軍に加わったのだった。

実はこの二人、これから劉備軍の忠臣として最期まで活躍するのだが……それはまだ先の話。

ちみつこ軍師と怠けモノ軍師（前書き）

今更感が否めませんが……この物語に一刀くんは出てきません。

一刀くん好きな方、ゴメンなさいです。

ちみつこ軍師と怠けモノ軍師

「農作業、ですか？」

会議室では幹部による朝議が行われていた。

議題は義勇軍の今後の方針について。

太公望は円卓を囲うように座っている彼女たちの周りをグルグルと歩きながら、桃香の問いに答える。

「うむ。わしらに不足しているモノがなんだかわかるか？」

「えーと……兵力と兵糧、ですか？」

「正解だ、雛里」

現在の桃香達義勇軍は兵の数と兵糧が絶対的に不足していた。

将と軍師という点においては粒が揃っているのだが、これだけではどうしても官軍に劣る。

というわけで、まずは義勇軍故の弱点をどうにかしようと思いついたのだ。

「資金が足りませんからね……」

愛紗が俯きがちに呟いた。いくら力を持っていようと、資金がなければ何もできない。

桃香と愛紗、鈴々は当初三人で旅をしていたのだが……それはそれは貧乏な旅立ったそうなの。

それゆえ、愛紗の呟きで三人の目が濁ったのも仕方のないこと。

「そこで、兵に軍事練習を兼ねて農作業をやらせるのだ」

「なんでなのだ？」

「兵農一体。畑を耕すことは身体を鍛える事にもなるし、農具と武器は扱いが似ておる」

兵農一体――

兵糧を増やすことができるうえに、武器の扱いにも慣れる。殆どが一般の民草出身の義勇軍にとって一石二鳥なのだ。

「しかも兵糧を増やす事にも繋がる……」

「うむ。かつてわしが西岐軍において発案したものだ」

屯田兵とも呼ばれる兵種なのだが、その呼び名はもう少し後の時代のもの。

いずれにせよ、このアイデアが画期的である事に変わりないのだ。

「わしらは官軍に比べてどうしても劣る。そこは自ら補っていくしかないのだ」

「そっか、今後の事を考えてって事だね！」

「そうだ。愛紗と鈴々はこれに従事してくれ。周倉と廖化を使ってよい」

「わかったのだ！」

勢い良く部屋を飛び出そうとする鈴々。

その様子を呆れたように眺めていた愛紗に太公望が耳打ちする。

「愛紗よ。モモを作るのを忘れるでないぞ？」

「はぁ……モモ、ですか」

コッソリと自分の好物を指定する太公望なのであった。

「では、わしからは以上だ」

「他に何かある人いる？」

全員が首を振る。

それを見た桃香は勢いよく立ち上がり、閉議の旨を伝えた。

「よし、じゃあ朝の会議はこれで終わり！ 今日も一日頑張りましょー！」

満面の笑みで宣言する桃香にそれぞれが独自の返事をする。

軍の会議には見えない光景だが、ある意味これが『彼女たちらしさ』の一端でもある。

「朱里と雛里。これからわしが軍事、政治に関する講義をするから残っておるように」

各々会議室を出て行く中、二人を呼び止める。

「は、はいっ！」

「宜しく願いしましゅっ！」

指名された二人の相変わらぬ慌てように、太公望は微笑を浮かべるのだった。

「さて……ではコレより太公望マルヒレッスンを開始する！」

「はい、太公望様！」

会議を終えた太公望は朱里と雛里を部屋に残し、マルヒレッスン……
…もとい政治学及び軍事学の講義をすることに。

机を挟んで対面に座り、元気に返事をする二人。
学のある者であれば誰しものが憧れる、かの偉人から講義を受けることができる……とあって二人の目はキラキラと輝いていた。

「……のう。桃香にも言ったが、その『太公望様』ってのはなんとかならぬのか？」

「はわっ！？　ダ、ダメでしたか……？」

「いや、ダメってことはないのだが……様付けはどうにも慣れなくてのう」

二人からしてみれば、大陸の英雄と呼ばれる太公望に対して敬意を示すのは当然である。

故に、様付けになるのも至極当然の事なのだが……当の本人はどうにもむず痒そうにしていた。

「太公望様はなんと呼ばれていたのですか？」

「普通に『太公望』か『太公望師叔』だったな」

「師叔、というのは……」

「自分の師匠の弟子にあたる者に対しての敬称だのう」

太公望はこう見えても原始天尊の一番弟子であり、色々な者達から師叔の名で呼ばれていた。

ナメられがちではあるが、立場的に言うと実は結構偉いのである。

「では……師叔とお呼びしても宜しいでしょうか……？」

「そうなのう……正確に言えば意味が違ってくるのだが、まあ様付けよりはよいか」

師叔と呼ぶには立場が違うのだが、様付けよりはマシと判断してこれを了承。

「あ、改めまして宜しくお願いします！ 太公望師叔様！」

「雛里……それでは変わってないぞ」

「あう……」

帽子を深く被り直し、真っ赤に染まった顔を隠す雛里。

太公望は苦笑いしながら頭を撫で、気を取り直して講義を開始すること。

「オホン。では先ずはじめに……戦において尤も基本的な事はなんだかわかるか？」

「えーと……兵力は相手よりも上である事、でしょうか？」

「うむ。それは兵法の基本ではあるが……これは心構えに対しての質問だ」

「心構え……？」

「そうだ。『戦わずして勝つ』。これはわしが軍師として掲げる理念であり、目標でもある」

太公望はこの理念の下に策略を張り巡らせてきた。

無益は血は流さないに越したことはない。

この考えにより賛同する仲間が増えたが……これこそが他者に『甘い』と評価される所以。

「成る程……」

「無駄な戦闘を避けることは兵や兵糧の消費も防ぐ」

「でも、そのような事が可能なのでしょうか？」

朱里の質問は尤もだ。

この考え方は、ある意味殲滅任務よりも難しいといえる。

「朱里。それを可能にさせるのが軍師の仕事よ」

「あ……は、はいっ！」

「戦わずして勝つ……兵農一体……勉強になります」

元氣良く返事をする朱里の横では雛里が一生懸命にメモをとっていた。

その姿は、太公望の自称で師だった天然道士を彷彿とさせる。

「では次に、実際に戦闘になった場合の兵の動かし方だが……」

どこから取り出したホワイトボードに敵と味方の陣を描いていく。……時代錯誤と言われてしまえばそれまでだが、あまり気にしない事を強くお勧めする。

「は、はい……両翼から挟み込む、ですか？」

「ふむ。雛里は？」

「そうですね……この場合、突破力のある騎兵で正面から当たった方が……」

「二人とも正解だ。これはどちらでも対応できるように布陣しておく」

正反対ともとれる二人の意見だが、実は二人とも正解なのだ。

要はどのように兵を動かすことが最も効果的であるか、それを判断するのが軍師として大事な役割である。

（ふむ……この二人、思った以上に優秀のようだのう）

太公望は二人の洞察力と判断力に感心する。

容姿こそ幼い少女ではあるが、その実とんでもない切れ者なのだ。

「では、この場合はどうだ！」

「鶴翼……でしょうか」

「私もそう思います」

「ではコレ……！」

「「ぴいっ!？」」

尋常ではないスピードで次々と仮想の陣を描いていく太公望。
朱里と雛里はその凄まじい勢いに小さく悲鳴を上げるのだった。

（何故このような者たちがわしの時代におらんかったのだ！ さすればもつと樂をできたと言っに……!）

とんでもなく理不尽な事を心で叫んでいるのだが……

その表情は非常に嬉しそうな顔をしていた。

臥龍と鳳雛という、軍師として優れた才能を持つ二人への師事は太公望にとって楽しい時間となる。

――

講義を始めてから数時間……

太公望はとても満足気な表情を浮かべていた。

「うむ……やはりお主らには才能があるのう」

「そ、そんな……」

「謙遜するでない。わしが在籍していた時代であれば間違いなく幹部級に抜擢しておっただろうな」

太公望が在籍していた……周軍と昆崙。

仙界大戦の事は伏せているが、この二軍に於いて軍師及び最高司令官の任を担っていた。

兵の数も然る事ながら、何に於いても優秀な軍師が不足していた。故に彼は一人で奔走し、多忙な業務に追われていたのだ。

「ところで……わしの見立てによると朱里は政治、雛里は軍事を得意としておるようだの」

「そ、そうですか……？」

「うむ。役割分担が出来る事はいい事だ。これからお主らにはそれぞれ得意分野を伸ばしてもらおうと思う」

レッスンを進めていくうちに二人の特性がわかってきた。

朱里は政治学に優れ、雛里は軍事学に優れている。
同じ参謀としても、内政と軍略という別の分野での活躍が期待できた。

「そこで、お主らは良い物を授けよう」

そう言いながら太公望が懐を漁ると、またもマヌケな効果音と共に二冊の本が取り出された。

『一体この服のどこにそんなスペースがあるのか?』という質問は受け付けないのであしからず。

「こ、これは……!」

「『悪の戦争教本ボリウムツー』と『正しい政治教本ボリウムワン』だ!」

ゴオッ、と腕を振りかざして説明する太公望の顔はどこか得意気である。

ネーミングセンスについてもこの際おいておく。

これは二人に託すべく太公望が著した教本。

その名の通り軍略及び政略に関する様々な内容が事細かに記入されているのだ。

「すごい……効率的でわかりやすいです……」

「うむ。わしのダラダラ生活はおぬしらの働きに懸かっておるからのう」

「ダ、ダラダラ生活、でしゅか?」

「おぬしらが成長すればわしも働かなくて済むからのう」

わーははは、と高笑いする太公望と石化する二人。

「なに、期待の顕れよ」

動機は不純だが教本自体は素晴らしいもので、これを製作するのに彼は徹夜をした。

因みに『期待の』割合は……二人の成長が6割、それに伴う自分への負担減少が4割である。

ともあれ、朱里と雛里の太公望という偉人のイメージがまたしても良い意味で壊れていったのだった。

ちみつこ軍師と怠けモノ軍師（後書き）

さて、順調に書き溜めが減りつつありますが……

とりあえず投下できるだけ投下していきます。

風と舞うは龍

太公望は相変わらず政務に励んでいた。

彼を知る者であればこの働きぶりに度肝を抜かれる事請け合いなのだが、彼としては『ダラダラした生活』を一刻も早く送る為、一心不乱に取り組んでいるのだ。

「愛紗、軍の人事についてだが」

隣で太公望の仕事を手伝っていた愛紗に声を掛ける。

「総大将は桃香、將軍の地位におぬしと鈴々。わしが参謀総長で朱里、雛里が補佐……という構成でよいのか？」

「そうですね、問題ありません」

「よし。では編成はとりあえずこれでよいな」

数は少ないとはいえ、軍を名乗る以上編成はしっかりとしていなければならぬ。

役割がきちんと決まっている事は組織としての基本である。

「太公望様、先日登用した二人はどうします？」

その二人とは周倉と廖化。

登用してからというものの、彼らは熱心に鍛錬に取り組んでいる。
愛紗や鈴々には劣るが武人として申し分のない実力を持っていた。

「うむ。周倉についてはおぬしの副官に就けようと思うのだが」

「私の、ですか？」

「周倉は愛紗の武に心酔しておるようだし」

「わかりました。太公望様のご判断であれば、私からは何も言う事は
ありません」

周倉も廖化も信用に値する人物であると判断した太公望。
加えて二人とも武芸に秀でているので、副官としての活躍に期待していた。

太公望の洞察力を信じている愛紗は意見するでもなく受け入れた……
のだが。
なにやら愛紗の態度に眉を潜める太公望。

「……どうかなさいました？」

「……愛紗よ、お主はちいと固いのう」

太公望の指摘する通り、愛紗は常々桃香や鈴々達に『頭が固い』と言われてきた。

「そ、そんな事は……私は武人として、軍に携わる者として……」

「その考えが固いと言つに。もっと力を抜いたらどうだ？」

「力を、ですか」

「わしにももつと砕けて接して構わぬよ。鈴々を見る」

鈴々は太公望に大して敬語を使わない。あまつさえ『お兄ちゃん』と呼んでいる。

様付けや敬語を苦手としてはいるものの、流石に妹属性はなかった。

「あそこまでとは言わぬが、もう少し肩の力を抜かぬと視野が狭まるぞ？」

「う……は、はい」

真面目すぎる性格は時として視野を狭める。

生粋の武人である愛紗にとって、中々直るものではないのだが……
太公望に言われては仕方がない。

「お主は器量よしなのだ。余り気負うでない」

「そ、そんなっ！」

太公望の褒め言葉に真っ赤になる愛紗。

武人として生きてきた彼女の褒められ慣れていない様子に、苦笑いしてしまう。

愛紗がアタフタとしている時、執務室に廖化が入って来た。

「失礼します。太公望様、よろしいですか？」

「うむ、どうかしたか？」

「実は……私と周倉が従事していた軍の本隊が動いたようです」

「本隊？」

「はっ、我々は別働隊として参加していたのですが……どうやら本隊が別の地へと向かったとの情報が入ってきました」

周倉と廖化は黄巾賊の、とある一団の別働隊として桃香たちと衝突した。

それとは別に在る本隊が、他の地を目標に動いているというのだ。

「成る程のう。目的地はわかるか？」

「遼西郡の県境で交戦中のようです」

「よし、桃香たちに伝えるのだ。愛紗、軍議を開くぞ」

「御意！」

「わかりました！」

—

次の日、義勇軍はすぐさま行軍を開始した。

留守番として朱里と雛里を置いてきた為、とりあえず後方の憂いはない。

どうやら賊と対峙しているのは公孫賛という幽州太守の軍で、現在必死に防衛しているとのこと。

そして何の因果か、この公孫賛という人物は桃香の旧友であり、報告を受けた桃香は迷わず兵を動かす事にしたのだ。

「情報どおり押されておるのう」

情報を聞く限り決して優勢とは言えず、むしろ数で押されており、突破されるまでは時間の問題だった。

それを理由に素早い行軍をしていた義勇軍は、思ったよりも早く戦場に辿り着いた。

「太公望さん、白連ちゃんを助けないと！」

「わかっておる。とりあえずこのまま背後から襲いかかる。愛紗は周倉を、鈴々は廖化を引き連れて向かうのだ」

「「御意！」」

「場が乱れたらわしら本隊が後詰として行くぞー!!」

「うん！」

突然現れ、後方から襲い掛かれた黄巾賊はたまらず態勢を立て直す為に一時撤退した。

それを確認した義勇軍は城外に陣を敷き、その場に周倉と廖化を任せ、太公望と桃香、愛紗と鈴々の幹部が招かれるまま入城を果たす。

「桃香！ ひつさしぶりだなー！」

「きゃー！ 白蓮ちゃん、久しぶり！」

再会を喜ぶ桃香と公孫賛。

この二人は同塾で学んだ友であり、それは時が経った今でも変わらない。

「塾を出てから何してたんだよ？ 噂は聞いてたけど……桃香ならもっと高い所に行けただろ？」

「え、えへへ……困ってる人を放っておけなくて……」

「はあ……全く桃香らしいよ。まあ、助かったけどな」

変わっていない、否。変わって欲しくなかった友人の様子に歯を見せて笑う公孫賛。

そして桃香の後ろに控えている太公望たちに気づき、同じように礼を言う。

「ありがとう、おかげで助かったよ」

「なに、困った時はお互い様であろう？ 気にするでない」

「お前は？ 桃香の部下か？」

「白蓮ちゃん……この人は太公婆」

「桃香、ちょい待ち！！」

桃香の口を手で防ぎ、何やら『ゴニョラ・ゴニョ・ゴニョリータ』と耳打ちする太公望。

意図を理解した桃香は一呼吸いれ、改めて紹介する。

「この人は『王奕』さんだよ！ すっごい道士なの！！」

偽名を使ったのは、余計な混乱を防ぐため。

王奕とは伏羲の仙人界での呼び名であり、正確には『伏羲』太公望＋王天君＝王奕』なのだが……偽名として名乗るには十分。

最初から偽名を使えば良かったのだが、とりあえずは身内にのみ『

太公望』として通す事にした。

目配せで理解した愛紗も鈴々にそつと耳打ちする。

「はあ？　じゃあこいつが年寄り臭い喋り方するのは……」

「道士つて不老不死なんだって！　すごいよね？」

満面の笑みでニコニコする桃香と訳がわからないと言った表情を浮かべる公孫贇。

「でも桃香はつまらない嘘を吐くようなやつじゃないしなあ……つてあれ？」

首を捻って考え込む公孫贇があることに気がついた。

当の本人である王奕……もとい太公望が隅でいじけている。

先程の彼女の発言を引き摺っているのだ。

「ふん……どうせわしは童顔じゃ。見た目にそぐわぬ事ぐらい知っておる」

「た、太公……王奕様……」

「にやははは、お兄ちゃんがいじけたのだ！」

珍しくあわあわと慰めようとする愛紗の隣では、鈴々が大爆笑している。

我に帰った公孫賛は謝罪するのだが……

「わ、悪い……年寄りくさいとか言って……ちょっと意外だっただけだ！ あはは……」

「けっ、知らぬ。こうなったらおぬしの軍だけで賊を討ち果たせばよいのでは？」

援軍に來た筈なのに、まさかの丸投げ宣言。

「お、王奕さん！？」

「知らぬ、わしは知らぬ」

「にやはははは！」

完全に不貞腐れた太公望。

へそを曲げた彼は床に寝そべり、やる気をなくしていた。

この老人、非常に面倒である。

「おや、中々面白い御仁がおられるな」皆がどうにか太公望の機嫌を直そうと四苦八苦していると、如何にも楽しそうな笑みを浮かべた少女が近づいてきた。

蒼髪を靡かせ、白い衣服に身を包み、同様に白い帽子を被っている。胸元は大きく開き裾もかなり短い。

その身に不釣り合いな得物を掲げているところを見ると武人である事がわかる。

「白連ちゃん、この人は……？」

「ああ、こいつは趙雲。私の所で客将をしてる」

「ほう……貴女が噂に聞く劉備殿ですな？ いやいや、噂どおり優しそうな御方だ。そこに控えている二人もかなりの猛者とお見受けする」

一気に捲くし立て、うんうんと一人納得したように頷く趙雲。そして視線を太公望に移し、含んだ笑みのまま声を掛ける。

「王奕殿、とお聞きましたが……ふむ。中々どうして道士の風格を持つてらっしゃる。いや、不思議な雰囲気を持つ御方だ」

「ふん……どうせおぬしもわしを馬鹿にしておるのであろう？」

「くっくっく、見た目にそぐわぬその態度、喋り方。本当に面白い」

趙雲は太公望が不老不死の道士であることを怪しむ事なく、どちらかと言えば興味津々と言った目で見ていた。

「……お主、相当な胆力を有しておるのう」

「おや、如何してそう思われる？」

「目を見ればわかる。類稀なる胆を持つ女子よ」

「ふふ……貴方のような御仁に褒められるとは、私も捨てたものではないな」

お互いに怪しい笑みを浮かべる二人。

何時の間にか機嫌を直した太公望に他の皆が胸を撫で下ろした。

そして、落ち着いた所で本題へと入る。

「雑談はこのくらいにして……問題は賊だな。態勢を整えたらまた攻めてくるだろうし」

「そうだね……」

「こっちの兵力は五千ってとこなんだけど……桃香たちは？」

「私たちも同じくらい、かな？」

「併せて一万か……ちょい厳しい、か」

話題を切り替え、冷静に判断しようとする公孫贇に、太公望は好感を持つ。

太公望からして見ればまだまだ幼い彼女ではあるが、その冷静さは流石太守と言ったところ。

「敵の数は把握しておるのか？」

「ああ、斥候の報告によると大体二万五千前後らしい」

「倍以上、ですか……」

「聞いた話によれば河北などには有力な官軍がおるそうだな。それ故お主は県境だけを抑えておったという訳か」

「それでもギリギリだったよ。本当に助かった。改めて礼を言うよ」

再度頭を下げる公孫贇。

この地を統べる太守として、本来であれば簡単に頭を下げてよいものではないのだが、彼女は素直に謝礼を述べる。

その姿に感心した太公望は、現在の不利な戦況を打破すべく思案する。

「相手は倍以上か……どうしたものかのう」

「私に考えがあります」

拳手したのは趙雲。

客将という立場でありながら進言しようとする彼女を諫めようとした公孫賛を手で制した太公望は続きを促す。

「数の上では確かに不利ですが、奴らは烏合の集。一騎当千の将が正面から当たれば相手は総崩れになるでしょうな」

「またお前はそういう事を……お前の實力はわかってるつもりだけどな、たった一人で何ができるんだよ。相手は倍以上いるんだぞ？」

心底呆れたように言う公孫賛の言葉を受けた趙雲は、得意気な顔で愛紗と鈴々を見る。

「一人ではなく、そこにおられるではないか。私と同等の力を持つであろう、一騎当千の将が」

「……桃香、そうなのか？」

「え？ う、うん……愛紗ちゃんと鈴々ちゃんは凄い強いよ。正に一騎当千って呼べるくらい」

突然話を振られた桃香は戸惑いながらも、自信満々で答える。
それ見た事か、という表情の趙雲に頭を抱える公孫賛。

「王奕、あんたはどう思う？ 私はこんな我が侬で無駄に兵力を失いたくないんだが」

「そうなのう……」

もはや助けは太公望しかない。この状況に捨て犬のような目で太公望に訴えかけた。

「やれやれ、公孫賛殿は本当に甘い。太守としてはよいが、やはり王たる資質は薄いかな」

「……なんだと？」

趙雲を睨みつける公孫賛。

桃香たちは二人の間に入ろうとして慌てている。

「おや、事実だと思うが？」

「お前っ……」

「頭を冷やせダアホ！」

険悪な空気が流れる場に、太公望の言葉と共に一陣の風が吹いた。室内で急に吹いた風に驚愕する二人に、呆れたような声が届く。

「今は内輪揉めをしている場合ではなかるうに」

「い、今の風は……王奕殿、貴方なのか？」

「本当に道士だったのか……」

「そんな事よりも、だ。趙雲と言ったな？ おぬしは相当自分の腕に自信があると見える。」

「……ええ、私の槍はこの局面においても打破する程のものと自負してますが」

胸を張って答える趙雲。

愛紗もそうなのだが、己の武に自身を持つ事は武人であれば至極当然。

「成る程のう。だが公孫賛が上に立つ者である以上、彼女が悪戯に兵を失いたくないと思うのは当然だ。太守であるからこそ、な」

太公望のフォローに、思わず頬を掻く公孫賛。

「おぬしは客将であろう？　ならば好きにするがよい」

「ほう……」

「なあっ！？」

しかし意外な事にも太公望は趙雲の言い分をも認めた。
そして、あろう事が無謀にも正面突破を肯定したのだ。

これに驚いた桃香と公孫賛。

「お、王奕さん！？」

「王奕！　あんた何言って……！」

「何を言っても無駄なのであれば、むしろ好きにさせてやるがよい。
その代わり、わしらは策を練って行動させてもらう」

「ふふ……貴方は人を見る目がおりのようだ。では私は思つよう
に行動させてもらうでしょう」

満足気な笑みを浮かべたまま、趙雲が退出する。

この展開に呆然とする一同を見渡し、策を授ける太公望。

「さて……では我々も算段を構えるところかのう」

――

「あの趙雲とか言う者は一体何を考えているのでしょうか？」

「まあまあ愛紗ちゃん……自信があるのはいい事だよ」

「そういう事ではありません！ まったく、太公望様まで無謀な事を……」

「でも愛紗、お兄ちゃんは勝てるって言ってたのだ」

軍議を終えた一行は、外に布陣している義勇軍に戻ってきた。その場に太公望はおらず、彼はというと……

「おや王奕殿、如何した？」

「なに、わしもおぬしと共に最前線に立とうと思ってな」

義勇軍の遙か前方。

陣を敷いている黄巾賊に相對するように、趙雲と太公望がたった二人で佇んでいた。

「ほう、王奕殿も武に相当な自信があるようですね」

「たわけ。わしは策を成す為にここにおるのだ」

「その為に単身で来たのですか？　なんとも大胆な策をお考えになる」

くつくつと笑う趙雲を太公望はジト目で睨む。

飄々としている彼女にとって、この程度の視線は風のように流すに容易い。

「ふん……おぬしに死なれては困る故、だ」

「それはどういう……？」

「ケケケ……おぬしが好きなようにするのであれば、わしも同じようにさせてもらうだけよ」

「……くつくつく、この私の独断専行をも策に取り組むというわけですか？」

意外と察しの良い趙雲に感心しつつ、首肯で答える。

「わしとおぬしで敵の目を引く。ある程度経ったら義勇軍が突撃してくる。その間に公孫賛の騎馬隊が後方に回り、背後を取る手筈になっている。」

「ほう……」

「武に自信があるという事なのでな、せいぜい利用させてもらうぞ？」

ニヤリと笑う太公望。

趙雲は今度こそ本気の笑い声を抑えきれずに噴出した。

「……はっはっは！ それは私の武を信用しての事と理解してよろしいか？」

「さーてのう？ だが、おぬしの働き如何で我らの勝敗が決まると考えてよいぞ」

「元より承知。私一人で血路を見出して見せよう」

楽しそうに笑い合う太公望と趙雲。

この二人は意外といいコンビなのかもしれない。

……余談だが、後にこの二人は『腹黒コンビ』として名を馳せる事になる。

歓談を続ける二人だったが、喚声と共に黄巾賊が一塊となってこちらに向かってきた。

それに臆する事無く、槍を携えた趙雲は単身賊の一団に飛び込んでいく。

一見無謀とも思えるその行動を、太公望は興味深そうに見ていた。

「常山の趙子龍ここに在り！ 昇り龍たる我が槍、受けてみよ！！」

その姿、威風堂々。

名乗りと共に飛び込んだ先で、次々と敵を討ち果たしてく趙雲。

「ほう、言うだけの事はあるのう。實力は愛紗と同等……にしてもこの胆力は大したものだ」

单身切り込み、敵を倒して行く趙雲を見て、太公望は感嘆の声を上げていた。

突き倒し、薙ぎ倒し、敵の攻撃を防ぐその槍捌きは、見るもの全てを魅了する。

まるで戦場で舞っているかの様な趙雲の動き。

「どうした！ そのような刃では私は斬れんぞ！！」

「この野郎……たった一人で調子に乗ってんじゃねえ！！」

勢いづく趙雲を止めるべく、数人の男が背後から剣を振りかぶる。

「生憎と野郎では……え？」

「どうした趙雲。背中がから空きだぞ？」

趙雲が身を翻すよりも速く、突風によって吹き飛ばされる男たち。見ると、太公望が鞭をヒラヒラと振っていた。

挑発ともとれるその指摘にクスリと笑う趙雲。

「おや、かたじけない。王奕殿なら背中を預けても問題ないと思っただが」

「まったく、言いよるのう……よかろう、おぬしの背中はわしが請け負った。存分に舞ってみせよ！」

再び打神鞭を振るい敵を吹き飛ばす太公望。その中心で趙雲が比類なき武を發揮していく。

二人の様子を……特に太公望の起こした風に驚く賊。

「な、なんだこいつら……というかあの風はなんなんだ!？」

「あの男、妖術を使うぞ！」

慌てふためく賊連中を確認した太公望はニヤリと笑う。

「ククク……わしの風に吹き飛ばされたい奴からかかってくるがよい……轟け天！ 沸きあがれマグマ！ 炎の男爵・王奕いざ参る！」

大袈裟なアクションと名乗りで威嚇しつつ突貫する。
もはや敵の目はこの二人に釘付けである。

荒れ狂う風を纏った昇り龍は、勢い止まる事無く戦場を舞ってゆく。
賊達の目は完全に二人に向いていた。

前線の様子を見ていた愛紗は、今にも飛び出しそうな勢いで心配していた。

趙雲と共に単身敵を食い止め、機を伺うという太公望の策に最後まで反対していたのも彼女である。

「太公望様……なんであんな無茶を……」

「趙雲さんを信用してるんじゃないかな？」

「あのお姉ちゃんも中々強いのだ」

薄情にも見えるが、これこそ太公望だから為せるもの。

趙雲と太公望の派手な舞は完全に囷として賊の目を引いている。
それでも、呑気な反応の鈴々に怒りが込み上げる。

「鈴々、お前は心配じゃないのか!？」

「うーん……お兄ちゃんなら大丈夫なのだ」

「ぐっ……確かに太公望様には『ばおぺえ』という武器があるが…
…」

それでも不安は拭いきれないようで、突撃のタイミングを今や遅し
と図る。

隣にいる桃香も平静を保っている素振りを見せるが、状況が状況だ
けに内心気が気でなかった。

なんといっても、舞っているのはたったの二人なのだから。

「はあっ……はあっ……さすがに多いな……」

趙雲と太公望が戦闘を開始して暫く。

思った以上の健闘を見せていたが、限界が訪れようとしていた。

「ちいっ……」

太公望の援護があるとは言え、万を超える敵を相手取るには体力が不足していた。

加えて戦場は討ち取った者達が所狭しと転がっており、足場が悪い。

如何に一騎当千の猛者であろうと厳しい状況であることは否めない。

振るう槍に重さを感じ始めた頃、趙雲は己の過信を悔やんでいた。

「くっ……情けない！ 大見得切っしておいて体力が持たぬとは……」

「！」

容赦なく切りつけてくる刃に、次第に防戦一方になっていく。

そして――

「いい加減死ね！」

「っ……しまった！」

「もらった!!」

槍を力子上げられ、その瞬間完全に無防備になってしまう。
その隙を見逃すものかと、無数の刃が趙雲に襲いかかる。

（これまでか……なんともつまらぬ最期だ……）

全てを諦め、己の死を悟った時――

まるで彼女を護るかのように、全身を風が覆った。

「こ、これは……!？」

「背中だけでなく腹をも預けるか……やれやれだのう」

「お、王奕殿……？」

「まあ、ここまで戦い抜いた事は賞賛に値するし、よしとしよう」

太公望がそう言いながら右手を振りかぶる。

すると太公望の背後から大きな地鳴りが響いてきた。馬に跨り、先頭を駆けるは愛紗と鈴々。

彼女たちが率いる軍団がそのまま黄巾賊を押し込んでゆく。

「いいタイミングだ愛紗、鈴々！ そのまま敵兵を押し込め！」

「我が名は関雲長！ 命惜しくなくば前に出る！」

「うりやりやりやりやー！」

二人が率いる軍団は駆けてきた勢いそのままに突撃していく。そして、太公望と趙雲の下に桃香が馬に乗ったまま近づいてきた。

「桃香、良いタイミングで来てくれたのう」

「太公……王奕さん！ 無事みたいでよかったあ……」

「敵は混乱しておる。行くぞ、桃香」

「うん！ 皆、行くよ！！」

桃香の合図に一齐に飛び出していく義勇軍。

その光景に安堵の息を漏らす趙雲に、太公望が声を掛ける。

「おぬしは休んでおれ。ここからが勝負なのでな」

「……言つて下さる。私は前座、というわけですか？」

「によほほ、言つたであろう？ 利用させてもらつ、と」

義勇軍が正面から飛び込んできて、黄巾賊は途端に崩れた。
その隙に愛紗と鈴々が大いに暴れまわる。

「私の武に恐れぬ者から掛かつて来い！ 義なき賊など一兵残らず
斬り伏せてくれる！！」

「鈴々だつて愛紗に負けてらんないのだ！！」

愛紗の駆る堰月刀と、鈴々の駆る矛は次々に敵を伏せて行く。

彼女らが己の武器を振るう度に舞い上がる血飛沫に敵は大いに恐れ、
味方は歓声を上げる。

二人の将の鬼神の如き奮闘に数を減らして行く黄巾賊。

それを見た趙雲は武者奮いを抑えきれずにいた。
そして、そんな彼女を見た太公望は呆れたように溜息を吐いた。

「やれやれ、おぬしとて疲れておるだろうに……」

「あのような武を見せ付けられては奮い立つのも当然！」

そして、趙雲は疲れているのも忘れて再び戦場へと向かって行くのだった。

「活目せよ！ 龍はまだ地に伏しておらん！」

義勇軍が突撃をかけてから30分が過ぎようとしている。

愛紗、鈴々、趙雲をはじめ、周倉や廖化といった義勇軍の活躍によって黄巾賊の数はかなり減っていた。

だが……

「……まだか」

太公望が焦れたような声を出す。

勢いこそこちらにあるものの……如何せん数で劣っている。

たった五千で残る二万弱の相手をしているのだから、このままでは
ギリ貧である事は間違いない。

現在の状況に歯噛みしていると、黄巾賊の後方から銅鑼の音が響いた。

「伝令！ 賊後方に騎馬隊出現、旗は……公孫です！」

「来たか！」

銅鑼の音を合図に飛び出してきたのは、公孫賛率いる白馬の騎馬隊。
なんとか間に合った公孫賛の軍が黄巾賊を背後から襲い掛かる。

突然背後から現れた白馬を駆る公孫賛軍により、黄巾賊は一気に乱れた。

「よし、ばらけたところを各個撃破だ！ 攻勢を緩めるでないぞ！」

太公望の言葉を皮切りに、全軍の士気が高まる。敵を殲滅せんとする義勇軍と公孫賛軍は、兵力の差を埋める程の勢いをつけた。

そして、分断された賊はあっという間に壊滅した。

烏合の衆と化した賊との集団を義勇軍と公孫賛軍が蹴散らしていく。

勝敗は既に決した。

――

賊を討った後、再び入城した一行。

「いや、本当に助かった。ありがとう桃香、皆」

「おれなんていいよ白連ちゃん……私も勝てるとは思ってなかったけど」

「さすが王奕様ですね……あんなに劣勢だったのに……見事な策でした」

愛紗の言葉を受けるも、太公望はあっさりと流した。

「いや、あれは白馬の騎馬隊と趙雲の活躍があつてこそよ。おぬしもそう思つてあるう？」

「……意地悪な御方だ。私とて己の過信くらいわかつておりますよ」

話を振られた趙雲は、恨めしそうな目と共に返す。

「によほほ、褒めたのには他意はないのだがな」

「はあ、食えない御仁だな、王奕殿は」

そのやり取りを物珍しそうに眺めているのは公孫賛。
いつも飄々とした態度を取る趙雲がここまで言い負かされるというは、中々見る事はできない。

その趙雲と……ふと、目があつた。

「公孫賛殿。私はどうやら己が武に慢心していたようだ。貴女の言う通り」

「え？ い、いや……」

「申し訳ないですが、今の私は到底武人として誇れるものではない。故に、旅に出ようかと思えます」

「……そっか、今まで世話になったな。ありがとう」

突然客将を辞め、出て行くという趙雲の発言を諫めるでもなく、逆に礼を述べる公孫賛。

そんな彼女の態度に一瞬目を見開いたが、すぐに柔和な笑みを浮かべる。

「……どうやら私は見る目も足りないようだ。こちらこそお世話になり申した」

「趙雲さん、これから何処へ行くの？」

「もう一度己を磨き、その後は身を預けるに相応しい主君を探そうかと」

「ほう、候補はあるのかのう？」

太公望の質問に、少々大袈裟な拳動で答えてみせる。

「まず、曹操殿。人の才を愛し、揺らぐ事無く霸道を目指す彼女は間違いない王たる資質を持ち合わせていますな」

「他には？」

「小霸王、孫策殿。『江東の虎』と呼ばれた孫堅殿の娘。今でこそ袁術殿の下に甘んじておりますが、まるで獣のような目で独立を虎視眈々と狙っております」

「ほう……」

「そして最後は……貴女ですよ、劉備殿」

「ふえっ!？」

まさか出るとは思ってなかった自分の名前に、なんともヌケな声を出してしまった桃香。

頬を赤く染めて慌てる彼女に、趙雲は笑いながら説明する。

「民を愛し、民から愛される仁を持つ御方だ。大徳を掲げる貴女は、先の二人に負けない英傑であると思っていますよ」

「そんな……で、照れるなあ……」

べた褒めされ身体をくねらせる桃香。

その様子を苦笑いで見ていた公孫賛に向けて、趙雲が再び口を開く。

「それに……私は見誤っていたようだ。公孫賛殿も勇を持ち、部下

を考える事のできる御方だった」

「な、なんだよいきなり……お前らしくないな」

「まあ、抜けている部分が無いのも事実ですが」

「ふ、普通で悪かったな!!」

そのやり取りに笑う一同。

そして、太公望の方へと振り返った趙雲は包拳の礼をして頭を下げた。

「王奕殿。私の命を救っていただき感謝します」

「なに、気にするでない」

「それに、貴方の御蔭で己の未熟なところを見直す事ができました。加えて感謝します」

「うむ。それに気づけたのであれば、後は龍の如く昇るだけよ」

本当に気にしていないように手をヒラヒラと振る太公望。
そんな彼に好感を抱きつつ、疑問を問いかける。

「ところで王奕殿。貴方の風があれば我々は必要なかったのでは？」

「確かにわしの力があれば何千何万の軍であろうとも相手にはならぬ」

事実、宝貝を駆使した太公望は賊をいとも簡単に蹴散らしていた。それ故彼女の疑問は尤もなのだが……

「だがのう……それでは意味がないのだ。あくまでこれは人間の戦。仙道が決するモノではないのだよ」

蹴散らした、と言ってもただ吹き飛ばしただけで怪我はさせておらず、どちらかと言うと戦意を殺ぐような戦い方をしていた。

つまるところ、今回は公孫賛軍の準備が整うまで派手に目を引いていればよかったのだ。

「あくまでおぬしらに『道』を示す……ただそれのみが仙道の役割よ」

「ほう……まるで自分は道標であると言っておられるようですね」

『道標』と称されて苦い笑いが零れる。

かつて過ちを犯した同胞と同じ呼ばれ方をしてしまった。

「そこまで傲慢にはなれぬよ。どの『道』を選ぶかはおぬしら自身

故」

「ふふっ、そうですね。どうやら私は王奕殿に対して個人的に興味を持ってしまったようだ」

「主たる者を探しにゆくのでは？」

「なに、王奕殿は例外ですよ」

何やら楽しそうに笑う趙雲。

その様子を愛紗は何故か面白くなさそうに見ていた。

「おや関羽殿、ヤキモチですか？」

「なっ……！？」

「にやはは、愛紗、ヤキモチ妬いてるのだ！」

「くっくっく……。では皆さん、またお会いする日が来れば、その時は宜しくお頼み申す」

そう言い残し、趙雲は颯爽と去って行く。

最後にからかわれた愛紗は、その憤りをぶつける相手を失い悔しそうにしていた。

「行ったか……相変わらず飄々としてるなあ」

「なんか風みたいな人なのだ」

「趙雲さん、来てくれるといいなあ……」

「そうなのう。あやつ程の猛者が加わるのであれば、十分な戦力になるであろうな」

趙雲の去った後を見ながら、それぞれ思い思いの言葉を吐く。

桃香と太公望は自分たちの下へと舞い戻って来てくれる事を願ったが……この二人は気づいていない。

龍が司るは風のほかないという事を……

風と舞うは龍（後書き）

なんかハムさんが蔑ろにされてるのを見ると悲しくなるのは俺だけでしょうか？

平穩、不穩、仕官

公孫賛との共闘から暫く経ち、太公望たちは平穩な日々を送っていた。

というのも、大陸を騒がせていた黄巾賊の首領、張三姉妹が討伐された事が理由である。

官軍の中でも勢いのある曹操軍が彼女たちを討伐した事により、黄巾賊はあつという間に霧散した。

首領格を自らの手で討伐出来なかった事は悔やまれるものの、一連の黄巾賊討伐によって劉備軍の名はそこそこ知れ渡ったといえる。

今では『幽州に劉備軍あり』と言われるようになったのだ。

「天の御遣い？」

「はい。占いによる話とほぼ同時期に太公望師叔が現れたということとで……結構噂になってるんですよ？」

朱里の話によると、有名な占い師が「天から御遣いが舞い降り、戦乱の世を鎮める」と占ったそう。

ちょうどその時劉備軍の前に道士が現れたと噂され、世間は彼こそが『天の御遣い』であると認識している。

因みにこの噂は大陸全土に広がっていたりする。

（天の遣い、ねえ……やれやれ、大層な呼ばれ方をしておるものなの）

内心溜息を吐いていたが、これも仕方のないこと。

名の売れていない桃香達を有力な諸侯と渡り合わせる為に必要なのは……名声。

『劉備という者に道士（天の御遣い）が手を貸している』

この事実が、太公望を……ひいては桃香の名を売る神輿となっている。

そして余計な混乱を避けるため、自軍以外の者には『王奕』と名乗っていた。

何より太公望は目立つことを嫌う。

……非常に今更ではあるが。

「ところで朱里。また新しく民が流れて来たそうだが？」

「は、はい……こちらです」

「むう……」

渡された資料を見ると、かなりの民草がこの地に流れてきたことが

わかる。

黄巾賊による乱が終わってから、桃香の治める此処に移り住んでくる民が後を絶えなかった。

義勇軍として活躍し、民を思う統治をしている桃香の噂は各地へと広まっていた。

正直なところ。現在『官軍』に対する民の印象は余り良いものではなく、それも手伝って桃香を頼る民が軒並み増えているのだ。

「人口は増える一方だのう……」

「そうですね……それに対する就業の斡旋や街の改修の方が追いつかない、と言ったところでしょうか」

「ふむ……雛里よ、区画整備の方はどうだ？」

「資金は何とかやりくりできますが、人手が足りないでしゅ……」

「こればかりは仕方がないのう……愛紗達に頼んで兵を回してもらうほかあるまい」

執務室では相変わらず太公望をはじめ、朱里と雛里が慌しく政務に勤しんでいる。

平穏な、と言っても政務の方は戦場さながらで、次々と舞い込んでくる仕事に寝る間も惜しんで取り組んでいた。

兵の訓練などは愛紗と鈴々、周倉や廖化に任せているので、太公望

たちはデスクワークに専念している。

「これだけ仕事があると……このままではわしらは過労死するぞ？」

「はわわ、で、でもそれだけ街が復興して栄えてきてる証拠ですし……」

「はあ、文官をもっと増やして欲しいところだのう」

愚痴を述べたところで仕事が減るわけでもないのに、目の下に隈を作りながらも黙々と仕事を進める。
そんな中、桃香が部屋を訪れ三人を直接ねぎらいにきた。

「お疲れ様、休憩しよう？」

「おお、モモ！」

「あ、ありがとうございますっ」

「わあ、美味しそう……」

桃香が差し入れとして持ってきたのは、お茶と太公望の好物、桃。それを見るなり齧り付いた太公望を見て、桃香は思わず笑みが零れる。

そのまま四人で雑談をしながら一息入れている時に、一人の男が慌

しく飛び込んできた。

「太公望様！ 大変です！」

「なんじゃ騒々しい。どうかしたのか？」

この斥候からの情報は、太公望達だけでなく、大陸全土を揺るがす大きなものだった。

「帝が……霊帝様が、崩御なさいました……！」

太公望は登用した者のうち、優秀と見込んだ人間に斥候としての任を与えて大陸全土に放っていた。
この世界の歪を調べる為に少しでも多く情報を集める必要があったからである。

いつの間に間者を増やしていたのか、という桃香達の問いに対し……

『戦乱の世に於いて、最も重要なのは兵力などではない。情報だ』

とキツパリと言い放った。

各諸侯も同じように間者を放っている為、情報は錯綜しがちである。その中で、如何に正確な情報を手にするかが乱世を生き残る鍵になるのだ。

報せを受けた太公望は、桃香と朱里、雛里の四人で話し合いをしていた。

「すると、大將軍である何進を暗殺したのは宦官である、という事だな？」

「……恐らくそうだと思われます」

「後継者争いか……醜いものなの……」

太公望たちの下に届いた報せは靈帝崩御の他、有力な後継者候補である総大将・何進の暗殺も含まれていた。

「そして現在はその董卓という者が相国として君臨しておる、と」

宦官一派によるこの暗殺劇の後、彼らが推挙したのは董卓という牧だった。

董卓は元々何進からの要請により都に進んでおり、宦官達はそれを踏まえて推挙する事にしたのだ。

「その董卓なる人物像はわからぬのか？」

「うん……官軍の中でも有力な人だったみたいだし、私には到底……」

「うーむ……」

桃を齧りながら呻る様子を不思議に思ったのか、朱里が質問する。

「太公望師叔、どうかしたんですか？」

「……いや、都は洛陽だったかと思ってな」

「それがどうかしたの？」

「一度洛陽へ行ってこようかと思うのだ」

「」「ええ！？」「」

太公望の発言に驚く三人。

桃香がすぐにその理由を問いたださんと迫る。

「ど、どうしていきなりそうなるの!？」

「うむ。暗殺劇が巻き起こったと言う事は、現在の情勢は極めて不安定だ」

「どういう事？」

「これからますます不穏な流れになるであろうという事だ」

確かに太公望の言う通り、暗殺してまで後継者争いが起きるということは、これから先良からぬ方向に行く可能性が高い。

「わしの放っておった斥候によると……どうやら宦官共は腐った連中のようなのだし」

「……その人たちのせいで何か起きるのですか？」

「わからぬが、可能性はあるだろうな。はっきり言ってキナクさい」

「た、例えば？」

太公望は顎に手を置いて考え込む。

「例えば……帝を意のままに操り、好き勝手しているやもしれぬ」

「そんな！？ どどど、どうすれば……！？」

「落ち着け。だからわしが直接赴き、真偽の程を確かめようと言うのだ」

何が起こっているのかを確認するには自分の目で確かめる必要がある。

いくら間者が優秀とは言っても、正しい情報を得るのはこれが一番

「よし。悪いがわしは暫く留守にする。後は頼んだぞ」

「え、え……？」

腰を上げた太公望を見て桃香はアワアワし始めた。
そんな彼女を尻目に、朱里と雛里に指示を飛ばす。

「朱里、雛里。わしが居ぬ間を頼む。補佐として縻芳と縻竺姉妹をつけるがよい」

「あわわ……あ、あの……太公望師叔？」

太公望が二人の補佐として指名したのは縻芳、縻竺姉妹。

朱里や雛里ほどではないにしろ、内政を任せるに足る能力を有している姉妹だ。

「何かあつたら報せを送る故、よろしく頼んだぞ」

そう言つて、残りの桃を懷に収め窓に足を掛ける。

「え！？ 太公望さん！？」

「え……」

「とうつ！」

「ひゃあっ！？」

窓から飛び出した太公望。因みにここは4階である。目立つことは嫌いと言いつつ、こうして自ら目立つ行動をしていれば世話がない。

突然の出来事に目を覆う雛里だったが、それは杞憂に終わる。

そのまま空を飛んで行った太公望を見つめる三人は、暫くの間呆然としていた。

そして……風を操る彼は馬よりも早く消えて行った。

こうして、太公望は一路洛陽へと向かって行くのだった。

――

現在、洛陽には董卓軍が駐屯している。
併州の牧から相国へと昇進した董卓は洛陽に本拠地を構え、統治を行っていた。

「はあっ！」

「甘いで！」

城内の庭では二人の武人が激しい攻防を繰り返している。
周りの安穩とした空気とは一線を画し、まるでその空間だけが戦場であるような雰囲気醸し出していた。

剣戟を繰り返しているうちに、劣勢に追い込まれたのは大斧を振るう銀髪の少女。

「ちいつ！」

「もろうたで！！」

体勢を崩した一瞬の隙を見計らい、銀髪の少女の喉元に堰月刀の切先が突きつけられた。

それに満足したように、突きつけていた堰月刀を引いて肩に掲げるのは……袴を身につけ、胸にサラシを巻いた少女。

「へっへー、ウチの勝ちやな」

「……くそ」

おかしい言葉使い……所謂関西弁で話す少女は、董卓軍きつての猛将・張遼。

一方、敗北に唇を噛み締めて悔しがる銀髪の少女は、同じく董卓軍が誇る烈将、華雄。

二人は開いた時間を利用し、こうして模擬戦を行っていた。結果は言わずもがな、張遼の勝利。

「しかし、ウチ華雄相手なら負ける気せえへんわ」

「なんだと！？　どういう意味だそれは！！」

「直線的すぎんねん。せやから猪言われるんやで？」

「誰が猪だ！」

陽気な調子で話す張遼に華雄は激昂する。

二人の性格は見ての通りであり、張遼は陽気で、華雄は感情的になりやすい。

「恋からも何か言ったり」

頭の後ろで手を組み、振り返った張遼の視線の先にいるのは……木陰で横たわり、昼寝をしている赤髪の少女。
眠たそうに目を擦りながら、静かに口を開く。

「……単純」

「お前ら……バカにするのもいい加減にしろおおお！！」

「ほら、そうやってすぐ怒るところが単純や言うんやで？」

「うるさい!!」

ニヤニヤする張遼と、怒り心頭の華雄。

先程静かに華雄を煽った赤髪の少女は、我関せずと再び目を閉じた。このマイペースな彼女こそ、天下に名を知らしめる最強の将、呂布。人畜無害のような振る舞いの彼女だが、一度戦場に出れば何人も敵わぬ鬼神と化す。

ギャーギャーと騒ぐ彼女たちの下に、二人の小柄な少女が現れた。

「はぁ……相変わらずやかましいわね、あんた達は」

その内の一人、メガネをかけ、帽子を被った知的な雰囲気醸し出している少女——賈馱が腰に手を当てて呆れたように言う。

「なんや賈馱っち。騒いどるのは華雄だけやで?」

「貴様がいらん事を言うからだろっ!」

「へう……二人とも、喧嘩しないで?」

賈の隣で二人の仲を心配する少女。

この健気な少女こそが軍を、洛陽を統べる董卓その人である。

「珍しいな、二人してサボりなんか？」

「ボク達をあんたらと一緒にしないでよ。軍の編成について相談があつて来たの」

「そういう事なら呂布を起こした方がいいか？」

「華雄、呂布っちは別にええんちゃう？」「そうね……どうせまた暫くは寝てるだろうし……」

というわけで、飛將軍の異名を持つ呂布を除いた面々で玉座に向かうとした矢先――

一人の部下が彼女たちの下に現れた。

「なに、どうかしたの？」

「はっ、仕官を希望する者が来ております」

「ふーん……それで、希望は武官？ 文官？」

「いえ、それが……」

「どうかしたんですか？」

なにやら言いづらそうにしている部下に優しく声を掛ける董卓。

口籠もっていたが、非常に困ったように口を開いた。

「……………董卓様専属の音楽家、を希望しております……………」

「「「「音楽家あ?」」」」

予想だにしていなかった返答に、四人が揃って首を傾げた。

—

—数時間前、洛陽街中

「やはり、か……………」

洛陽へ到着した太公望。

彼の空を飛ぶスピードは恐ろしく速く、馬では数日かかる日程も数時間で済ませた。

念のために言っておくが……決して仕事をサボりたいが為に此処を訪れた訳ではない、筈。

太公望は洛陽の情勢を確かめるべく此処まで来た。

街中を歩く太公望の目に飛び込んできた光景、それは――

輝きを失った街並み、目に光が灯っていない、虐げられている民……ではなく。

華やかな街を往来する、笑顔の人々だった。

とりあえず情報収集をする事にし、まずは適当に目に入った人物に話を聞く。

「あー、そこのおぬし、ちょっと聞きたい事があるのだが」

「はい、なんですか？」

「わしは旅の途中で此処まで来たのだが、この街は董卓と言う人物が治めておるそうなの？」

「ええ、董卓様のおかげで一層栄えたのですよ？　華やかでしょう？」

「うむ。どうやら董卓なる人物はかなり良い統治をしておるようだな」

「はい！　彼女は私たちにとって聖女様のような御方です！」

満面の笑みで話す女性に礼を言い、再び歩き出しながら考える。

（彼女、という事は董卓とやらも女子のようだな。全く、この世界の男は何をしておるのだ？）

この世界に於いて活躍している人物、又は名を馳せる人物は悉く女性である。

その事に内心、男に情けない印象を抱きながらも改めて董卓の人物像を調査する。

『董卓様？　それはそれは優しい御方だよ。無能な宦官とは偉い違いだね』

『宦官共は嫌いだけど、董卓軍の皆さんはいい人達さ！』

『良くしてくれてます。私達の事をよくお考えくださって』

聞き込みを繰り返すも、得られる情報は殆どが一致するものだった。その内容として――

・董卓なる人物は民の事を考えてしっかりと政治を行っている

事。

・反面……民に嫌われているのは、やはり好き放題やっている宦官達だという事。

「むう……悪しき宦官と民に好かれる相国、か。民の事を考えられる人物が宮廷に蔓延る悪を捨て置くとは考えにくいのう……」

これらを踏まえ、太公望は情報収集の最終段階へと移る。

最終段階とは……直接会って、その人物像を調査するというもの。

余りにも無謀で大胆な方法だが、噂が偽の情報である事を確認する為に尤も確実な方法である。

だが、直接会うと言ってもそう簡単にはいかない。

祖国なる大物が、一介の……成り上がり県令傘下の、正体不明の男に会ってくれる訳がない。

当然、太公望もその事は承知しているので――

「仕官したいだと？」

「はい。私は董卓様にお仕えしたく、遠路遙々やって参りました」

「ほう、さすが董卓様。遠い地までその威光が届いているようだな」

「それはもう！ 私は董卓様こそ天下を統べるに相応しい人物だと思っております」

口八丁は太公望の十八番。

これまで様々な者を騙してきたその口上に、一介の兵士が気づけるわけもなく……

「お前、中々目のつけどころが良いな。で、希望は武官か？ 文官か？」

「董卓様お抱えの音楽家、を希望します」

「音楽家だと？」

「はい。私はこう見えても音楽家です……自慢の音を董卓様のお耳に届けたいと思っております」

「ふむ……そうなら俺には到底判断がつかんな。とりあえず上の方に聞いてみるからそこで待っておれ」

「ははっ」

これはかつて太公望が殷に潜入した時に使ったのと同じ手口。
その時にも宮廷音楽家と称して正体を隠した。

いくら帝を擁しているとは言え、董卓は官軍。登用するのも当然武官、文官、侍女やその他の雑用くらい。
なので、『専属の音楽家』というものは割りと珍しい役職だ。

文官や武官はそれぞれ担当があるものの音楽家は唯一董卓お抱えとなれる可能性がある。

とにかく直接会わなければ話が始まらないので、こうして音楽家として仕官する事にした。

そして、城の外で待たされること半刻――

「どうやら董卓様と側近の方が話を聞いてくれるみたいだぞ。よかったな」

「はっ、ありがとうございます」

この時、兵士は気がつかなかった。

横を通り過ぎて城内へと赴く『自称・音楽家』が悪魔の笑みを浮かべていた事に。

平穩、不穩、仕官（後書き）

これから少しの間、洛陽編となります。

月が詠うは風

――

「賈馱さま。仕官してきた音楽家を連れて参りました」

「入れてちょうだい」

扉を開けさせると、一人の青年が入って来た。

見た事もない服装だが、決して可笑しなものではない。

むしろ、どこか高貴な印象をもたらす服を纏った男が、静々と近づいてきて平伏する。

「貴方が専属の音楽家を希望する人？」

「はっ、然様にございます」

「ふーん……珍しいわね、音楽家での仕官なんて」

「私には音楽しかない故」

玉座の前で平伏する青年を見下ろす賈馱。

眼光鋭く値踏みする彼女は、正しく董卓の守護者と言える。

「わかったわ。とりあえず顔を上げなさい」

「ははっ」

顔を上げた青年の顔をまじまじと眺める。

よくよく見れば中々精悍な顔つきをしていた。

横に控えていた張遼が、賈馮が思っていた事と同じような事を口にする。

「へー、結構ええ男やん」

「……張遼、顔は関係なからう」

張遼を諫めつつ、華雄もまた男をジロジロと観察する。

武官希望でないので興味のない素振りをしているが、音楽家という珍しい職業には興味があるようだ。

「私が董卓です。貴方は何故私に仕えようと思って下さったのですか？」

「はい。旅の途中で董卓様の噂を耳にし、この素晴らしい御方の下

で働きたいと思ったからです」

「あ、ありがとうございます……」

真剣な表情で真っ直ぐな言葉を言われた董卓は、思わず目を逸らして照れてしまった。

「……ちよつと、月」

「はっ！ゴメン、詠ちゃん……つい」

「まったく……それで、貴方。音楽家というなら、今ここで何か演奏してくれる？」

「え？ この兄さんなんも持っておらんやん。意地悪やなー、賈馱っちは」

「うっさい！」

茶々を入れる張遼だったが、彼女の言う通り……見た感じ青年は楽器を持っている風には見えない。

それでも彼女の要求に答えるように、彼は自身の懐をゴソゴソと漁り始めた。

その場にいた全員が興味深そうに見つめる中、彼が取り出したのは一本の教鞭。

「……何？ その棒つきれ」

哀れスーパー寶貝、董卓軍が誇る軍師にさえ棒つきれと評されてしまった。

「まさか、それが楽器なんですか？」

「然様にございます。では、これより私が『風の歌』をお聞かせしましょう」

コホン、と咳払いする青年を怪訝な目つきで見る一同。

どう鼻屑目に見ても楽器ではない物を手にし、『風の歌』という奇妙な事を口走っているのだから当然だが。

「では……………疾」

そう言つて青年が鞭を振るうと、室内なのにも関わらず何故か風が流れ始めた。

入口は開け放たれているとはいえ、風が縦横無尽に吹くのは異常事態である。

「「「「なっ……！？」」」」

そして、その風は次第に変化し、風切り音を鳴らす。

啞然とする彼女たちに構う事無く、優雅に鞭を振り回す青年。

それに答えるように風は音を重ね、次第に音楽を奏でていった。

高い音、低い音

長い音、短い音

異常ではあるが、その神秘的な光景に目を、そして耳を奪われる一同。

暫くそうした後、青年が鞭を収める。

すると不思議な事に風もピタリと止まった。

余りの出来事に口を開けたまま固まっている董卓に代わって、隣にいる賈馱が口を開く。

「あ、貴方……道士だったの……！？」

「然様でございます。これが私の『音楽』でございますが……如何でしたでしょうか？」

「え、あ、え？ あーと……その、珍しいもん見れた……と思ったで」

戸惑いつつも律儀に返答するあたり、張遼の胆力はかなりのものである。

尤も、隣の華雄は未だに信じられないものを見た、という感じに固まっているが。

「月、大丈夫？」

「……」

「……月？」

「……す」

「酢？」

「す、すごい！　すごいよ詠ちゃん！　見た？　聞いた？」

力いっぱい賈馱の肩を揺さぶりながら、キラキラとした表情で青年を見つめる董卓。

「ちょ、ちょっと月！　わかったから落ち着きなさい！」

「へうっ！？　ゴ、ゴメン詠ちゃん」

「本当にもう……で、どうすんのよ」

「え？」

何が？　と言わんばかりに首を傾げる彼女に、賈？は頭を抱える。

「あのねえ……この道士を登用するかどうかでしょ！？　本題忘れてんじゃないわよ！」

「あわわ、ゴメンゴメン！」

「でも仕方ないやろ。華雄でさえも固まってるんやし」

「……はっ！」

「おお、起きた」

一気に騒がしくなる玉座の間。

あーでもない、こーでもないと一通り騒いだ後、本題へと入る。

「コホン……で、月。どうすんの？」

「あ、うん。私は、この人がいいならいいよ！」

「はあ……あのね、仕官してきてるんだからそれは」

当然でしょ、と言おうとした矢先……それを遮って口を開いたのは青年。

「すまぬが、仕官の話は無かった事にしてくれぬかのう？」

「……は？　どういう意味よ」

「だから、仕官を取り止める、と言ったのだ」

突然仕官を断った青年に再び戸惑う面々。しかも口調も変わっている。

何か不備でもあったのかと董卓が確認する。

「あ、あのう……何か不都合でもありました……？」

怒らせたのかもしれないという懸念を抱えた彼女の至極控え目に質問に、青年は飄々と答える。

「いやなに、もう満足だ」

「ちよつとあんた……どういづつもり？」

「わしは董卓殿と話がしたかったただけだしのう」

「貴様っ！ 何者だ！？」

態度を豹変させた青年を見て武器を構える華雄。

隣では張遼が真剣な目つきをして、いつでも飛び出せるようにしていた。

それを理解しつつ、青年は何でもないかのように振舞う。

「わしの名は王奕。劉備軍で軍師をしておる者だ」

「劉備軍、だと？」

「その通り。尤も、最近までは『義勇軍』と名乗っておったがのう」

自称音楽家として仕官してきた筈の男が、急に仕官を取りやめたかと思えば、あっさりと己の正体を明かす。

聞きなれない軍の名に戸惑いはしたものの、華雄はすぐさま気を引き締めなおす。

「他軍の軍師が何の用だ！ まさかこちらの内情を探ろうとしておるのではあるまい！？」

「いやまあ、内情を探りに来たのには違いない。お主、中々鋭いではないか」

「そ、そうか……？　って違う！　貴様……叩つ斬ってくれる！！」

「華雄、ちょい待ち！」

あつけらかと答え、褒められた華雄は一瞬相手のペースに飲まれたが……そのふざけた態度を見て大斧を振りかぶる。

それを制止したのは張遼。

「張遼！　何故止める！？」

「こないに堂々とした間者があるかい……あんた、何を企んでるんや？」

「……華雄、斬るのはどういう事が説明してもらった後でもいいわ」

張遼の尤もな意見に賛同する賈馱。

しかし二人とも警戒心を露にし、董卓を守るように移動した。

「ふむ……さっきも言ったが、おぬしに直接会ってみたかったのだ」

「わ、私にですか？」

じいつと彼女を見つめる太公望の視線に気づいたのか、賈馱はすぐ

さま自分の身体で彼女を隠す。

華雄はまだ釈然としていない様子だが、何時でも飛び出せるように身構えている。

「そう警戒せずともよい。危害を加える気はこれっぽっちもないから安心せい」

「そんなの信じられると思うか！」

「たわけ。本当に何かしでかすつもりなら名乗るわけあるまいに」

「……ぷはっ」

謝るところか華雄を叱責する太公望。

それがおかしかったのか、張遼は思わず噴出してしまった。

そんな彼女を一睨みし、賈馱が詰問を続ける。

「……で、この子に会いに来た理由は？」

「うむ、確かめたい事があつてのう」

「……なんですか？」

「おぬしが相国としてどのような人物であるかを確かめに来たのだ」

一介の軍師でありながら上から目線で話すという事には誰も疑問を抱かない。

何故なら、この王奕と名乗る青年が道士たる風格を醸し出しているからだ。

高圧的ではなく、どこか優しくて柔らかい……不思議な雰囲気を感じている。

「例えば……董卓という人物は帝を擁するに値する人間か、とな」

「なっ……！？ 貴様、言っに事欠いて！！」

「せやから例えば言ってるやろ。この兄さんはそれを確かめに来た言ってるやんか」

心底呆れたように言う張遼。

太公望も華雄をジト目で睨み、小声で言う。

「……お主、堅物だの」

「せや、華雄は脳ミソまでカッチカチや」

「き、貴様ら……」

小刻みに震える華雄。いや、この場合は彼女の反応こそ正しいのであるが。

怒髪天を衝く程に怒りに燃える華雄を無視して、賈馱が冷静に問いかける。

「それでわざわざ来たのね……で、評価のほどは？」

「どうやら善そのもののようなのだ。まあ、街を見ただけでわかってはおったが」

「仕官して来たのは……それを確証に変える為に、直接相まみえたかったからね？」

「お主は聡明だの。相国といっても、わたしには心優しい少女にしか見えぬわ」

手放して褒められた董卓は思わず笑みを浮かべてしまう。

その素直な態度に溜息をつく賈馱だが、太公望は真剣な眼差しを彼女らに向けた。

「……問題は宦官たちなのであろう？」

その矢を射抜くような質問に玉座の間の空気が冷える。

「……まあね。そこまで把握してるの？」

「どこまでかは知らぬが、宦官連中が悪であることは……少なくとも洛陽中に知れ渡っておるだろうに」

「で、だったら何だっていうの？」

キツと睨みつけるその視線もサラリと流し、頭を振る。

「そう警戒するでない。わしはおぬしらの手助けをするつもりで此処へ来たのだ」

「……ボク達の手助け？」

「うむ。これは劉備軍関係ナシにわしの独断だがのう……手を貸そうではないか」

思わぬ提案にポカンとする一同。

「ど、どういう意味や？」

「おぬしらは宦官の操り人形と成り果てておる。違つかのう？」

「「「！？」」「」」

「な、何故それを……」

言葉を失う四人に対し、太公望は『やっぱりか』と溜息を吐いた。

「ふむ……わしの推測もあながち間違っておらんかったようだな」

「……どうしてそう思ったわけ？」

「うむ。実はこの街に来る前に色々と調査をした。ここに来る前も民に聞き込みをしておったのだよ」

「……それで？」

「得た情報は二つ。董卓という人物が民から好かれておるという事、それに対して宦官共が好き勝手やっておるという事」

指を折りながら説明する太公望を全員が見つめる。
あの華雄でさえも黙って彼の話聞いていた。

「こうして直接会ったことで、おぬしが民に好かれる程の人物である事がわかった。だが、そこで疑問が浮かぶ」

「……言ってみなさい」

「見たところ……お主は知恵者であり、その二人はかなり腕の立つ武将だと見受けられる。おぬしらが軍として優秀であると判断するに十分だ」

評価された三人は、それに反応するでもなく黙って聞いている。その様子を、続きを促していると判断した太公望は言葉を繋いでいく。

「にも関わらず、宮廷に蔓延っている悪しき宦官達を見逃しておるのは何故か？ 宦官が清廉潔白だからか？ 否、それはこの地に住む民が一番よく理解しておる故、それはあり得ぬ」

太公望は一息吐くと、そのまま自分の立てた推測を続ける。

「だから、連中を肅清出来ぬ理由があるとみた。大方人質……もしくはそれに準ずる何か弱みを握られておるのでは？」

「……え！？」

実は太公望としても可能性の一つとして考えてたに過ぎないのだが、驚愕する董卓と賈馱を見て確信に変わる。

「大將軍である何進殿を暗殺した宦官は、一派の報復を恐れて同じ官軍である董卓殿を担ぎ上げた」

そつだな？ と問われた四人はそれぞれ首肯で答える。

「それで体裁を保とうとしたのであろう？　だが、宦官たちが選んだ本当の理由は……自分たちの意のままに操る事ができるからだ」

「……な、なんで」

「そしてわしは思ったのだ。何故董卓殿であれば宦官達にとって都合がいいか？　弱みを握られておるが故、行動を起こす事が出来ぬのでは、と」

そこで、捲くし立てるように説明した太公望が一息入れた。
そんな彼に張遼が困ったような笑みを浮かべる。

「……アカン、あんた何者やねん」

「……そうね。ここまでの洞察力を持っているなんて只者じゃないわ」

「ふむ、仮定だったのだが……わしの推測は当たっておるのだな？」

「……はい」

心底感心したように同意した賈馮の隣で、董卓が苦しげな声を出した。

それを確認し、太公望は静かに賈馮の側に近づき耳打ちする。

「え、ちよっ……」

「今更だが、この場に宦官の監視は？」

ポソリと耳に届いた質問の意図を理解した彼女は、苦い笑いを浮かべながら答える。

「本当に今更ね……この場には居ないわ。監視はされてるけど、今の場は大丈夫」

「そうか、よしよし」

「王奕って言ったわね……あんだ、この場に監視がいたらどうするつもりだったわけ？」

「その時は、わしに多少なりとも監視の目が逸れる。少しは行動しやすくなるであらう？」

無論、太公望はこの場に間者の気配がないことを確認している。

というよりも……実は先程『風の歌』を披露したのはその確認でもあった。

だが、この発言をしたことにより彼女の『王奕という人物はキレ者である』という印象を強くさせた。

「では今一度言っぞ。わしはおぬしらに手を貸すつもりで此処にいるが、どうする？」

四人の顔を順に見渡していく。

そして、顎に手をあてて思案する賈馱に注目が集まる。

「……どないするんや、賈馱っち？」

「あんたが只者じゃないってのはわかったけど……ボク達に手を貸す益は？　いくらなんでも信用できない」

賈馱の当然ともいえる言い分に、太公望は微笑を浮かべる。

「なに、わしが所属する劉備軍は弱小での。有力諸侯に少しでも恩を売っておきたいのだ」

「……」

「ま、わしは罪無き者が虐げられておる事が嫌いなのだよ」

あっけらかんと言いつ放つ太公望。

だが、二つ目の理由こそが彼の本心であろう。

董卓と賈馱、張遼と華雄がそれぞれ顔を見合わせる。

そして――

「……知恵を貸して下さるんですか？」

「うむ、そのつもりだ」

「ボクとしては未だ信用しきれないんだけど……」

「どうしても信じられぬと言つのであれば、その二人に斬つても
らえばよからう」

指名された二人のうち、張遼が諦めたように口を開く。

「敵わんわ……賈馱っち。どうせ黙つても上手くいくとは思えへ
ん。なら、少しでも多く知恵者がおつた方がええんちゃう？」

「……はあ、わかったわよ。ただし、怪しい素振りを見せたらすぐ
斬るから」

「元より承知よ」

そして、暫く黙っていた華雄が久しぶりに口を開く。

「……本当に大丈夫か？」

「それはこれから判断するわ。少なくとも、コイツの頭の回転の早さはボク以上みたいだし」

「おお、賈馱つちがデレたで」

「うっさい！」

こうして、太公望は『王奕』として董卓一派を救うために行動を共にすることとなった。

月が詠うは風（後書き）

展開的に早足な気もしますが、ご了承ください。

太公望と董卓軍

さて、宦官を肅清し董卓達を救うべく上洛した太公望。そんな彼が現在どのような状況にあるかというと……

「王奕さん、お茶飲みますか？」

「おお、すまぬのう」

「あんた達……」

非常にまったりとしていた。

「王奕……あんた具体的に何かいい案があるの？」

太公望の協力を仰ぐ事でひと段落し、そこで一息いれる事に。

監視の目がないとわかったので、これから具体的な案を纏めようというのだ。

全員が優れた洞察力を認め、とりあえずは太公望を信用するに至っ

た。

「のう、モモはないか？　もしくは甘味でもよいのだが……」

「あ、洛陽内で有名なお菓子がありますよ！　持って来てもらいますね」

「話がわかるのう、さすがは董卓殿だ」

「へう……そ、そんな……」

「聞け！！」

先程とはうって変わって和やかムードで円卓を囲む。

あろうことか董卓本人にモモをねだる太公望だが、そんな彼を見る目はどこか微笑ましい。

怒る賈馱を見て爆笑する張遼が、涙を拭きつつ太公望の背中をバシバシと叩く。

「なんや、アンタおつかしな人やなー、道士って胡散臭いと思ってたけど実は面白い奴やったんやね！」

「い、痛いのう……」

太公望はこの感じはどこか覚えがあった。

その豪快さと人懐っこさにかつての武成王の面影が重なる。「ウチは張遼文遠、真名は霞や！」

「ん？ 真名というのは信賴を置く者にしか名乗らぬ者ではないのか？」

「手を貸してくれる奴を信用せんでどないするん？ 何より、アンタが悪い奴には見えへんし。ウチ個人がアンタを気に入ったんや」

「ふむ……そういう事であれば預かるう。わしは王奕。真名も字もないが好きに呼ぶがよい」

あつと間に打ち解けた二人を見て、頭を抱える賈馱。

緊張感がなさすぎる。

そう思っていた矢先、隣にいた少女が意を決したようにそれに参加する。

「わ、私の真名は月って言います！」

「ゆ、月！？」

「詠ちゃん……私も、王奕さんは信賴できる人だと思っんだ」

「……なんで？」

「え？ さっきの話を聞く限り、大丈夫かなあって……」

どうしてこの子はこんなにも人がいいのだろうか。

しかし、この甘いとも言える程の優しさが、この少女の全てを表していた。

「詠……ボクの真名よ」

「よいのか？」

「私は……私は、月を救う為なら藁にでも縋る。それに、どのみち奴らと敵対するなら一蓮托生だし」

「わかった。月、詠。よろしく頼む」

そこで、ふと横を見ると華雄がなにやらいじらしそうにしていた。

「わ、私は華雄だ。真名は……教えたくない」

「別に構わぬよ。信用というものは徐々に得てゆくものだからのう」

「ち、違う！ 董卓様が信ずる者は私が信ずる者だ！ ただ……」

「ただ？」

「私には似合わない真名なので、華雄と呼んでくれ」

彼女の言わんとしている事を理解した太公望は静かに頷く。

「華雄さんも張遼さんも、私の事は月って呼んでください」

「え、い、いいのですか!？」

「……ボクも詠でいいわ」

そのやりとりを眺めつつ、太公望は改めて思う。

——この者たちは死なせるべきではない、と。

こんなに気のいい、心優しい連中を放っておくことなど太公望には出来なかった。

「ところで……信用に値する人間はこれだけかのう？ 事を進めるに必要な協力者は多い方がいいのだが」

「あ、呂布さんは？」

「呂布っちはどうやらな……何考えてるかわからんところもあるけど、根はいい奴やで」

「ならば呂布なる者も呼んでもらえぬか？」

「わかりました、ちょっと待っててください」

「呂布、奉先。真名は恋」

「ねねは陳宮です！ 恋殿が真名を預けるのであれば、ねねも預けます！ 真名は音々音ですぞ。気軽にねねと呼んでください」

初対面にも関わらず、会ってすぐに真名を預けてきた彼女たちに目を丸くする。

「なんじゃ、おぬしらもわしを信用してくれるのか？」

「助けてくれるなら……いい人」

「ねねは恋殿の軍師故、従うのは当然！」

新たに召集された二人——恋とねねが太公望に向けて名乗る。

二人の様子を見た太公望は優しく微笑み、心の中で呟く。

(……これまた純真な者たちよ)

常に戦いの中に身を置いてきた彼にとって、彼女達の輝きは眩しいモノがある。

「それで、詳しく話を聞きたいのだが」

「……アンタの予想通り、月の両親が人質に取られてるわ」

「やっぱりか……で、宦官については？」

「十常侍という、それはそれは性根の腐った連中や」

「……そうよ。ボク達はそいつらに操り人形にされているのよ」

拳を握り締める詠は心底悔しそうだ。

太公望の予想通り、月は両親を人質に取られ、十常侍の言いなりとなっていた。

彼女らとてやりたい放題の十常侍を肅清してやりたいが、人質が盾とされている為手が出せないでいた。

「なんにせよ……彼奴らを始末せん事には始まらぬ、か」

「そう上手くいきますかな？」

ねねの言つとおり、事はそんなに簡単ではない。

自信の欲の為に謀殺までしてきた連中を相手にするには一筋縄ではいかないのだ。

「近づくだけでも難しいのよ。奴ら妙に警戒心強いし」

「自分達のやつてる事自覚しとるんやろ。だから性質悪いねん……アカン、なんか腹立ってきた!!」

ウガー！　といきり立つ霞に同意するように華雄も立ち上がる。

「そうだ！　こうなったら奴らを肅清するぞ！」

「それが出来れば苦労してないっての」

「うむ。暗殺するにしても、おぬしらにはやらせぬ」

「なんでや奕ちん！　ウチらの実力認めてるんちゃうんか？」

「え、奕ちん……」

予想だにしていなかった渾名をつけられて引き攣った笑みを浮かべる王奕もとい太公望。

彼を助けるように、詠が二人に説明する。

「万が一、十常侍の誰かに姿を見られたうえで逃げられたらどうするの？ その時点で終了なの、わかる？」

「「ぐっ……」」

「月、両親が何処に幽閉されているかわかるかのう？」

「は、はい……二人とも別々の場所に監禁されていると聞いてます」

「うーむ……敵も中々やり手のようだの。助けるにしても手勢を割かねばならぬか……」

万が一月達が両親を助けにきてもいいように、宦官達は人質をそれぞれ別の場所に置いている。

この事実を知る者にしか行動は起こせないのも、何か動きがあったならそれが月達の仕業であると判断できる。

その為、人質を解放するのと彼らの始末は同時に行わなければならないのだ。

「王奕……なんとかできる?」

「……恋。なんとかできるのではなく、なんとかするのだよ」

「王奕さん……」

そう、ここまで来たのならばどうにかするしかない。

人質を取られている以上、十常侍の思いがままに進むのは目に見えているからだ。

「詠、伝令を送りたいので竹簡を。それから、街中に空き店舗があればその確保を頼む」

「わかったけど……どうするつもり?」

「なに、協力者を増やすのだよ」

――

太公望が洛陽へ向かってから数日後――

大量の政務を処理しているのは、朱里と雛里……そして愛紗。

彼の抜けた大きな穴を埋めるべく召集された愛紗は、最初目の前に広がる竹簡の山に言葉を失った。

しかも、太公望の偵察の話を聞いて大きく溜息を吐いた。

それでも……目を擦りながら必死に政務をこなす朱里と雛里を無視できるわけもなく、こうして暫くの間政務を手伝っているのだ。

補佐として縻芳、縻竺姉妹がついているものの、簡単に終わる量ではない。

そこに、桃香と鈴々が飛び込んできた。

その慌てようから、ただ事ではないと判断した三人は筆を放り出し彼女に近寄って話を聞く。

「た、大変だよ皆!」

「大変なのだ!」

「あわわ、ど、どうしたんですか?」

「桃香様も鈴々もそんなに慌てて……何かあったのですか?」

「た、た、太公望さんから伝令が届いたの！」

彼女達の下に届いた早馬は、太公望からの伝令だった。

「太公望様から？」

「とにかく三人とも読むのだ！！」

不思議に思いながらも竹間に目を通す三人。

次第に顔つきが変わり、最終的には三人揃って青い顔を浮かべる。

「……ええ！？」

手渡された竹簡には衝撃的な事実が書かれていた。

- ・董卓は良君であり、十常侍が帝を盾に好き放題やっている事。
- ・彼女の両親が人質として取られており、それを救出し十常侍を肅清する計画を立てている事。
- ・その計画に必要な人材として、廖化を至急洛陽へ向かわせて欲しいとの事。
- ・これらの事がある為、暫くは戻れない事。

「師叔の言ったとおり、不穏な展開になってますね……」

「人質を取って思うがままに操るか……卑劣な宦官め！」

「でもなんで廖化の兄ちゃんだけなのだ？ 鈴々達も力を貸すのだ！」

「はわわ……多分、極秘裏に事を進める必要があるんだと思います」

朱里の言う通り、悪しき者とは言え宦官達を肅清する計画は絶対に漏れてはいけない情報。

桃香はもはや一郡を統べる県令という立場であるし、愛紗や鈴々も名前が知れ渡っている。

失敗すれば逆賊として扱われる危険がある以上、名前の売れている者を巻き込む事は出来ないのだ。

故に、元黄巾賊の将である廖化を指名した。

「あ、ぴーえす……？」

「追伸、の意味ですかね？」

追伸として書かれていた事項は……

- ・何かあったらこちらから連絡するので、それを待つように。
- ・最後に、読んだ後この竹簡は燃やす事とする

「つまり……鈴々達は何をすればいいのだ？」

「あわわ、何もしなくていいんですよ……むしろ、何事もないかのように振舞っていないと」

「……大丈夫でしょうか」

「だーいじょうぶだよ、太公望さんがそんなに心配かな？　かな？」

心配する愛紗を肘で小突きながら、薄ら笑いを浮かべる桃香。

「あつ……いえ、べべ別に……あ、し、心配はしてますけど、してないというか……コラ鈴々！　な、何を笑っている！？」

「にやははは！　愛紗は心配性なのだ！」

「私も、太公望さんならなんとかしてくるって信じてるし」

「わ、私もです！」

「はいっ！」

次々に上がる信頼の言葉に、愛紗も落ち着きを取り戻して笑顔を浮かべる。

「……そうですね。そうと決まれば、太公望様の穴を全員で埋めましょう！」

「……愛紗ちゃん？」

愛紗が素晴らしい笑みと共に、桃香と鈴々の前に差し出したのは……大量の竹簡。

それを見た瞬間に逃亡を図る二人だったが、それぞれ首根っこを掴まれて失敗に終わる。

「さて、太公望様がいない間、私達がしっかりしないと、ですよ？」

「で、でも縻竺ちゃんと縻芳ちゃんがっ！」

「無理無理、無理なのだ！ 鈴々は政務なんてできないのだ!!」

「問答無用!!」

太公望の抜けた穴は桃香と鈴々すらも巻き込んだのだ……。

太公望と董卓軍（後書き）

時系列おかしい……
でも気にしない！

太公望、酒屋を営むのこと

「王奕、言われた通り空き店舗確保したけど」

現在、太公望は執務室に入り浸っている。

執務室といっても、別に詠の仕事を手伝うでもなく……ダラダラと過ごしていた。

当初は彼のそんな様子に腹を立てた詠が

『あんた事の重大性わかってんの！？』

とヒステリックに叫んだものの……

『重大だからこそ下準備は念入りにしなくてはならぬのだよ』

と返され、呆れ果てた彼女が遂に諦めたのだ。

「で、頼んでおった物は？」

「お酒でしょ？ できるだけ高価な物を運び込んだわよ」

「手際が良いのう。さすが詠、中々の手腕よ」

「ほ、褒めたって何も出ないわよ！」

救出作戦を掲げてから数日。

太公望は事前準備として様々な指示を出した。

その殆どを詠に任せ、ねねには裏で補佐を頼んでいた。

「でも奕ちゃん、酒集めてどないするん？」

「によほほほ、さーてのう」

「まったく、読めへんな……ところで、そんなに高価なもんやったら
一つくらい分けてもらえへん？」

「何考えてんのよ霞。これは大事な計画の一つなのよ？」

太公望の参加により、彼女たちの間柄も少し変化した。

それが最も顕著に表れているのがそれぞれの呼称である。
これまでと違い、皆が真名で呼び合っている。

月を救うべく、全員が一丸となっている証拠なのだ。

「霞は無類の酒好きのようだのう……」

「そりやもう！ 酒はウチの力の源や！！」

高らかに呑ん兵衛宣言を掲げる霞を見て、太公望は何かを思いついたように手を叩く。

「ふむ、そういう事であれば、好きなのを一つ持ってゆくがよい」

「ほんまにつ！？」

「うむ。事を上手く運ぶには霞の助力も必要だからのう、前払いとして振舞おうではないか」

「え、ええ……でも……ウチは月っちの為なら無償で献身したるけど……奕ちゃんがそこまで言うんやったら……」

身体をくねらせながらチラチラと詠に視線を送る霞。

そんな彼女を見て、呆れたように盛大に溜息を漏らす。

「はあ……よく言うわよ。王奕、いいの？」

「思い出したのだ。わしにはとっておきがあるのをな」

「なになに、奕ちゃんのとっておきの酒ってどないなやつ！？」

とっておき、と聞いて食いつく霞を見て、太公望は黒い笑みを浮かべる。

「ククク……無事計画が終わったら馳走してやる故、しっかりと働いてもらうぞ?」

「うつわー、奕ちゃんめっちゃええ人! 大好きや!! ウチめっちゃ気張るでえ!!!」

諸手を挙げて喜ぶ霞をジト目で見る詠。

その詠に太公望は再度確認を取る。

「詠。十常侍を率いておるのは、その張譲とやらで間違いないな?」

「そうよ。悪知恵が働く、一番厄介な奴」

この張譲こそが月の両親を人質にした張本人。詠にとって最も忌むべく存在である。

「よし……では台帳の偽装の方、頼んだぞ」

「わかったけど……何処行くの?」

「なに、わしの『職場』だよ」

ヒラリと去って行く太公望。

二人はその後姿を目で見送った。

「『職場』、ねえ……」

「でも詠つちにしちゃ珍しいやん。月つちの為とは言え、あないに簡単に信用するなんて」

「前も言ったけど、月を救う為なら藁にでも縋るわ。それに……」

「それに？」

「あんな策、ボクじゃ思いつかなかったし」

「……」

その言葉に思うところがあるのか、霞は何故か笑いを堪えている。

「……なによ」

「ぷっ……いやな、詠つちが奕ちゃんに入れ込んでんのが面白くて」

「なっ……！　だ、誰が入れ込んでるっていうのよ!？」

「アカン、そないに必死になったら泥沼やで？ あーっはっはっは
！」

真っ赤になって否定する詠だったが、内心霞も王奕の発案した作戦
に下を巻いていた。

（しかし、あそこまで用意周到にするとはなあ……腹黒さでは詠
うちの数段上手や）

――

洛陽の街中にある、とある店舗――

「おお、王奕殿！」

「ほう……すっかり運び込んでくれたようだのう、ねね」

「『開店準備』は整っておりますぞ！」

「ふむふむ、よくやってくれたのう」

「しかし……これで何が為されるのですかな？」

「ねね、軍師であれば常に二手三手……ひいては十手二十手先を読み、その為の準備は怠ってはならぬのだよ」

「うーむ……」

腕を組んで首を傾げるねね。

彼女は軍師としてはそれなりに優秀な部類に入る。

だが恋の付き人としての意識が強く、それ故直情的になりやすい。

その点、詠は常に冷静を心がけているので、軍師としての格は詠の方が上と言える。

尤も、その詠ですら太公望の見据える『先』を見るには未だ至らないのだが。

「安心せい。おぬしのこの働きは必ずや策に貢献する」

「むむ……それならば良いのですが」

「よし。では、次に私服を着せた兵士にこのビラを配らせるのだ」

「……これは？」

山のような量のビラを手渡されたねねは、一層訳がわからないという表情になる。

そんなねねを見て、太公望はニヤリと笑う。

「この店の開店セールを伝えるビラよ!」

――

数日後……

偽装した兵士にビラを洛陽中に配らせた太公望は、店舗の中である人物を待っていた。

馬を飛ばして来ればそろそろ着く頃だが……と考えていた矢先、店の扉が開く音がする。

「太公望様!」

「おお廖化！ 待つておつたぞ！」

入つて来たのは先日召集をかけた廖化。

洛陽において名の知られていない、太公望の信用できる人材として選ばれたのが彼だった。

太公望の軍師としての手腕に心酔しており、忠実な部下として信頼している一人である。

「話は聞いておるか？」

「はっ、劉備様より大筋は聞いておりますが」

「よし。では詳しい経緯を話す」

「そのような方法で……さすが太公望様。この廖化、感服致しました」

「よせ、おぬしはわしの『弟』だ。この策はおぬしの働き如何によるものが大きい。頼りにしておるぞ」

「はっ、この廖化、身を粉にして太公望様の策に献身致します！」

「固いのう……わしは『王奕』だ。そして、今この場に於いては『呂尚』である。間違えるでない」

「も、申し訳ありません……」

太公望は自軍以外の場に於いて王奕と名乗っている。

更に言うなれば、今回の作戦では新たに『呂尚』と名乗る事にし、廖化については『呂化』として弟の役をさせる事になった。

正体を偽装して二人が何をするのかというと……

この洛陽で『呂尚』、『呂化』兄弟として酒屋を営むのだ。

「よし、では『呂化』！ 開店だ……」

ゴォッ！ と握りこぶしを天井に向かって掲げる『呂尚』もとい太公望。

その言葉に従い『呂化』は勢いよく扉を開け、登り旗を掲げる。

登り旗には……【酒屋・『豊満』！ 開店セール実施中！】と書かれていた。

太公望が洛陽にて商人デビューした瞬間である。

「さあさあ、どうした皆の者！ 此処の酒はそこいらで売ってるのと訳が違つぞ！ 値段も格安、持ってけドロボー！」

「呂……に、兄様……」

「詠ちゃん、王奕さんは？」

「……ほら」

太公望のその後を聞く月に手渡したものは、一枚のビラ。

「ほ、本当にお酒屋さんになっちゃった……」

「策の為にここまでするとは……」

「華雄、策の為だからこそよ。普通なら……いや、ボクでもここま
で出来ないわ」

詠の言葉を聞いて、月が何やらもどかしそうにしている。
それに気づいた詠は、先手を打って釘を刺した。

「……月。手伝おうって気持ちはわかるけど、ダメよ」

「で、でも私自身力にならなきゃ……」

「それでも我慢しなさい。あの店に近づいていいのは霞だけって言
われたでしょ」

「へう……」

太公望、酒屋を営むのこと（後書き）

そして酒屋開店です。

店名はまさかの『豊満』なのでした。

黒いキツネと白いペテン師（前書き）

三日目にして65000PV突破！

驚きですが感謝感謝です。

では、じじいの化かし合いをどうぞ！

黒いキツネと白いペテン師

はてさて、そんなこんなで酒屋を営み始めた太公望。

今回はその酒屋の、とある一日の様子をお送りしよう。

「おう！ 兄ちゃん、今日も精が出るな！」

「おぬしこそ、儲けておるか？」

「まあボチボチってところか。今日はこれ貰うぜ！」

「全く、おぬしはいつも良い酒ばかりを選んでゆくのう」

「なに言ってやがる。この店に良くない酒なんて無えだろうに」

「ケケケ、違うない」

太公望と廖化が『呂尚』、『呂化』兄弟として酒屋『豊満』をオープンしてから暫く経ち。

酒屋として『豊満』は大いに賑わっていた。

「わーははは！ 見よ呂化！ 今日も売り上げは上々、笑いが止まらぬわ！」

高笑いをして算盤を弾くその姿は完全に商人のそれである。

良質な酒ばかりを置き、しかも手ごろな値段で並べる『豊満』は開店から数日にして洛陽中にその名を響かせた。

「兄様、高級酒の在庫が残り少なくなっております」

「うむ、では『貢ぎ』に行つて来るがよい」

「了解しました！」

高級な酒を用意できたのは、詠の事前準備によるものである。

――

「む、なんだお前？」

「は、『豊満』の呂化と申します」

「ああ、噂の……で、今日は何用だ？」

「ははっ、董卓様に我が店自慢の高級酒を献上したく、参上しました」

門番に止められたのは、台車に酒瓶をタンマリと積んで現れた『豊満』の弟、呂化。

「そうか……一応検分させてもらうがよいな？」

「はい。こちらです」

そう言いながら、廖化は台車の布を捲り一番手前にあった酒瓶の栓を抜いて手渡した。

一つ目を確認し、二つ目、三つ目と検分を続けようとしていると……

「なんや、酒の匂いがするで」

城内から霞がフラリと現れた。
突然現れた將軍に平伏する一同。

「こゝ、これは張遼將軍！」

「如何なさいましたか？」

霞は平伏するのを手で制しながら、興味深げに台車へと近づいていく。

「あー、検分と案内ならウチがしといたる。任せとき」

「なっ！？ そんな！ わざわざ將軍の手を煩わせる事は……」

この提案に驚く兵士たち。
將軍自ら検分するなどとても有り得ない事である。

「なに言つてんねん。『豊満』はウチの行きつけやで？」

「そうなんですか？」

「そ・れ・にい？ 高級酒の利き酒なんて滅多にでけへんしな！」

「そ、そついうことでしたか……」

「後はウチがやったるさかい、試飲してるのは華雄や詠うちには内緒やで？」

悪戯っぽく笑う霞の顔は、まるでルイス・キャロルの描いたチエシヤ猫。

悪びれもせずに己の欲を露にする將軍に対し、兵士たちは口元を引き攣らせるのだった。

「呂化、今日はなんぼほど『貢ぐ』ん？」

「はっ、三十程ですかね」

兵士とのやり取りを終えた霞は廖化を引き連れて酒蔵へと向かった。勢いよく酒蔵の扉を開け、中へと進んでいく。

そして台車に積んでいた『空瓶』と蔵の中の高級酒の中身を入れ替えていく。

「三十やな、了解や」

実は、積んでいた酒瓶のうちの殆どが空瓶だったのだ。検分用に中身の入っているものを予め用意し、他は全て空。

『貢ぐ』というのは、『城にある高級酒を仕入れる』ことの隠語である。

店の酒のうち、特に高級なモノはこうして城内の酒蔵から提供して貰っており、他の地方から買い付けたりもしていた。

「よっしゃ、これで終わりやな」

「ありがとうございます、張將軍」

「ええて、それより奕ちゃんによろしゅうな」

「ははっ！」

因みに開店してからというものの、一番の常連は霞だったりする。

酒に目がないことで有名な彼女は、質の良い酒を頻繁に買いにくる客として良い『サクラ』となっていた。

半ば本気で買いに来るから彼女らしいのだが。

「終わったのか？」

「ええ、入りきらなかった分は持ち帰ります」

門を出て行こうとすると、先程の兵士が話し掛けて来た。

「しかし、お前の兄は本当に董卓様に心酔しておるのだな」

「と、言いますと?」

「いや、音楽家として登用されなかったからといって……まさか酒屋を開くとは」

この兵士は、先日太公望が『音楽家』として仕官してきた時に対応した兵士だった。

感心したように頷く兵士に向け、廖化が笑みを浮かべる。

「ええ、元々酒屋の傍ら音楽を嗜んでおりまして……音楽家が叶わないのであれば、せめて董卓様の治める地で商いをしたい、と」

「ほう……」

「では、私はこれで」

「おう、ご苦労だったな」

こうして、高級酒を仕入れた廖化は微笑を浮かべたまま店へと向かう廖化なのであった。

「お待たせしました」

「おお、ご苦労だったな」

酒を仕入れて来た廖化を待っていたのは、なにやら金庫を漁っている太公望だった。

廖化は台車から酒を降ろしながら太公望に話しかける。

「兄様、思った以上に売れ行きが良いので……一度棚卸しをした方がいいのでは？」

「そうなのう……よし、おぬしに任せてよいか？」

「はっ！」

……太公望だけでなく、廖化もまた完全に商人としての気質が身についていた。

元々真面目な性格の彼は、今となつては完全に『豊満の弟の方』として馴染んでいる。

「ディスプレイを変えてみるか……フッフ、このまま市場を一気に独占してくれる！」

一見、本来の目的を見失っているのでは？ と心配してしまう程に本気で酒屋を営んでいる太公望。

売り上げの三割を詠に回し活動資金として納め、残りの六割を新たな酒の購入代金としている。

因みに、残りの一割は太公望のモモ代として扱われていた。

そして、洛陽で酒屋『豊満』の名を知らぬ者はいない、と言う程有名になったある日――

「兄様、『お客様』です」

「……来たか」

太公望が待ち望んでいた人物が、店の入り口に佇んでいた。豪華な身形で仰々しく従者を連れている、初老の男。

彼の名は――

「いらっしやいませ、張讓様」

十常侍の筆頭、肅清対象の一人、張讓。

「ほう……わしの名を知っておるか」

「ははっ、この洛陽において張讓様の名を知らぬ者はおりますまい」

「ふっ、抜かしよる。この店の評判は聞いて来たのだ」

「なんと……御足労おかけしました」

こうして……十常侍で最も賢い狐と、昆侖が誇る最高の頭脳を持つペテン師の腹の探り合いが始まった。

近頃、洛陽の商店街の一角に新しく酒屋がオープンしたらしい。
なんでも良質な酒を格安で販売し、かなり儲けているのだとか。

そんな話を耳にした張譲は、部下を引き連れて視察に赴く事にした。

出てきた店主は若い青年。

そして、張譲を見るなり平伏している。

「ほう、噂に違わずかなりの種類の酒を置いておるな」

「はい、良質な酒を格安で、がモットーにございます故」

「お主らはいやに若いが、二人で切り盛りしておるのか？」

「ええ。私は呂尚、弟を呂化と申しますが……私達は早い時期に親を亡くし、幼い時から酒屋で働いておりました」

成る程、と頷く張讓。

「だからその若さでこの手腕か。納得だ」

「いえ、滅相もございません」

「では、この酒はどこから仕入れている？　こんな良質な酒ばかり揃えるには秘訣があるのか？」

他の酒屋には内緒にしていたきたいのですが……と前置きをする呂尚。

張讓は『こう見えて意外と腹黒い』と思いつつ、了承の意を唱える。

「税の安い地へと赴き、そこで買い付けております。そして税が上げればまた別の地へ移動し……を繰り返すのです」

「……ふむ、だが買い付けは誰が行っておるのだ？　見たところお主ら二人だけのようだが」

「実は、買い付け専門の者を個人的に雇っておるのです」

「ほう！　買い付け専門とな！」

聞いた事のないその流通方法に舌を巻く張讓。
それを見た太公望は更に続ける。

「ええ、商人同士で売買するよりも安く仕入れる事が可能なのです。なので、私達は此処で店を構え、税率の変化だけを見ておればよいのです」

「成る程、そして此処で得た税の情報を買い付けの者に流すわけだな？」

「その通りでございます！ 洛陽は王都。入ってくる情報は信を置けるものですから」

呂尚という店主の……思った以上の手腕に素直に感心する張讓。すると、突然金庫へ移動した彼が、なにやら袋を持ってきた。

「そこで……張讓様に御願いがあのですが」

「ふむ……なんだ？」

いち商人という立場でありながら、図々しくも頼み事をしてくる彼に不審な目を向ける。

太公望は顔を顰めたままの張讓の耳元に近づき小さな声で囁いた。

「地方の酒税についての情報を、逐一私に流していただけないでしょうか？」

そう言つて耳元から離れた太公望は張讓の両手を握つて嘆願する。
手元の異物感に気がついた張讓は、笑みを浮かべて小さく頷いた。

「では張讓様、今後ともよしなに……」

再び平伏する彼を一瞥し、歸路へ着く張讓。

手から懷に仕舞い込んだものは……所謂賄賂。

（ふん……あの男、若いながらも世渡りが上手いではないか）

欲に塗れた笑みを浮かべながら歩く張讓は、その日終始上機嫌だった。

張讓の訪問をやり過ごした『豊満』は、閉店作業の真っ最中だった。

「あの男、かなりの下衆ですね」

「うむ。噂に違わず、絵に描いたような小悪党よ」

「……それにしても太公望様の答弁には驚きました」

「によほほ、わしは元よりこっちの方が得意なのだ。腹黒さで勝てる者はそうそうおるまい」

余り誇れる内容ではない自慢に、廖化は感心しつつも苦笑いを浮かべるのだった……。

洛陽に吹き荒れる風の気配（前書き）

相変わらず、十常侍討伐編が続きます。

洛陽に吹き荒れる風の気配

洛陽に『豊満』がオープンして結構な時間が経とうとしていた。

「詠、部下からの報告だ」

「ありがと。ふーん……やっぱり周囲の巡回の道順はいくつかあるみたいね」

執務室に入って来た華雄から受け取った報告書に目を通す詠。

「人数は変わらないみたいだな」

「ええ、霞から上がってきた報告も似たようなモノだったわ」

「交替時間については霞から聞いてくれ」

「わかった」

太公望が酒屋を営んでいる間、詠達は他の活動していた。

酒の仕入れや台帳の偽装などはねねが担当し、華雄と霞、恋は人質解放の手筈を進めている。

詠はその全ての確認と細かな指示を送っていた。

「……華雄にしては珍しいわね」

「何がだ？」

「頭に血が上りやすいアンタがこうして裏方に徹してるなんて」

「私は月様の為であれば、何でも我慢するさ」

華雄の言うとおり、作戦を成功させるには裏での念入りな下準備が必要だった。

失敗は許されない作戦なので確実に成功させなければならない。

「そうね……焦れたいとは思っけど、もう少し我慢して」

「わかっている。では、私は調練に戻る」

「ん、ご苦労様」

「呂尚！ コレとコレ買ったから、少しまけてくれへん？」

「張將軍……ご冗談を言いなさるな。ただでさえ安く設定しておるのですよ？」

張讓来店から数日が経ち、豊満には何時ものように霞が来店していた。

「ちっ、相変わらず足元見るなあ……じゃあコレも買ったる！」

「ははっ、では……これくらいで如何でしょう？」

「ふっふっふ、わかつとるやないか」

「ケケケ、張將軍こそ」

この、呂尚こと太公望と、張將軍こと霞の……詠達からすれば茶番にしか見えないやりとりは、もはや『豊満』の名物となっていた。

目を光らせて選んだ良い酒を値切る霞

承諾する代わりに更に買わせようとする呂尚

一見キツネとタヌキの化かし合いのような光景は、他の客から見て

も日常として溶け込んでいた。

勿論、これも予め太公望の指示していた通りなのだが……霞としては八割方本気なので、なんとも信憑性が高い。

こうして、いつものように交渉を終えた霞が代金を支払おうとしたところ――

不意に太公望の唇が霞の耳元に近づいてきた。

「えっ……な、なんや？」

「そちらの方はどうだ？」

一瞬、なんの事かと思ったものの、すぐ作戦についてだと理解した霞。

霞の役割は太公望との連絡係も兼ねている。

万が一にもこの店が董卓軍と繋がっているとはバレてはいけない為、怪しまれる可能性が低い霞が抜擢された。

それ程に彼女の酒好きは洛陽に於いて有名だった。

（あ、ああ……そういうことかいな）

周りに人がいないのを確認して小声で話す。

「とりあえず巡回の道順と人数は把握しとる。交替時間もあと二、三日で把握できる筈や」

「うむ。よくやってくれたのう」

「奕ちゃんも順調なんか？」

霞の質問に答えるでもなく、イソイソと荷物を纏める太公望。

高級な酒や金を積み込み店を出ようとする。

入り口に立った時、クルリと振り返り、霞に向けて笑顔を放った。

「これから趙忠様に酒を届けてきます」

「おお、呂尚ではないか」

「趙忠様、酒をお持ちしました故、お納めください」

この男は十常侍のうち、張讓と並んで筆頭格である趙忠。

「そなたの持ってくる酒は美酒ばかりだからな、楽しみにしておつたぞ」

「ありがたきお言葉。ついでと言つては何ですが……」

「ん……おお、気が利くな」

懷から取り出した袋を趙忠に手渡す。

中身は言つまでもなく、賄賂。

「ふふ、そなたは商いが何たるかをわかつておるな」

張讓が来店してからというもの、太公望はこうして十常侍の下を何度も訪れている。

酒を貢ぎ、賄賂を手渡し続けてようやくここまでこぎつけた。

「ところで趙忠様、私めから提案があるのですが……」

「ふむ、なんだ？」

「その前に……この私も十常侍の皆様に信を置かれる立場になった
でしょうか？」

意図を理解した趙忠は下卑た笑みを浮かべる。

「……何が望みだ？」

「いえいえ、そういう事ではなく……そんな皆様に私の『とってお
き』を献上したいと思っております」

「とっておきとな？」

そこまで言うと、太公望は辺りをキョロキョロしながら小声で囁く。

「……大陸一の美酒があるのでございますが」

「ほう……」

「正直申し上げまして、その美酒は恐らく私くらいにしか用意でき
ない一品でございます」

「そんな酒があるのか？」

興味津々な様子で食いついてきた趙忠。

太公望は心でニヤリと笑いながら、なおも続ける。

「ええ。それを十常侍の皆様全員に振舞いたいと思いますので、大宴会など開きませんか？」

「我ら全員で宴、か……」

「はい。なにせ貴重な酒でありますので、全員で楽しんで戴かなければ損というものでしょう」

暫く腕を組んで考える趙忠。

太公望としては、否定の言葉が飛んでくる事とは一切思っていない。

これまでの関係を踏まえ、彼が是と答えるという確信があった。

「わしらも忙しいのだが……折角そんなに貴重な酒であれば、お主の顔を立ててやってもよいが」

「料亭の手配は私の方で行っておきます故、いかがでしょうか？」

「……ふむ、わかった。わしから伝えておくので、手筈はそなたに任せる」

「ははっ」

「詳しい日時は追って伝える、下がるがよい」

平伏したまま、太公望はニヤリと笑う。

そして――

「はっ、この呂尚が必ずや皆様を……素晴らしい『酒池肉林』へとご案内いたします」

――

一週間後、再び店を訪れた霞。

何時ものように良い酒を選んでも時に気づいたのだが……

「なんや呂尚、さっきからニヤニヤしっぱなしやで？」

先程から太公望が不審な笑みを浮かべ続けているのだ。

「ククク……張將軍、それより今日も買っただけなので？」

「まあなー……ふふん、今日はこれ買っわ！ 勿論安くしてや？」

「毎度！」

「あん？」

普段であれば値切った時点で渋る筈なのだが、今日はすんなりと受け入れられた。

霞は首を傾げつつ、会計しようとして財布を取り出したのだが……

突然、その手を太公望に掴まれた。

「な、なに？」

何を言うでもなく優しく微笑んだままの彼を見て、思わず顔が熱くなってしまう。

「ななな、なんやねんな？」

霞の問いに答えるように、太公望は一層力を込めて手を握る。

結局、最後まで笑みを浮かべたまま何も発しなかった太公望に見送られながら店を出た。

城へ帰る道中、霞は歩きながらぶつぶつと呟いていた。

「あ、あーびつくりした。あんなん聞いてへんやん……」

愚痴を零しながら手渡されたモノを見る。

態々手を握って渡してきたモノは……小さく折り畳まれた紙。

「顔あつつい……ってなんでウチが照れなアカンねん!!」

なにやらプンスカと怒りながらも、周囲に人がいないか確認をとる。

そして、中を開いて内容を見ると……

「なになに……『酒池肉林、明後日』……よっしゃ、詠っちに報告や!」

作戦決行の刻が迫る――

――

一方その頃、桃香たちはというと……

「天気いいのだー」

「ねー」

詠の執務室に居た時の太公望よろしく、まったりとしていた。

「太公望さん何してるんだろう……大丈夫かなあ？」

「お兄ちゃんなら大丈夫なのだ！ きつと悪い奴なんかあったという

間に倒してしまうのだ!!」

「うん、そうだね!」

桃香と鈴々は中庭にて寝そべっている。

その気持ちは洛陽で奮闘しているであろう、太公望へと飛んでいた。

「よし! 太公望さんが帰って来た時に安心できるようにしなきゃ!」

「おー!」

気合一発、勢いよく立ち上がる二人。

「じゃあまずは腹ごしらえなのだ!」

「あ、この間朱里ちゃんが言ってた美味しいお店行こう?」

「賛成な!のだ!」

「ふふ、じゃあ行こっか!」

そして二人は朱里お勧めの料理店へと向かうべく足を踏み出した。

だが……。

「二人して何処へ？」

ガシッ、と力強く首根っこを捕まれ、身動きが取れなくなる。

二人が恐ろしく低い声の聞こえてくる方へと首を回すと……

「仕事を抜け出して何をしていますのか？ 桃香様、鈴々？」

「あああ、あ、愛紗ちゃん……？」

「あっわわわわ……」

某長老も驚きのオーラを放っている愛紗がそこに佇んでいた。

尤も、神々しいオーラではなく禍々しいオーラなのだが。

「仕事をサボるとは何事ですかああああ……！！！」

「「ギャーーーー！！！」」

無念、長女と三女は軍神と化した次女によって引き摺られて行くの
だった。

月下の風、戟の下に舞うは首

洛陽の、とある高級料亭――

豊満の店主が特別な酒を振舞うという事で、十常侍は宴会場である高級料亭へと集結した。

この料亭は喧騒とした街から少し離れた場所にあり、落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

店に入る前、先頭にいた張讓が太公望に話しかける。

「呂尚よ、いやに警備が多いが……わしらの手勢ではないようだな？」

「ええ、何やら最近不穏な輩が皆様方を狙っているとの情報を耳にしまして……」

「何？」

「故に勝手ながら、私個人として警備を雇った次第でございます」

料亭の周りには張讓配下の護衛だけでなく、見た事のない兵士が剣を腰に下げていた。

「……そなたの用意周到さには驚かされるな」

「いえ、商人の情報を侮るなかれ、でございますよ」

「まったく、食えん男よ」

口ではそう言いながらも、張譲は内心手際の良さに舌を巻いていた。それを褒め言葉として受け取った太公望は小さく微笑み、料亭へと誘う。

「さあ、こちらでございます」

「うむ」

「……呂尚よ、わしらは何故中庭におるのだ？」

誘われるまま歩を進めていくうちに、料亭に中庭へと辿り着いた一行。

「こちらが本日の宴……酒池肉林の舞台にございます」

料亭を貸しきったというのだが、案内されたのは大広間ではなく中庭。

てつきり大広間にて盛大に行われると思っていたので、少々面食らう一同。

「確かに料理は運ばれておるが………どういう事が説明してもらった？」

彼らの着席と、目の前に広がる豪勢な料理を確認した太公望は中庭にある池に近づいていく。

歩きながら全員に聞こえるように説明を始める。

「さて皆様。酒池肉林とは、かつて殷の王妃……蘇皇后様が行った、それはそれは豪華な酒宴の事でございます」

太公望の言う殷の王妃とは……蘇妲己。

「ふむ。池を酒で満たし、そこに小船を浮かべて楽しんだ、と聞いておる」

「然様でございます。つまり酒池肉林とは云わば贅沢の極み！それも、限られた高貴な御方にのみ許された贅沢でございます！」

彼の熱弁に思わず声を上げる十常侍の面々。

要するに、この呂尚という男は我々こそ贅沢の極みをするに相応しいと暗に言っているのだ。

「ところで呂尚。肉林はわかる、この目の前の料理の数々だな？」

「酒池、とは一体何処に用意してあるのじゃ？」

飛んでくる質問に対し、怪しい笑みを浮かべる太公望。

「……皆様。実はこの呂尚、小さき頃に道士に会った事がございます」

「なに、道士に！？」

突然変えられた話題に食いついてきた彼らを手で制しながら、淡々と説明を続ける。

「はい。そしてその時、ある術を教えてもらったのです」

「ほう……真であろうな？」

「真にございます。して、その術というのは……」

池に掛けられた、小さな橋の柵に登った太公望は……懐からモモをひとつ取り出した。

「モモを贄に、ただの水を酒に変える術でございます」

「なんと！ そのような術があるのか！」

感嘆の声が上がり、太公望はそれに応えるように大きく頷く。

「ええ。なので、今からこの池を酒に変えてみせましょう」

目を瞑り、印を構える太公望。

皆が一様に固唾を飲んで見守っている中、徐にモモを池に放り投げる。

すると、池全体が眩い光を放った。

全員が驚愕に目を見開かせていると、太公望が柵から降りて来た。そして固まったままの彼らに平伏する。

「さて、これにてこの池は酒池となりました」

「……本当か？ 危険なものではあるまいな」

何進を謀殺した彼らにとって、毒を盛られる可能性に敏感に反応するのは当然のこと。

それを知っていた太公望は自ら池の中に足を踏み入れる。

「この酒、身体に害はありません。いくら飲んでも次の日には体内で水に変わる、という代物でございます」

そう言つて太公望は水中に潜る。

かと思えば、池の中を縦横無尽に泳ぎ始めた。

所謂クロールである。

張讓たちが呆気に取られている内に、ひとしきり泳いだ太公望が再び陸に上がった。

彼の顔はどこか朱く染まっている。

それを不審に思いつつも全員が池に近づいて行くと……

「こ、この匂いは……！？」

「んっ、ぶはっ……これは間違いなく酒だ！」

「しかもかなり美味なるものぞ！」

驚いている張讓達に向け、酔っ払ったような笑顔を向ける太公望。

「この酒はどんな高級酒よりも美味でございます」

「呂尚よ……そなたこそ天来の酒屋だ！」

「これはいい！ 正に酒池肉林に相応しいぞ！」

次々に述べられる賞賛の言葉に、太公望は再び平伏した。

「ありがとうございます。お気に召して頂けたのならば幸いです」

こうして、文字通り……浴びるように飲みまくりの酒池肉林の宴が始まった。

目の前の光景に狂喜乱舞する十常侍を見た太公望は、誰にもわからぬようにニヤリと笑ったのだった。

「おお、こんなに楽しい宴は久方ぶりよ」

飲めや歌えの酒池肉林が始まって数刻、十常侍達はすっかりと出来上がっていた。

酒池だけではなく、太公望が『豊満』から持ってきた様々な種類の酒に酔い痴れる。

「呂尚、そなたは素晴らしい酒屋ぞ！」

「ははっ、勿体無きお言葉」

張讓さえもが上機嫌で笑い続けていた。

そして全員が酔いに酔ったの見計らって、太公望が彼らに新たな提案をする。

「さて皆様、酒池は楽しんでいただけましたでしょうか？」

「おお、呂尚よ！ そなたの御蔭ですこぶる愉快ぞ！」

「実は私、別に『肉林』を用意しておりまして……」

その言葉に驚く一同。

「なに、別に用意してあるとな？」

「この食事が肉林ではないのか？」

趙忠の質問に頭を振る。

そして十常侍が見たモノは……呂尚という男の、かつてない程歪んだ笑みだった。

「……食事以外に思いつく『肉』はありますか？」

その質問の意図が解ったのか、全員が下卑た笑いを浮かべる。

『食事以外の肉』、と言われて彼らが同じく頭に浮かんだモノ、それは……肉欲の肉。

「ふふ……呂尚、そなたはまことに面白い奴じゃ」

「おお、今まで取り入って来た者の中で最も優秀な奴よ！」

この提案に益々上機嫌になる面々。

そして、太公望に促されるまま室内へと向かう。

――

「そなたは確か……」

大広間に通された彼らを待っていたのは……『豊満の弟の方』だった。

「はい、呂尚が弟、呂化にございます」

「何故そなたが此処に？」

「ふふ……私が準備させたのです」

張議の疑問に答えたのは太公望。

「こやつは見ての通り整った顔立ちをしています故、寄ってくる女子も一様に美女ばかりなのです」

「ふむ……成る程な」

「うむ。確かに精悍な顔つきをしておる」

その返答に満足したのか、誰も不思議に思う事無く頷き、席に着く。

「では呂化とやら、そなたが用意した女は美しいのか？」

「はっ、それはそれは美しく、正に絶世の美女にございます!」

「ほっ……」

絶世の美女、と聞いて声を漏らす十常侍。
皆一様に下品な笑みを浮かべている。

「では、ただいま呼びします」

「うむ、苦しゅうない」

「入れ」

そして呂化が手を叩くと、襖がゆっくりと開いた。

その場の誰しもが注目する中、襖の奥から現れたのは……正しく絶世の美女だった。

燃えるような赤髪、露出度の高い服装、眠そうな目、美しい肢体の至る所に入れられた刺青、そして……身の丈程もある、方天画戟。

董卓軍が誇る天下無双の飛將軍——呂奉先。

「なっ……！？」

招かざる客であり、本来いる筈のない彼女の姿を見た十常侍の全員が絶句する。

そんな中でいち早く我に帰ったのは張讓と趙忠だった。

「ど、どういふ事だ呂尚！？」

「どうって……美女でございますが？」

「ふざけるな！こやつは呂布ではないか！何故こやつがこんな所に……」

そこまで言つて、二人は顔を青冷めさせる。

彼の口元が歪んだ笑みに変わっていたからである。

「き、貴様っ……………！」

「ククク……………茶番はこれまでよ」

全てを理解した張讓は先程の酔いもどこへやら、太公望に迫り問い
ただす。

「呂尚、貴様…………我々を囚ったな!？」

「カーツカツカ! 今頃気づいたのか? 随分とマヌケなのう!」

大声で笑う太公望を見て、張讓が言葉を失う。

「賢いだけのじじい共が…………滑稽だのう?」

「い、何時からだ!? 何時から…………」

「何時からじゃと? わしは最初から董卓軍と通じておったわ」

嵌められた事を悟った張讓は齒軋りをする。

悔しそうにしている彼を嘲笑うかのように、太公望は笑い続けた。

「ケケケ、下衆のくせに知恵だけつけおって。おかげで全員を一堂に集めるのに苦労したではないか」

「……いいのか？　こちらには人質がおるのだぞ？」

「そ、そうだ！　我々に手を出せば人質がどうなるかわからんぞ！」

人質の存在を思い出した十常侍は強気に出る。

だが太公望はそんな彼らを侮蔑の目で見下ろした。

そして、救えぬ悪に再び絶望を贈る。

「たわけ。その人質を捨て置くと思ったか？」

「なあっ……！？」

再び絶句する張議。

自身の切り札も、彼の前では無意味なモノだった。

「わしがおぬしらに取り入ってる間、他の連中に救出の為に手筈を整えさせておった」

「なんだと……！」

「離れたこの料亭を選んだのも、どちらの情報が漏れても時間が稼げるように、だ」

宦官肅清と人質救出。

このどちらかのタイミングが万が一ズレたならば、必ず一報が届く。それを少しでも遅らせる為に、わざわざ遠くにあるこの料亭を選んだのだ。

「今頃人質は解放されておる頃合だろうな……そうだな、恋？」

「……ん」

首肯で答える恋。

半開きで眠そうにも見えるものの……その眼光は鋭く、彼女には珍しく怒りの炎が灯っている。

「そ、そんな……！」

顔を絶望の色に染める十常侍。

その時、なにやら外から騒々しい複数の足音が聞こえてきた。

「……ははっ、馬鹿め！　どうやらわしらの勝ちのようだな！」

「き、貴様らは今ここで捕らえられ、首を撥ねられるのだ！」

「おい、入って来てこやつらを捕らえよ！」

うって変わって強気な姿勢で指示を出す。

しかし、太公望は心底呆れたように溜息を漏らした。

「アホだのう……何故わしが『護衛』を増やしたと思っておるのだ」

「なんだと……？」

「料亭に入る前、おぬしがわしに確認したのは董卓軍の精兵よ」

「なっ……」

数刻前、張譲は『何故警備が多いのか』と問うた。

それに対して太公望は『十常侍を狙う輩がいるので、それに対応する為に雇った』と答えた。

「気づいたか？　その『十常侍を狙う輩』とは……他でもない、わ

しらよ」

目の前の現実にかたがたと身体を震わせる張譲たち。

そんな彼らに、恋と膠化が一步、また一步と近づいていく。

「く、来るな！」

「わわ、わしらにこんな事をしてただで済むと思っておるのか!？」

その言葉を見殺して歩み寄っていく恋と、懷から短剣を取り出す膠化。

逃げ出そうにも、酔いが回って足が纏れてしまう。

周りは既に兵士で囲まれていた。

そして――

「くそっ！ 何故わしらがこのような目に……」

趙忠が言い終わる前に、彼の首を恋の方天画戟が一閃する。

転がる首と、血飛沫を上げて崩れ落ちる趙忠の身体。

それを皮切りに、周りの兵士が一斉に彼らの身体に刃を突き刺した。

「ぎゃああああああ！！！」

断末魔の悲鳴を上げて次々に絶命する十常侍。

料亭に響くは、汚い絶叫と肉を刺す音。

あっという間に大広間は地獄絵図よろしく血の海と化した。

そして、最後に残ったのは張讓。

「何か言い残すことはないかのう？」

「あ……あ、ああっ……………」

余りの出来事に言葉が出てこない張讓を見て、太公望は恋に目配せする。

「…………月の、敵」

小さく頷いた恋が、無表情のまま方天画戟を振り下ろした。

脳天から真つ二つにされ、朽ち果てる張讓『だったモノ』。

全員の肅清を終え、座敷に転がる死体を見下ろしながら……太公望は小さく呟いた。

「ダアホ。『肉林』とは……………おぬしらの事よ」

廖化に死体処理の指示を出し、太公望はそのまま広間から出て行った。

料亭の中庭。

先程の橋の柵に腰掛け、足をブラブラとさせて月を見上げる太公望。
足元には未だ酒池が広がっているが、今は到底呑む気にならない。

「今宵は三日月か……趙公明の船を思い出すのう」

趙公明の船……クイーン・ジョーカー？世号が脳裏に浮かぶ。

あの死闘に於いて太公望は一回り成長し、その後の戦いに必要な力を身につけた。

封神された後もゴージャスな暮らしをしていた彼を思い出し、思わず苦笑してしまう。

「恋、そこにおるのであるっつ？」

太公望が背後に声を掛けると、闇夜に恋が姿を現した。

「王奕……泣いてる？」

「……泣いてなどおらぬ。少々感傷に浸っておった」

「？」

太公望の隣に移動した恋が小さく首を傾げた。

その仕草に微笑みながら、独白を綴ってゆく。

「わしは不死の道士故、これまでも彼奴らのような腐った連中は幾度となく目にしてきた」

権力に溺れ、欲に溺れた者たちを知っている。

彼らの末路は一樣に十常侍と同じだった。

「だが……やはり、気分が良いものではないのう」

「……」

再び三日月を見上げた太公望の顔はどこか悲しげで、儚いものに見えた。

そんな彼の頭を、恋が後ろから抱き締めた。

「む……？」

「……セキトたちも、こうすれば落ち着く」

「わしは犬畜生と同じかい……」

セキトとは恋の家族である犬。

恋はセキト以外にも多数の動物を保護、世話をしていた。

「大丈夫……王奕は、月を助けてくれたから」

「……そうか」

恋の純で粹な計らいに、太公望は小さく笑みを零す。

そして、ゆつくりと恋から身体を離し、柵から飛び降りた。

「さて、こうしてはおれぬな。霞と華雄の首尾を確認しに行くか」

「……ん」

太公望と恋は料亭の門へと向かって並んで歩いて行く。
その道中、ふと心の中で呟いた。

(やれやれ、これではどちらが救われたのか……わからぬわ)

自虐の笑みを浮かべる太公望を不思議な顔で見つめる恋。

ともあれ、十常侍の肅清劇はこうして幕を閉じた――

デレる軍師とダレる軍師（前書き）

十常侍討伐編、これにて終了です。

デレる軍師とダレる軍師

「王奕さん、本当に……本当にありがとうございました!!」

大粒の涙を流し、何度も何度も頭を下げる月。

太公望たちが十常侍を肅清している間に、華雄と霞の精鋭部隊によつて張讓の配下を殲滅、無事に月の両親は助け出された。

「ボクからも礼を言うわ……ありがとう」

同じく目尻に涙を浮かべて礼を言う詠。

珍しい光景ではあるが、霞は普段のように茶々を入れることなく太公望に賞賛の言葉を送る。

「しつつかし……奕ちゃんの策、ドンピシャやったな」

「ふむ、見事な策と準備だったな」

「華雄よ。皆が真名を交換した時に言ったであろう？ 信用とは徐々に得ていくものだ、とな」

太公望が人質救出と十常侍肅清を目的として用意したのが、この『酒池肉林作戦』。

酒屋に扮装した太公望が儲けている様を見せつけ、十常侍の目を引く。

ことあるごとに賄賂や酒を贈り、徐々に信用を得ていく。

その間に人質の周りにいる兵士の数や巡回ルート、交替時間などを徹底的に調べ上げさせる。

連絡役を酒好きで有名な霞一人に絞り、とにかく董卓軍との繋がりを隠した。

ある程度信用を得たところで連中を一堂に集め、纏めて肅清する。

この作戦は、多大な労力と時間を掛けたからこそ成功した。

「ねねも頑張りましたぞ！」

「うむ、おぬしの働きも素晴らしかったぞ」

太公望は胸を張るねねの頭をグリグリと撫でる。

ねねは酒の確保や台帳の偽装を担当し、裏方役としてこの作戦に大きく貢献した。

華雄も自分の中に燃える怒りを堪え、月の為に与えられた役割を粛々とこなした。

「王奕さん……私、なんて言ったらいいのか……」

「もうよいと言うに。これはわし一人では為しえなかった作戦。皆の、おぬしを想う心があつてこそ、だ」

そう、太公望の言う通りこれは全員が力を合わせたことで成功した。結果として月の両親は救われ、晴れて十常侍の操り人形を脱する事が出来たのだ。

「うう……皆さん、本当に……本当にありがとうございます、まし……ま、し……うえええええ」

「まったく……万事解決したんやから、笑わんかい！」

「なによ、そういう霞こそ泣いてるくせに」

「な、泣いてへんもん……！」

「恋殿——！　ね、ねねも頑張りましたぞ！　う、う、うああああ
ん——！」

「……ねね、偉い」

恋以外の全員が目には涙を溜め、それでも笑顔を浮かべている。

その微笑ましい光景を眺めていた太公望は、満足そうに頷くのだっ
た。

—

それから数日後——。

月の両親は衰弱しきっていたので、療養させてから安全な地へと護
送することで落ち着いた。

晴れて自由の身となった董卓軍の面々は、新たに多忙な毎日を送っ
ている。

そんな中、作戦の発案者であり一番の功績を挙げた太公望はというと……

「わはははは、働けー、働くのだー」

「……」

せっせと仕事をこなす詠の目の前で、寝そべりながらお菓子を食べていた。

「詠、次はモモをくれ」

「さっき食べたでしょうがっ！」

呑気に食べ物をねだる太公望。

シリアスモードを抜けた彼は、反動でダラダラモードに移行している。

「なんじゃ？　これまで働いた分、ダラダラしてはいけないとでも？」

「ぐぬっ……コ、コイツ……」

いつも以上にイライラしている詠。その理由は、目の前にある大量の仕事にある。

これまで一連の作戦に関する業務を最優先に取り組んだので、通常業務が滞っている。

それだけではなく、此度の事件に於ける後処理……つまり、暗殺等の真実を闇に葬り去る必要がある為、非常に忙しいのだ。

しかし何故かこの場に留まり、寝そべり、あまつさえ食べ物をねだる太公望に邪魔され、仕事は捗っていないかった。

「詠っちはよく働けんなあ……ウチなんて二日酔いで動く気せえへん」

ちなみに何故か霞もいたりする。

「おかしいのう、仙桃による酒は朝までに消える筈だが……」

「……霞の場合、普通の酒も呑んだからでしょ」

ある程度落ち着いたという事で、昨夜は作戦成功を祝して宴会が行われた。

その際『作戦が成功したらとおきを馳走する』という約束を覚えていた霞にねだられ、太公望は渋々貴重な仙桃を使用した。

飲みながら泳ぐという器用な真似をする程喜んだ霞だったが……

それだけで飽き足らず、何時の間にか『豊満』からちよるまかした酒も浴びるように飲んでいた。

「でも本当に残らないのね。不思議な術だわ」

「本来、仙桃は貴重なモノなのだがのう……」

「でも一番はしゃいでたんは詠っちゃん！」

「ぐっ……」

霞の言う通り、宴会で一番はしゃいでいたのは他ならぬ詠だった。

月に抱きついて両親の無事を泣いて喜んだり

太公望に腕を絡ませて、見事な作戦だったと延々誉めちぎったり

ねねの胸の大きさをバカにし、本気で喧嘩をしたり

華雄の頭を押さえつけ、酒池で無理矢理溺れさせたり

おおよそ普段の彼女からは想像がつかない程に暴れた事实は、詠にとつて消し去りたい過去となった。

そんな詠に、再びチエシャ猫と化した霞が肩に腕を回す。

「それに？ ウチ知らんかったわあー」

「な、なにをよ……」

「詠っちがあないにダ・イ・タ・ンやったなんて……なんちゅーかこう、奕ちゃんの腕に自分の腕を絡ま」

「うわあああああつ！ ほあああああつ！？」

霞の言葉を大声で掻き消そうと必死になる詠。

その顔は湯気が出る程真っ赤に染まっている。

暫くはからかうネタに困らないと満足気な笑みを浮かべる霞を振り払い、無理矢理話題の転換を図る。

「と、ところで最近耳にしたんだけど……王奕ってあの『天の御遣い』らしいじゃない」

「む？」

「お、なんやそれ？」

巧いこと霞の気を引いた詠は安心したように説明する。

「ほら、噂になってたじゃない。占い師が『天から遣いが舞い降りて云々』って」

「あー……なんかあったなあ、そういうの」

「天の御遣いの正体は道士で、軍師として劉備軍に参加してる……これ王奕の事でしょ？」

詠の質問に首肯で応える太公望。

「やっぱりそうなんだ……なんか風を操る術を使っつて噂だし」

「そらもう奕ちゃんしかおらんやん」

噂は噂を呼び、今では様々な内容で飛び交っている。

曰く……『風を纏う炎の男爵』、『双角を生やした鬼』、『モモ以外食べる事を禁止された仙人』、『童顔じい』などなど……

その殆どがおおよそ当たっているのだから始末が悪い。というか、最後のは只の悪口なのだが。

「まあ、確かにわしは『天の御遣い』らしいのう」

「へえー……占いも意外とバカにでけへんな」

「その呼び名こそ好かぬが、神輿となるには十分だな」

良くも悪くも、太公望の噂は大陸全土に広がり桃香の名と共に広く知れ渡っている。

担ぐに十分と云える派手な神輿となっているのだ。

「ところでアンタ、いつ帰るのよ？」

「ふむ、そうなのう……」

「えー、奕ちんずつとここにおつたらええやん！」

「そういうわけにもいかぬよ。だが……とりあえずは当面の問題を解決なんとかしてからなのう」

因みに醵化については休養をとらせた後、一足先に帰還させている。

その気になれば先行している彼を追い越す事も可能なので、とりあえずはこちらの後始末をある程度片付ける事にした。

「問題ってなんや？」

「これまで十常侍が行ってきた悪行の『ツケ』だよ」

「ツケえ？」

当面の問題は、大量に広がる竹間などではなく……

悪しき宦官が残した爪痕である。

「うむ。彼奴らは好き勝手しておったからのう……その噂は大陸全土に広まっておるだろうな」

「その何がアカンの？」

「例えば……『洛陽では帝を擁して好き勝手している』という噂が流れててもおかしくない」

「え、事実やん」

霞の意見は尤もであり、当初上洛する前の太公望の下にも同じような内容で情報が入って来た。

要領を得ない霞に、詠が加えて説明する。

「十常侍に代わって、今度はボク達が噂の渦中になるかもしれない
ってことよ」

「なんやそれ！ そんなん嘘っぱちゃん！！」

「人質を取られてたとはいえ、十常侍を黙認してたのは事実だし…
…諸侯の目にはどう映るかわからないわ」

「そうだ。一度流れた噂は中々収まらぬ故、厄介な問題なのだよ」

激昂する霞を手で制する太公望。

それでも納得しきれないのか、霞が詰め寄ってくる。

「なんとかならへんの！？」

「手がないわけではないが……望み薄だのう」

「それでもええ、どんな手や？」

「むう……月が適当な理由をつけて諸侯に召集をかければよいだけ
なのだが」

噂を覆す最も効果的な方法、それは諸侯に上洛させ、洛陽の様子を

直接見てもらうつというものだった。

「あー……確かに成功しなさそうね、それ」

「え、なんでなん？」

太公望の意見に同意する詠。

霞は置いてけぼりで、二人に質問した。

「素直に召集に応じるわけないでしょ。それこそ適当に理由つけて拒否するに決まってるわ」

「名を挙げたい諸侯はいくらでもおる。これを機と視て挙兵するやも知れぬ」

「ま、帝がいる以上大義名分はいくらでも立つて事よ」

「……ちつ。嫌んなるな、ホンマ」

霞は一気に不機嫌になり、小さく吐き捨てた。

「ふむ、とりあえずは……この問題に対して何か考えが浮かぶまで此処におることにするよ」

「……うん、悪いわね」

「なに、乗りかかった船よ。気にするでない」

問題は増えたが、今回はそれ以上に得るモノが大きかった。

猫の手を借りたい程忙しいのだが、一番の功労者である太公望を労いたい気持ちが詠にはある。

本心ではこれ以上彼の手を借りるのは心苦しいと思っていた。

だが。

「よし、ではとりあえず暫しダラダラするか」

「せやなあー」

「やっぱり今すぐ働け!!」

どうやら太公望が桃香達の下へ帰るのはもう少し後になりそうである。

覚悟に吹くは追い風

ところ変わって、こちらは劉備軍――

「廖化さん、お疲れ様でした!」

「はっ、勿体無きお言葉」

洛陽から帰還した廖化を劉備軍の面々が迎えていた。

「明後日までお休みにするので、ゆっくり休養してください」

「ありがとうございます!」

一礼した廖化は疲労の色を顔に張りつけたまま部屋を出て行く。

太公望の補佐として活躍した彼を桃香が労うのは当然のことだった。

「廖化さんの話を聞く限り、師叔の作戦は成功したようですね」

「さすがお兄ちゃんなのだ!」

「ああ、流石だな」

廖化から無事に董卓を救いあげた報告を聞いた一同はホッと胸を撫で下ろした。

難題を解決した太公望を改めて尊敬する。

「しかし、まさか酒屋を営んでいたとは……」

「朱里ちゃんと雛里ちゃんでもお酒屋さん開く？」

「はわわ、ま、まさか！」

「そ、そんなの思いつきもしませんよう！」

話を振られた朱里と雛里はブンブンと手を振って否定する。

流石の臥龍と鳳雛にとっても、この酒池肉林作戦は奇策中の奇策だったようだ。

「でも、後始末があるからもうちょっと残るみたいだね」

「仕方がないです……コトがコトだけに、処理するモノが多いんだと思います」

雛里の言う通り、これから処理する問題は少なくない。

……が。

現在、当の本人は寝そべりながらモモを齧っているという事実を知る由もなかった。

「私たちも当面は動く予定はないし、内政を重視していこう!」

「はい!!」

「動く予定はないと言っても、みんなの調練だけは怠らないようにね!」

「わかったのだ!」

それぞれに喝を入れる桃香を見て、愛紗は感慨深いモノがあった。

桃香の最大の魅力は、その人徳にある。

それ故、これまでは『甘い』と評されてもおかしくない程の優しさを見せていた。

(……桃香様は変わった)

だが、太公望と出会ってから彼女は変わった。

その甘さを真つ向から否定され、現実を受け入れろと言われた。

それまで辛いが故に見ていなかった足元を見るようにし、地に足を
つけようと必死にもがいている。

愛紗は知っている。

離里や朱里が太公望から授かった教本を借り、夜遅くまで読み耽つ
ている事を。

周倉に頼み込み、合間を縫って鍛錬の相手をしてもらっている事を。

まだまだ未熟とはいえ、彼女は王たる資質を得ようと努力している。
少しずつ成長していく己が主を見て、愛紗は嬉しそうに微笑んだ。

（趙雲殿ではないが、本当に太公望様は……道標のような御方だ）

「愛紗ちゃん、どうしたの？」

「あ……いえ、何でもありません！」

「そっか！　じゃあ、久しぶりに手合わせお願いしていい？」

「……はい!!」

満面の笑みで応える愛紗。

数刻後、気合の入りすぎた愛紗にボロボロにされた桃香の屍が鍛錬場に転がっていたそう。

――

翌日、彼女たちの下に一報が届く。

内容を読んだ桃香は顔を蒼白にさせ、俯いている。

「桃香様……?」

「……袁紹さんからの檄文だった」

「どんな内容なのだ？」

それこそ太公望が抱いていた、最大の懸念事項。

「暴虐の限りを尽くしている董卓さんから帝を救うため、連合を組んで洛陽に攻め入る……って」

「なっ……！？」

「そ、そんな！？」

奇しくも太公望の案じていたとおり、有力諸侯である袁紹が挙兵をすることにしたのだ。

それに伴い、各地に散らばる諸侯へ檄文を飛ばして連合への参加を要請。

「董卓って人はそんな事してたのか？」

「バカを言え！ 太公望様たちが肅清した宦官達の罪を董卓殿になすりつけたんだー！」

「あわわわっ、す、師叔と廖化さんの情報を聞く限り、檄文の内容は事実無根でしゅっ」

事情を知っている彼女たちは、この檄文内容に怒りがこみ上げてくる。

「はわわ、名を挙げる絶好の機会ですからね……恐らく色んな諸侯が参加するかと……」

「くっ……そんなの許せるわけなからう!」

「愛紗ちゃん、落ち着いて」

「桃香様……」

愛紗を宥め、少し考え込む桃香。
そして軍師二人に意見を請う。

「朱里ちゃん、雛里ちゃん、どう思う?」

「……恐らく、袁紹さん……諸侯にとっては事実なんてどうでもいいんだと思います」

「どういう事なのだ?」

「名を挙げる絶好の機会なので……この際、真偽はさほど重要ではありません」

「大義名分を掲げているので、この戦は避けられない……と思います」

「うん……そうだよね……」

二人の意見に同意する桃香。

会議室はシン、と静まり返っている。

皆が一樣に暗くなる中、愛紗が口を開く。

「……太公望様は、この事を知っておられるのでしょうか？」

「恐らくですが、董卓軍にも斥候から情報は入っていると思います」

「……」

「お兄ちゃんならきつとなんとかするのだ！」

鈴々の発言には根拠がない。

だが、その場にいた誰しもが鈴々の言葉に同意した。

「……そうだね、太公望さんならきつと何か手を打つ筈だよ」

「桃香様、我々はどうするのですか？」

愛紗の問いに、桃香は顔を上げて全員を見渡す。

「……罪のない人を見殺しにはできない。私たちも協力しよう」

「しかし……諸侯を相手にするには我々だけでは……！」

「そ、それに、師叔からの連絡を待った方が良いのではないでしょうか？」

「勿論そのつもりだよ？ どちらにつくかはこれから話し合う。ただ、いつでも出兵できるように準備はしておくよ」

そして、桃香は劉備軍の総大将として次々と指示を出していく。

「愛紗ちゃんと鈴々ちゃんは部隊を整えて！ 周倉さんと廖化さんを補佐につけて！」

「御意！」

「わかったのだ！」

「朱里ちゃんと雛里ちゃんは兵糧の準備をお願い！ 糜竺ちゃんと糜竺ちゃんへの引継ぎ忘れないでね！」

「はいっ！」

「わ、わかりました！」

指示を出された全員が慌しく会議室を出て行った。

――

会議室に残った桃香は力なく椅子に座り込む。

諸手を口の前で握り、目を閉じた。

（助けられるかな、私に……）

細い両肩に重く押し掛かる『弱気』。

そんな時、ふと出会った時に太公望に言われた言葉を思い出した。

『おぬしの理想は綺麗事ではない。何故なら、覚悟が籠っておらぬからだ』

キュツ、と唇を噛み締める。

そして、ひとつ大きく深呼吸をして目を開く。

その双眸には力強い……確かな『覚悟』が浮かんでいた。

「……助けるんだ、絶対に」

どちらにつくかは後述することになるが……

劉備軍、参戦決定——。

覚悟に吹くは追い風（後書き）

あれ……桃香のキャラが……

誰がために風は吹く（前書き）

130000PV突破！

ありがたやありがたや……

誰がために風は吹く

現在、洛陽には慌しく不穏な空気が流れている。

玉座の間に集まった董卓軍の面々と太公望。

そのうちの、月の横に控えていた詠が忌々しそうに呟いた。

「袁紹、意外と早いじゃない……」

彼女たちの下にもまた、斥候による情報が入ってきていた。

——袁紹が各諸侯に檄文を送り、連合を組んで攻め入ってくる模様。

これを聞いた詠は全員を集め、どう出るかの軍議を開いている。

「思っていた以上に早かったのう……」

予想はしていたものの、ここまで早く行動に出るとは思わなかった。

正直なところ、諸侯の気持ちもわからなくもない。

他の勢力からしてみれば逃すには惜しい、絶好の機会である。

「王奕、アンタ洛陽出るなら早くしなさい」

「そうだ。お前がここにいない必要はない」

一見冷たく聞こえるその言葉の裏側には優しさが秘められている。

が、詠と華雄の気遣いを鼻で笑い飛ばす太公望。

「たわけ。言っただであろぅが、乗りかかった船だとな」

「……それでこそ奕ちゃんや！」

太公望の背中をバシバシと叩く霞。

表面こそ笑っているものの、霞とて内心は腸が煮えくり返る気持ちで一杯。

そんな中、暗い表情を張りつけたままの月が心苦しそくに言葉を吐き出す。

「王奕さん、貴方は私の恩人です。これ以上巻き込むわけには……」

「月、くどいぞ」

「へう……」

遠慮する月を一蹴。

太公望の頭には自分だけ逃げるといふ選択肢はなく、既にこれからどうするか案を練っている。

「せやけど、どないするん？ アッチコッチから集まって来るんやろ？」

「決まっている！ 返り討ちにして自分たちこそ逆賊であることを思い知らしめるだけだ！！」

「恋殿の武があれば、連合など恐るるに足りませんぞ！！」

既に華雄とねねは徹底抗戦の構えをみせている。

霞も口には出さないものの、迎え討つつもりでいた。

彼女たちからしてみれば、ようやく手に入れた平穩を壊されるなどたまったものではない。

「……王奕、アンタならどうする？」

全員の視線が太公望に集まる。

あの警戒心が強い十常侍をも手玉に取った彼の手腕は、最早この場にいる全員が信賴していた。

指名されたものの、中々口を開こうとしない様子を見て全員に緊張が走る。

そして、長い空白の後、太公望が出した答えは――

「よし、逃げよう」

なんともアツサリとした逃亡宣言だった。

それを良しとせずに食いつくのは華雄と霞。

「何故だ！ 何故我らが逃げなければならないのだ!？」

「せや！ ウチらな―んも悪い事してへんやん!！」

「それを知っていて攻め込んでくる輩もおるのだ。まともに相手するだけ無駄だよ」

物凄い剣幕で迫る二人を推し留め、太公望は溜息を吐く。

そしてこの結論に至った経緯を説明し始める。

「はあ……よいか？　ここまできたら、最早善悪など関係ないのだ。諸侯が大義名分を掲げて攻めてくる、ただこれだけを考えればよい」

「王奕殿！　だからといって何故逃げるといふ結論に至るのですか！？」

「ねね。勝てれば問題ないが、万が一この洛陽まで攻めいれられたらどうするのだ？」

「そ、それは……」

言葉に詰まるねね。

太公望の言う通り、仮に連合軍が破竹の勢いで攻めてきて洛陽まで辿り着いたとしたら……

「……それこそ何も悪くない民が傷つくだけ、ね」

「その通りだ。おぬしらとて何も悪くはないが、優先して考えなければならぬのは戦に巻き込まれる民のことよ」

「それは……そうやけど……」

「なれば、最初から洛陽を空け渡す算段を整えておくのが一番だ」

そこで、黙って聞いていた月が重い口調で思いのたけを吐き出す。

「……王奕さん。混乱を招いた張本人である私が、これまでついてきて下さった人達を置いて逃げるわけにはいきません」

普通の……触れるだけで壊れてしまいそうな、儚い雰囲気とは違い、力の籠った目で訴える月。

そして月を後押しするように、皆が声を上げていく。

「大丈夫や！ 例え死んでも洛陽までは入れさせへん！！」

「そつだ！ ここは絶対に死守してみせる！！」

「……恋も」

「ねねもお手伝いしますぞ！！」

それぞれ意気込みを述べる一同。

皆一様に士気を高めているが……太公望は改めて盛大に溜息を吐いた。

「はああああ……おぬしら、ちいと血気盛んすぎるぞ?」

「何を言っている王奕! これくらいでなければ連合は押し返せんぞ!」

「落ち着けというに。なにも最初から逃げ出せなど言っておらぬわ」

頭上に疑問符を浮かべる華雄を尻目に、太公望は詠に周辺の地図を出すよう指示する。

「よいか? 此度の戦、董卓軍にとっては撤退戦だ」

「撤退戦だと?」

この戦のキーポイントを洗い出した太公望は、わかりやすい言葉で説明をはじめめる。

「そうだ。月の言い分はもつともだが、おぬしらを信頼してきた者を案じるなればこそ、生き残なければなるまい」

「そ、それは……」

「おぬしはその想いを最後まで背負って生きるがよい。例え周りには『董卓は死んだ』と思われていても、だ」

「どういう意味や？」

「ん、まあ……それは後々説明する」

月が言葉に詰まり、太公望は小さく息を吐いた。

そして皆を見渡し、優しく微笑む。

「おぬしらが悪く無いことは洛陽の皆が一番わかっておる。その事実だけでは不満か？」

「……奕ちん、ズルイで。そないな言い方されたらなんも言えへんやん」

「王奕さん……」

「安心しろ。月がどういう人間であるかは洛陽の民がよく知っておる」

太公望の笑みを見て、全員の頭が冷却される。

それを確認した太公望は打神鞭で地図をペシペシと叩いた。

「そこで、だ。洛陽に到るまでは？水関と虎牢関という砦がある」

「うん、両方とも堅牢な砦として有名よ」

水関と虎牢関は、連合にとって洛陽に攻め入る時に立ち塞がる大きな障害となる。

周りを山に囲われ、地の利を生かしたこの要塞は正に難攻不落。

これを迂回するならば逃げる時間を与えてしまう為、必ず連合はここを突破してくる。

「ならば、まず？水関と虎牢関で連合を喰い止める。ここまではよいな？」

全員が首肯する。

「先程も言ったが、これはあくまでも撤退戦。防衛戦と考えるな」

「……どういう事だ？」

「逃げる算段が整い次第、すぐさま離脱する事を常に頭においておくのだ」

太公望の説明が続く中、霞が挙手をした。

「逃げるって……何処へ逃げればええの？」

霞の問いを受け、打神鞭を一振りする。

すると風に運ばれ、周辺地図の上に大陸全土が載った地図が覆い被さった。

「それなんだが……月、おぬしは涼州におった事があるそうだな？」

「え？ は、はい……良くご存知で」

「洛陽へ来た際、おぬしの事について色々調べておった時に仕入れた情報よ」

地図のうち、西涼を指し示す。

「西涼の太守は確か馬騰なる者だったな。面識はあるか？」

「はい、何度かお会いしたことはあります。とてもお優しい方でした……」

「ふむ。ならば逃げた先で馬騰殿に保護してもらうがよい」

その提案に意義を唱えたのは詠。

「ちょ、ちょっと待ってよ。確かに月は面識あるけど……馬騰は多分連合に参加するわよ？」

「わかっておる。聞けば馬騰殿は漢の臣下と名乗っておるらしいな？」

「ええ、そうよ。だから今回は連合に参加するんじゃない」

馬騰という人物は、漢王朝に絶対の忠信を誓った忠臣。

自ら敵対するは諸侯でも蛮族でもなく、あくまでも『漢に仇為す者』。

詠の言うとおり、檄文の内容が内容だけに馬騰の連合側への参戦は必至。

それを踏まえたうえで、太公望は大きく頷く。

「だからこそ、だ」

え？ と目を丸くする詠。

彼の云わんとする事をイマイチ理解できずにいる詠に太公望は更に続ける。

「漢の臣下なる者が此度の戦に参加するということは……どうい

事かわかるか？」

「だから、漢に仇為す者から帝を救う為でしょ？ 建前だろうが、帝を翳されたら参加せざるを得ないじゃない」

詠は当然だと云わんばかりに言つてのける。

それを聞いた太公望はニヤリと笑った。

「正解だ。帝の名を使われた檄文だから参加せざるをえない……逆に言えば、馬騰軍は参加だけすればよい」

「？ 何を言つて………っ！」

そこでハツとする詠。

ねねも何やら気がついたようで、目を見開いている。

「建前上連合に参加してはいるものの、馬騰軍にとって『打倒董卓』など最初から頭にないのだよ」

「つまり……立場は連合だけど、どちらの味方でもない……」

「そうだ。だが馬騰殿と月は面識がある。さて、馬騰殿はどちらへつくかのう？」

言いながら、太公望は口角を吊り上げながら月に対して再度確認をとる。

「月。馬騰という人物について、わしも些か調べた事があるが……風評に踊らされるような者ではないと思うのだが？」

以前述べたが、太公望はこの世界の歪を調査すべく、大陸全土に間者を放っている。

先日趙雲から『仕えるに足る主』の話を聞いた時から、太公望は各諸侯についても情報を集めていた。

彼女の推していた曹操、孫策だけでなく、有力と呼ばれる諸侯の情報はある程度調べ上げていたのだ。

「……はい、聡明かつ正しい判断を下す事のできる御方です」

「頼んでみる価値はあるであろう？」

ねねと詠は顎に手を置きながら、頭の中を整理していく。

彼のヒントに刺激され、軍師たる頭脳がクリアになり、想像できうる現実が広がっていった。

「馬騰軍はあくまで漢の臣下としての参加……という事は」

「帝の無事……ううん。檄文の内容が虚偽である確認さえできれば、連合に最後まで付き合う筋合いがない……？」

恐る恐るといった感じで述べた意見に、太公望は頷いた。

それを見た二人は、確信を得たように言葉を繋いでいく。

「ならば……二つの関で食い止めてる間に、機を見て軍を撤退させ、洛陽を空け渡せばよいのですな!？」

「その後は連合を抜けた馬騰軍と合流して、涼州へと向かえば……
!」

盛り上がる軍師二人と、ポカンとしている霞と華雄。
因みに恋は首を傾げたままである。

「……盛り上がってる所悪いんだが、結局逃げるのなら今すぐ逃げるのとどう違うんだ？」

「あのね、どんな勢力が集まるかもわからないのに、今逃げて下手に力チ遭ったらどうすんのよ」

早まって今脱出しようものなら、こちらへ向かっている諸侯の軍と

遭遇する危険がある。

そうなつては元も子もない。

「それなら、諸侯が一同に集まったところで逃げればよからう！」

「水関に誰もいないと気づかれた時点で雪崩れ込んでくるわ。向こうも斥候くらい放ってるでしょうね」

「そもそも、この作戦のキモは『敗走に見せかけた撤退』にあるのだよ」

確実に逃げられる機を見極めることが最重要課題なのだ。

詠と太公望に理詰めされるも、華雄は何とか反論しようとする。

「ぐっ……だ、だが！ 馬騰軍は参加すると言っているではないか！！」

「はぁ……いい？ 漢の臣下を自称する馬騰があゝの檄文の内容で参加しないわけないの」

「そ、そうなのか……」

詠に捲くし立てるように言われ、華雄はおずおずと引き下がる。

そんな彼女の隣にいた霞は、何やら神妙な顔つきをして太公望に質

問を投げかける。

「奕ちん、それはわかったけど……馬騰がウチらを受け入れてくれるとも限らへんやろ？」

霞の的を得ている質問。

太公望もそれに対しても答えを用意してあった。

「勿論、その可能性もある。だから、もう一つの手を考えておる」

「なんや？」

馬騰は月たちを受け入れてくれるかもしれない。だが、あくまでも『かもしれない』なのだ。

無論、逃がすと決めた太公望が不確定要素が多い作戦を一枚で進める訳がない。

「わしら劉備軍は連合に参加するつもりなのだよ」

それを聞いた華雄が席を立ち上がろうとしたが、太公望に手で制された。

「連合として参加し、洛陽へ進駐したところで月を保護する。その場合、他の者は落ち延びる事になるかの」

「……なるほどな、ウチらは配下だからどうとでもなるって事か」

太公望は腕を組み、目を閉じる。

連合の本音として、洛陽から董卓軍を排せばそれで満足なのだろうが……なにぶん月の頸こそ最大の首級。

そこで、あるモノが必要になってくる。

「どのみち、『董卓』という人物の死体が必要になるので用意せねばならぬな」

「……どういう事？」

「最もわかりやすい『餌』……それさえ渡せば、連合は残党狩りにそこまで力を入れることはあるまい」

つまり仮の死体を用意してそれを董卓本人だとわからせればいい。

連合が洛陽へ進駐、この死体を発見すれば事は終わる。

「どこぞで割れる可能性もあるので、死体は『董卓』たる判断材料だけ残し、身元がわからぬように焼くのだ」

「ほんで、ウチらはほとぼりが冷めた頃に合流すればええのか」

「うむ、その通りだ。故にどちらの策にせよ……『董卓』は死に『月』が生きていくこととなる」

納得したように、ウンウンと頷く霞。

そんな中、ねねが拳手をし質問をする。

「偽の死体が連合に発見される頃には、洛陽から軍の撤退が済んでいる……その状態で総大将の死体だけあるというのは些か不審では？」

ねねの疑問はもつともで、軍が撤退しているのにも関わらず大将が残っているというのはおかしい。

その矛盾は誰しもが感じるものであろうが……

「そこで月の言葉を使うのだよ」

「え？」

言葉の意味を理解していないねねに対し、太公望は月を見ながら問いに答える。

「月は先程、混乱を招いた張本人が他の者を置いて逃げるわけにはいかぬ……と言った」

「は、はい……」

「これは『他の者を逃がす為ならば、自分は犠牲になっても構わない』と云った意味でも解釈できる」

言葉のマジックは太公望の十八番。

無意識のうちに引き込まれる、不思議な力を持っていた。

「わしが言った事を覚えておるか？ 月がどういう人間であるか、洛陽の民は知っておるのだ」

「つまり……？」

「民の口から言わせればよいのだよ。『責任を感じた董卓様は連合の目を引く為、城に火を放ち自決なさった』、『部下を逃がす為に自ら人柱となった』、と」

殆どの諸侯は噂の真偽などどうでもよく、名を挙げる為だけに集まってくる。

と云う事は、中には噂を偽と知っている者も当然いる。

だからこそ、民の言い分に矛盾は感じなくなる。

「民に偽装させた間者を放っておけば、噂は簡単に広まっていくであろうな」

「なっ……」

「ま、それでも感の良い者であれば何かを察するだろうが……偽の死体はあるし、その頃には月は馬騰殿かわしらの軍に保護されている」

啞然としていたねねが、時間をかけてようやく我に帰る。

「な、なんと……」

「連中が噂を利用したならば、わしらも噂を利用するまでよ」

ニタリと笑う太公望。

それを見て、詠やねねだけでなく霞や華雄、月も背中に冷たい汗が流れた。

——王奕という人は、一体何処まで見据えているのだろうか？

深謀遠慮……否、到底言葉では表現できないその智謀。

味方という立場にいたので実感がなかったが、全員が彼の頭のキレに恐ろしさを感じるのだった。

「……と、とにかく我々は水関と虎牢間で防衛、ここぞという機で一氣に退けばいいのだな？」

「そうだ。無理に当たる必要はなく、ある程度時間を稼げばそれでよい」

「洛陽の民を想うなればこそ……『逃げる戦』を前提にしなければならぬ、か」

あくまでもこの戦いは無事に逃げできれば勝ち。

確かに連合を返り討ちにすれば連中を逆賊として処分できるが……民を巻き込む可能性が残る以上、それは看過できない。

如何に連合の目を欺き、被害を最小限に留めて脱出するかが勝敗の鍵を握っているのだ。

「馬騰殿への説得はわしがする。月、密書を届けてやる故、今すぐに書け」

「霞と華雄、恋は出兵準備！　ねねはその補佐にあたりなさい！！」

「わかったのです！」

「よっしゃ！」

太公望と詠がそれぞれに指示を送る。

方針が決まった董卓軍は一気に慌しくなった。

そして太公望自らも重い腰を上げる。

「詠、死体の手配などはおぬしに一任する。ぬかるなよ？」

「行くの？」

「うむ。自軍へ戻る前に馬騰殿と接触せにやらんからのう」

西涼から来る馬騰軍にとって、連合の集結場所はかなり遠回りになる。

恐らく速い行軍をするであろう馬騰軍と接触を図るには、今は少しでも時間が惜しいのだ。

「……悪いわね」

恩を受けっぱなしの詠は、更に太公望の知恵を借りることに罪悪感を覚えていた。

親友と仲間の為、仕方ないとはいえ……心の中で葛藤し続けている。それを察知した太公望はポン、と詠の頭に手を置く。

「よい。今は皆の無事だけを考えて行動するのだ」

「……そうね、わかった」

大きな手袋は小さな頭をスッポリと覆う。

その優しい感覚に安心を覚えた詠の顔は、少しばかり綻んだ。

「よし……こちらの今後は詠の判断に任せるぞ」

「ふん、董卓軍の軍師はボクなの。必ず成功させてみせるわ」

「戦が始まる前に間者を送る故、ヨロシク頼む」

「任せて」

力強い返事に満足そうに頷いた太公望は身を翻し、玉座の間を出て行く。

董卓軍、出兵準備開始――。

馬一族と偉大な血統（前書き）

オリジナルキャラ（馬騰）が出てきます。

馬一族と偉大な血統

騎兵を率い、連合の集合場所へと向かって行軍しているのは――馬騰が大将を務める涼州連合。

その先頭では二人の少女が馬を並べていた。

「母様……そろそろ兵を休ませたほうがいいんじゃないか？」

「叔母さま、たんばぼもそう思う」

提案したのは馬騰が娘、馬超。

同意したのは馬騰が姪、馬岱。

馬超は長い栗色の髪を高い位置で結び、まるで馬の尾のようにピョコピョコ靡かせている。

従妹である馬岱は同じく栗色の髪を横で結んでいた。

「そうねえ……集合場所までまだかかりそうだし？　休む？」

二人の更に前を進み、至って軽く返したのが……西涼の太守、馬騰その人。

子を産んでいるとは思えぬ程に若々しいその風貌はどこか妖艶でもある。

「んじゃここら辺で休憩だ。たんぽぽ、伝えてきてくれ」

「はいはい」

一先ず近くに広がる草原で兵を休ませる事にした一行。

西涼から集合場所へは距離があるので、長い行軍になる事はわかっていた。

「あれ、私のお酒は？」

「没収したに決まってるだろ！ 酒飲みながら行軍する大将がどこにいるんだよ？」

「ここに」

さも当然といったように自分を指差す馬騰を見て、馬超は大きな溜息を吐いた。

「母様……頼むから大將らしくしてくれよ……」

「休憩なんだからいいじゃない！」

「なんでそこで怒るんだよ！ 逆だろ！？」

理不尽にも怒られる馬超。

彼女は西涼の太守としてあるまじき母の姿に、常々不満を感じていた。

「まったく、翠ったら本当に融通利かないわね」

「はぁ……母様が自由すぎるんだっての」

関係を知らない者であれば二人は間違いなく姉妹に見える。

それ程、馬騰という人物は若く、無邪気なのだ。

だが……一度戦に出ると雰囲気はガラリと変わり、鬼神の如き力を発揮させる。

それ故彼女は涼州連合を率いるくらいの人望と実力を持ち合わせていた。

「ねえねえ叔母さま、董卓さんって悪い人なの？」

いつの間にか戻ってきた馬岱が馬騰の隣に腰掛けた。

「うーん……少なくとも董卓ちゃんはその子じゃないわ」

「じゃあ、なんでたんぽぽ達は連合に参加するの？」

「そりゃあんな檄文飛ばされたら参加しないわけにいかないわ、漢の臣下としては」

ふーん、と言いながら足をバタバタさせる馬岱。

反対隣にいた馬超が槍を握って立ち上がる。

「行けばわかるだろ？ 都の民が苦しんでるなら助けるだけだ！」

「お姉さまって真っ直ぐだね、悪い意味で」

「そこは普通良い意味で、だろ！！」

馬岱が悪戯っぽく笑う。

それに噛み付いた馬超は太陽に槍を翳し、決意を述べる。

「私はこの槍で困っている人を助け……るん………だ？」

「？ どうしたの、お姉さま？」

「なによ、振りかぶったまま固まっちゃって」

腕を上げたまま固まる彼女を怪訝な目で見る二人。

馬超は目と口を見開いたまま、ある一点を見て固まっていた。

「？」

二人もその方向を見る。

そして、馬超と同じく固まってしまった。

「……人が、飛んでる？」

視線の先には……一人の青年が、風を纏って空を飛んでいた。

「え、あれ……こ、こっちに來てないか？」

「え、ええー……」

従姉妹同士で目を白黒させているうちに、徐々に近づいてくる青年。

そして、ついに彼女たちの目の前に降り立った。

音もなく地に足をつけると、辺りをささやかな風が包んでいく。

「ななな、なんなんだ……！？」

状況を掴めない馬超がひどく慌てる。

そして、青年は自分たちの方へと近づいてきた。

「と、止まれ！　なんだお前は！？」

慌てながらも槍を構え、切先を向ける。

だが、青年はそれを無視してキョロキョロと辺りを見渡し、ゆっくりと口を開いた。

「おぬしらが馬騰殿の率いる涼州連合で間違いないな？」

不思議な衣服に身を包んだ、黒髪の青年の声は……どこか優しいものだった。

馬騰は一瞬あつけにとられていたが、すぐに柔和な笑みを浮かべる。

「……ええ、私がその馬騰よ」

「ほう、そなたが……思っておったよりも若いのう」

「いゃん、照れるじゃない」

少しの間でいつもの調子を取り戻した馬騰は、やはり大した逸材であるとわかる。

馬岱は未だに固まったままなのだから。

「だだだ、誰なんだお前!？」

「落ち着くがよい、わしは別に危害を加えに来たのではない」

「だから何で空を誰がお前!？」

「落ち着けというに……」

慌てる余り支離滅裂な言葉を放つ馬超。

目をグルグルさせる彼女をとりあえず置いておき、馬騰へと向き直る青年。

「貴方、仙人？」

「うんにゃ、道士だ」

「ど、どう違うの……?」

再起動した馬岱の疑問を流し、名乗りを上げる。

「わしは太公望。『天の御遣い』と呼ばれ、劉備軍の軍師をしておる者だ」

「……はい?」

名前を聞いた馬騰と馬岱はマヌケな声を漏らしてしまった。

そのまま動きを止めた二人に代わり、馬超が口を開く。

「た、太公望っていうのか?」

「うむ、そうだ」

「空を飛んでたのは術か?」

「むう……術とはちと違うが、まあ似たようなモノだのう」

不審人物が名乗ったことで、とりあえず落ち着きを取り戻した馬超。

空を飛んでいた事には驚かされたが、道士であれば、と納得した。
持つべきものは純真な心である。

「ふーん……で、道士のアンタが何の用だ？」

「うむ、ある人物から馬騰殿への書状を預かってきてな」

「なんだ、そういう事か。母様、聞いー」

言い終わる前に、後ろから伸びてきた手に口を思いつき叩かれた。

「へぶつ！？」

彼女を押しつける形で詰め寄ってきた馬騰と馬岱。

余りの痛さに悶絶する馬超を無視して太公望に掴みかかる。

「ね、ね、今の私の聞き間違いじゃないわよね？ よね？」

「お姉さまはアレだからアレだけど、もう一回名前言って？」

「わ、わかった……わかったから……放せ……」

胸倉を掴まれてガクガク揺さぶられた太公望は若干顔色が悪くなっている。

そして、口を叩かれた馬超が怒り心頭で二人に食って掛かった。

「~~~~っ！ 何すんだよ！ 痛いじゃないか!!」

「うつさいこのアホ娘!!」

「なんでこの人の名前聞いて普通にしてくれるの？ バカなの？死ぬの？」

太公望そっちのけで言い争いを始める馬一族。

というか、その間も太公望は揺さぶられ続けていたりする。

「コホン……もういいか？」

「『ゴメンなさい』」

暫く騒いだのち、落ち着いた三人は素直に謝罪。

未だに顔色の優れない太公望が改めて名乗る。

「改めて……わしは太公望。劉備軍の軍師をしており」

「ちょ、ちょっと待って！」

「うむ、恐らくおぬしらの想像している存在で当たっており」

驚きを隠せない馬騰と馬岱。

そんな二人に、馬超が呑気な声で質問する。

「なあ、二人してなんでそんなに驚いてるんだ？」

「逆になんでお姉さまは驚かないの？」

「翠……勉強しなさいってあれ程……」

二人に可哀相な人を見る目を向けられた馬超は一步後ずさる。

「う……な、なんだよ？」

「はぁ……太公望って人は、何百年以上も前の時代で活躍した偉人の名よ」

「……はぁ？」

何言ってるの？ ボケた？ と云わんばかりにキョトンとする我が娘にイラツとする母・馬騰。

「信じられぬと思うが、わしは本物の太公望だ」

「……嘘だよね？」

「む、嘘などではないわ。道士は不老不死だからな」

何故か得意気で言い放つ太公望を馬岱と馬騰は未だに疑惑の目で見ている。

しかし……空を飛んでいた事実もあるし、道士というのもあながち間違いではない。

それに、見た事のない服を着た彼から発せられる雰囲気は……どこか神秘的で、高貴なイメージをさせる。

「でも……ちょーつと信じられないわね」

「たんぽぽも……道士さまっていうのは理解できるけど」

「うーん……」

首を傾げる三人。

簡単に信じてはもらえないとわかっていたが、思わず頭を掻く。

「困ったのう……何かないか」

懷をガサゴソ漁り始めた太公望の手に、小さく固いモノが当たった。

「おお、コレがあつたのを忘れておつた！ 桃香たちにもコレを見せれば早かつたな！」

一人得心がいったように頷く太公望。

三人は彼が懷から取り出したモノに注目した。

見ると、どうやらハンコのようなものである

「コレはわしが周の軍師をしていた時に使っておったハンコだ」

「え!？」

「あの時はハンコを押すという作業だけでも忙しかったのう……」

シミジミと言った感じで遠くを見る太公望。

馬騰はそのハンコを穴が開くほど見つめていた。

「あとは桃香達にも見せた辞令か、ホレ」

ピロツと投げ渡された書状を見ると、なんと周の軍師に任命するという辞令だった。

渡された辞令及びハンコと太公望を交互に見つめる。

「こ、こんなの……国宝級じゃないの……」

「じゃ、じゃあ……この人って本物の太公望、さま……?」

「お? 信じてもらえたか?」

辞令はともかく、ハンコはかなり高級な質感があり、到底簡単に手に入れる事ができないモノだと判断できる。

「少しは落ち着いたか？」

「『天の御遣い』って……本当にトンデモない人だったのね……」

どうにか『太公望』であることを理解してもらえ、ホッと安心する。

馬超も馬岱から説明を受け、目の前の青年が如何に大層な偉人であるかを感じ知らされた。

「そ、それで……太公望さまは、どうしてたんぽぽ達のところに来たの？」

「……だからさっきアタシが言おうとしたのに、二人が邪魔したんじゃないか」

「太公望さまって聞いて驚かないお姉さまが悪いんでしょう！」

再び衝突するジャジャ馬二頭に苦笑いしつつ、馬騰に訳を話し始める。

「実は、馬騰殿にお願いがあつて来たのだ」

「あら、何かし……何でしょう？」

「よい、わしは喋り方など気にせぬ」

「そう？　なら普段どおりでいいわね」

まずはコレを見て欲しい、と言いながら再び懷を漁る。

そして取り出した一枚の書状を馬騰に手渡した。

「これは……？」

「月……董卓からの書状だ」

「董卓ちゃんから？」

眉を顰めつつ、書状を開いていくと……そこには此度の戦の『真実』が書かれていた。

「わしは劉備軍所属なのだが、訳あってあやつらに助力しているのだ」

「ふーん……やっぱり檄文の内容は事実無根だったわけね」

「うむ、わしとしては連中を助けたい。なので、おぬしの力を借りたく参上した」

馬騰としても董卓の人柄は知っているし、檄文の内容が嘘なのであれば連合に協力する意味はない。

あくまで漢の臣下としての参加なのだから。

「おぬしが漢の忠臣であることも知っておる。月と面識があることもな」

「なるほどねえ……確かに黄巾賊が好き勝手やる前に会った事あるし？」

「わかっておると思うが、連合に大義などない。ただ名を売りたい

奴らの集まりよ」

心底ウンザリしたように溜息を吐く太公望。

因みに、未だ馬超は従妹を追い駆け回している。

「ま、確かに漢の臣下として参加しなきゃいけないけど……別に連合に力を貸す筋合いはないわね」

「そこで、だ。よきところで軍を退いて、董卓軍を西涼で匿ってはもらえぬか？ 月の死体は偽のモノを手配する」

考え込む馬騰。

悩んでいるところを見る限り、どうやら彼女にも月を救いたい気持ちはあるようだ。

「うーん……まあ、私たちは参加した事実さえあればいつでも退けるけど……」

「既に撤退する手筈を進めておる故、おぬしが手引きしてくれれば円滑にゆくのだがのう」

「叔母さま、助けてあげたら？」

いつの間にか馬岱がすぐ側まで来ていた。

遙か後方では馬超が四つん這いになり、肩で息をしている。

「うーん、でも……イヤ」

「……………は？」

ハッキリと拒否の意を示す馬騰。

「確かに董卓ちゃんは悪い子じゃないけど、私にはそこまでの義理はないわ」

「ふむ……………」

「それに、偽の死体っていつでもねえ……………万が一バレた場合こっちが迷惑だもん。漢の臣下だからこそ、ね」

（むう……………意外と強かだな。いや、流石といったところか）

容姿や態度に似つかない程の強かさを持っている彼女に、太公望は心の中で舌打ちをした。

「……………どうしてもか？」

「どうしても。貴方が彼女たちを逃がす事実はどうでもいいし、言わないであげるけどね」

漢の臣下であるが故、危険な爆弾を抱えるわけにはいかない。

冷たいようではあるが、彼女の言い分は至極真つ当なのだ。

むしろ漢の臣下として、西涼を治めるいち太守として極めて正しい判断であると云える。

「母様……」

「叔母さま……」

復活した馬超と馬岱が何かを強請るような眼を向けるも、意見を曲げる素振りは見せない。

いくら大陸の英雄に頼まれたからといっても、譲れないモノはある。

「はあ……」

固い意志を宿した馬騰の眼を見た太公望は大きく溜息を吐いた。

だが、彼もここで諦めるつもりはない。

「羌の血を引く者からの頼みでも、ダメかのう？」

彼の持てる最高の手札が、今切られた。

「……………え？」

「おぬしの母は羌出身なのであろう？ 同族のよしみで頼めぬか？」

「そういえば……………太公望って……………」

「うむ、羌族の出だ」

太公望は羌族出身である。

村を焼かれ、生き残ったところを原始天尊にスカウトされ、仙人界へと進んだ。

この時奇跡的に生き残った、太公望の兄妹の曾孫が呂邑姜。

正しく同じ血が流れているかといわれれば、恐らく否であるが……………それでも彼は『羌族』という意味では先祖なのである。

「血統的に云えば差異があるだろうが、『羌の血を引いている』という点に於いては同族であろう?」

「……ズルイわね」

馬騰は苦い笑いを零しながら、小さく愚痴る。

「羌族が住める地に導いてくれた先祖の頼みを聞けないわけじゃないの」

「わしが直接導いたわけではないのだがのう……」

それでも、羌の血を引く者からしてみれば太公望という人物は崇めるべき先祖に変わりはない。

「……はあ、わかったわよ! 条件付きで手を貸すわよ!」

「おお! 助かる!」

手を叩いて喜ぶ太公望。

彼が馬騰達に対し、『王奕』ではなく『太公望』と名乗ったのはこのためだった。

断られる可能性も視野に入れていたため、こうして『対抗策』を用意しておいたのだ。

「で、その条件なんだけど……」

「うむ。月は我々で保護するので、配下の将と兵を頼む」

「……………もしかして最初っからそのつもりだったんじゃないの？」

正に突きつけようとしていた条件を先に言われ、太公望をジト目で睨む。

「によほほほ、さーてのう？」

（してやられたわね……………まあ、兵の強化ができると思えばいいか）

口を3にしてとぼける偉大な先祖の姿を見て、馬騰は小さく笑った。

「ねえねえ、結局どうするの？」

「母様、説明してくれよう……………」

「んー？ 集合場所へ行くのは変わらないわ。退く機は任せていいのよね？」

「うむ、わしの方で『合図』を送る故、ヨロシク頼む」

置いてけぼりを食らっている二人をよそに、話は進んでいく。

「わしも連合側として参加するが、他の者の前では『王奕』と呼んでくれ」

「あら、偽名？」

「ただでさえ『天の御遣い』だとか騒がれておるのだ。あまり面倒になっても困るのだよ」

既に面倒なことになっているという現実を見ない太公望。

「それに、向こうに着いたら間者があるだろうし……あまりわしの事に触れぬようにな」

「ん、わかったわ。翠も蒲公英も『太公望』って呼ばないでよ？」

「うん！ 王奕さまだね！」

「う、うん……」

天真爛漫に返事をする馬岱は、鈴々と似たものがある。

対して馬超は、間違って呼ぶ可能性を考えて不安げな顔をしていた。

二人の少女の頭を一撫でし、太公望は背を向ける。

「よし、ではわしもそろそろ行くとする」

「王奕さま、もう行っちゃうの？」

「自軍に戻って事情を説明せにやらぬのだよ」

優しく微笑み、馬騰に再度礼を言う。

「馬騰殿、此度の要請に応えてくれたこと、感謝する」

「ふふ、それじゃあお酒でも奢ってね？」

「うむ、必ず」

口約束を交わした太公望は再び風を纏い、宙を舞っていく。

あっという間に彼方に消えた姿を見て、馬騰は微笑んだ。

「よし、休憩終わり！　せっせか行くわよ！！」

二人に向き直った馬騰は腕をブンツ、と振って力強く宣言した。

「おっ、母様がやる気出た！」

「そりゃあお酒奢ってもらえるもの」

「そっちか!!」

最後まで母に振り回される馬超なのであった。

西涼連合、行軍再開――。

龍は風の下に

準備を終え、いつでも出兵できる状態の劉備軍。

太公望からの連絡を今や遅しと待っていた桃香達の下に、上空に人影在りとの報告が。

その人影こそ……目立つ事は嫌い、と豪語しておきながらも自重しない太公望だった。

「太公望さん！」

「太公望様！」

「お兄ちゃん、おかえりなさいなのだ！」

駆け寄る桃園三姉妹に笑顔で答える。

「久しいのう、元気だったか？」

「はい、太公望様もご無事な様で何よりです」

愛紗の言葉に小さく笑みを返し、辺りを見渡す。

「よし……出兵準備は整えておいてくれたらしいのう」

「太公望さん、どうするの？ 一応準備は整ってるけど……」

太公望は内心、手際の良い桃香に関心していた。

洛陽へ赴いている間に少し成長したらしく、それは太公望にとって何より嬉しい出来事だった。

そんな桃香の問いに、太公望は小声で返す。

「月……董卓一派を逃がす」

「やはり、ですか」

「詳しい事は道中話そう、とりあえず出兵だ。わしら劉備軍は連合に参加する」

彼の帰還により慌しく動き始める劉備軍。

その中で、太公望お抱えの間者を呼びつける。

「先行して董卓側近の賈馥なる者に伝言を頼む」

「はっ」

「よいか？ 『馬は成れり。龍は月の詠を豊満にて』、だ」

「了解しました！」

【馬騰の協力を得ることに成功したが、月と詠はわしら劉備軍が保護するまで『豊満』に隠れているように】

――

「なんと……涼州連合まで取り入れたのですか……」

太公望の横に馬を並べた愛紗は感嘆の声を漏らす。

「うむ、だが安心はできぬよ」

「え？　でも太公望さん、殆ど準備整ってるんじゃないの？」

反対隣にいた桃香が首を傾げる。

少なくとも自分が想定できる以上に算段を整えている筈なのに、と。

「いや、下準備は問題ない。そっちではないのだよ」

「って事は……連合に何か問題があるの？」

「問題というか、不安材料……だのう。キレ者がどれだけ集まっておるかが気になるところだ」

撤退できれば勝ちという戦に望むにあたって、最も厄介な状況を思い浮かべる。

「例えば……月と詠の事前準備が完了する前に看破された場合」

「あ……それに、関を予想以上の早さで落とされた場合？」

「うむ。そうなのだが………」

「？　どうかした？」

太公望の怪訝な表情に小首を傾げる桃香。

一拍置いて、太公望は愛紗に小声で質問する。

「桃香に何があつた！？　まるで別人ではないか！！」

「太公望様がない間、朱里や雛里に勉強を教えてもらってたのですよ」

「なんと……！　少し化けたな」

「ええ、私も驚いていますよ」

笑いあう二人。

その時、太公望は背後になにやら不穏な気配を感じた。

見ると、桃香がニコニコ笑っていた。

「聞こえてるよ、二人とも？」

口元は笑っているものの、目は一切笑っていない。

その姿に戦慄を覚えた二人は……

「さて愛紗、気を抜くでないぞ？」

「御意！」

スタコラサッサと馬を走らせ逃亡を図る。

「逃がさないんだから！」

「待て！ 何故剣を抜く！？」

どうやら暫く見ない間に剣閃も鋭くなったようで。

ブンブンと振り回される宝刀を必死で回避する太公望。

「いつの間に董卓さん達と真名で呼ぶ間柄になったの！？」

「それは関係なかるうに！」

「ある！！」

「ギャーーーー！！！！」

こうして、少しばかり騒ぎながらも連合軍へ参加すべく行軍を続ける劉備軍だった。

因みに愛紗は早い段階で避難している。

水関の近くには、連合軍が既に集結していた。

曹、孫、袁、公孫、馬、孔……等々。

掲げられた牙門旗の数を見ても、各地の諸侯が勢揃いしている事がわかる。

桃香率いる劉備軍も無事合流し、天幕の中に皆が集まっていた。

ここからは話す内容を他の軍勢の間者に聞かれる可能性がある。

なので、作戦は道中で太公望から全て聞かされていた。

「よいか？　わしらはあくまで連合軍。そのことを念頭に行動するのだ」

「あわわ、が、頑張りましゅっ」

「気を張らんでよい。堂々としておればそれでよいのだ」

「わかりました、王奕様」

ここからは全ての者に『王奕』と呼ばせる。

因みに鈴々については……いつもどおり『お兄ちゃん』なので一切の問題はない。

確認を取った劉備軍の天幕に、金色の鎧に身を包んだ兵士が入ってきた。

「これから我が主、袁紹様の天幕にて軍議を行います故、宜しくお願ひします」

「む、相わかった」

「えーと……王奕さんと朱里ちゃんていいよね？　行こう！」

「は、はい！」

三人は他の者を残し、軍議を開くべく諸侯が集まっている大天幕に向かった。

その場所は、今回の発起人・袁紹の本陣にある。

太公望は緊張する桃香と朱里を落ち着かせてから、天幕の中に足を踏み入れる。

「……」

入幕してきた桃香たちに、その場にいた全員の視線が向けられた。

より一層固まる桃香と朱里だったが、太公望は悠々とその光景を眺めていた。

（ふむ……）

正面に座っているのが恐らく袁紹。金色の鎧を身に纏い、同じ色をした髪を派手に巻いている。

彼女の左にいる、同じく金色の髪を巻き、髑髏の髪留めをしている少女。後ろに控えている二人もかなりの手練に見える。

反対に、右手に陣取っているのは、その美貌に不釣り合いな獣のような眼を光らせている少女。

一通り見渡して、太公望が目にしたのはこの三人。

（恐らく袁紹、曹操、孫策だのう……成る程、間者の報告どおりだ）

心の中でほくそ笑んでいると、離れたところに座る馬騰と目が合った。

そして、彼女はあるうことが片目を閉じ目配せしてきたのだ。

（あんのアホウ……わざとやっておるな！！）

太公望は口に出さずに抗議の言葉を送る。

そんな時、ふと懐かしい声が聞こえてきた。

「お！ 桃香達じゃん！ 元気そうだな」

「あ……白連ちゃん！？ よかった、知ってる人がいて！」

「あはは、緊張してるみたいだな。王奕も久しぶりだな」

「うむ、おぬしも元気そうだなによりよ」

声を掛けてきたのは公孫賛。

共闘以来の思わぬ再会に喜びを見せる桃香。

見知らぬ人間ばかりのこの場で友人を見つけて安心したようだった。そして、公孫賛とのやりとりを見ていた金色の鎧を纏った少女が口を開いた。

「貴女が劉備さん？」

「あ……はい！」

「私が『この連合を立ち上げた発起人』、袁本初ですわ！」

太公望は偉そうに名乗る袁紹を横目で見ながら、公孫賛に耳打ちする。

そして、左右に構えるのが曹操と孫策である事を確認する。

すると袁紹が突然太公望の方に目を向けた。

「それで……貴方が『天の御遣い』として軍師をしている道士の方
ですの？」

その言葉に天幕内が一気にざわつき始める。

太公望は彼女たちに力を貸す『天の御遣い』として、既にその名を
知られていた。

「如何にも」

「面白いとは思っけど、道士なんて信じられないわね」

声のした方に目を向けると、なにやら孫策が太公望を見つめていた。

その彼女の言葉に、無意識に頷く諸侯。

「どれ、ではひとつ自己紹介とゆくか」

太公望はそう言いながら打神鞭をゆっくりと振る。

「……え!？」

すると、天幕内に突如として風が巻き起こった。

驚愕の出来事に身を固まらせる一同。

それに満足した太公望は桃香と朱里に目配せをし、楽しげな笑みを浮かべながら席に着いた。

「……面白いじゃない」

「ふうん……本当に道士なんだ」

「なに、大したことではない」

曹操と孫策が、それぞれ玩具を見た子供のような目を向けてくる。

そんな視線もどこ吹く風、太公望は『発起人』に声を掛けた。

「袁紹殿、会議を始めるのでは？」

「……はっ！？　そ、そうでしたわね……コホン！　では皆さん、本題に入りますわよ！」

我に帰った袁紹は慌てて会議を始める。

馬騰は笑いを堪え切れずに若干声を漏らして震えていた。

「洛陽にいる董卓さんは、あろう事か帝を擁して暴虐の限りを尽くしています！」

声高々に演説を始めた袁紹だったが、桃香と太公望、朱里たちはその内容に顔を顰める。

「そこで私は名家……そう！大陸を代表する名家の当主として、悪逆である董卓さんを討ち滅ぼします！その為に、皆さん微力を貸していただけませんか？」

「おぬしは随分と名家を鼻に掛けるのう……」

袁紹の演説を聞いて、太公望は呆れたように声を出した。

ちなみに桃香と朱里はそれに驚き、慌てている。

「何を言ってるんですの？ 袁家が名家なのは周知の事実ですわ！」

「今この場に於いて生まれは関係なかるうに……」

「その通りね。そんな演説で力を貸す気になると思ってるのかしら？」

同じく呆れた声を出したのは曹操。

袁紹は地獄耳の如く彼女の言葉に反応する。

「おチビさん、何か言いました？ 身長のように小さい声だったの
で聞こえませんでしたわ」

「あら？ 見た目だけじゃなく、耳まで老いたようね」

「……相変わらず生意気なチビッコですわね」

「貴女も相変わらず口の五月蠅いおばさんね」

突然始まった二人の言い争いに、桃香と朱里は為す術もなく、ただ
ただ狼狽する。

それを止めに入っただのは公孫賛だった。

「止めるよ二人とも。今は喧嘩する為に集まったわけじゃないだろ
？」

「彼女の言う通りね。下らない言い争いは外でやってもらえる？
私たちは董卓をどうするかで忙しいんだけど」

公孫賛に同意し、皮肉を込めて二人を諫めたのは……孫策。

予想していなかったところから横槍が飛んできて、二人は渋々怒気

を収めた。

そして朱里が周りに聞こえないよう、小声で太公望に質問する。

「だ、大丈夫でしょうかこの連合……」

「さてな？ 烏合の衆なれば楽よのう」

意地悪そうな笑みと共に返された言葉に朱里も口元を引き攣らせる。

落ち着きを取り戻したのか、袁紹が立ち上がり再び口を開いた。

「可愛げのないおチビさんは放っておいて……連合をに一つだけ足りないものがありますわ！ それがなんだかお分かりかしら？」

袁紹は誰の返事を待つでもなく、そのまま言葉を繋げる。

「この私率いる袁紹軍を筆頭として、精鋭も兵糧も揃っているこの連合に足りないもの……それが何かお分か」

「華麗で雄々しい優れた総大将では？」

突然の太公望の言葉に諸侯が驚く。

だが――

「その通り！　王奕さんと言ったかしら？　中々わかってらっしゃいますわね」

「さいですか……」

太公望はこの短時間で彼女の性格を把握していた。

益々笑みを浮かべる袁紹。

彼女が何を言いたいのか理解した面々は、興味なさそうにしている。

「では、この連合に相応しい総大将の条件は？　名家で、強大で、華麗な軍勢の当主は誰かしら？」

「……」

「皆さんわかっているようですね……そう、この私こそ！　この連合を統べるに相応しいのです！！」

「はあ……行くわよ」

「やってらんないわ……」

「やれやれ……」

「ヒューッホッホッホ！ 皆さん、私の指揮の下華麗に董卓さんを討ちますわよ！」

袁紹の、妲己を彷彿とさせる高笑いを背に、呆れ声を上げながら次々に退出する諸侯たち。

因みに馬騰は居眠りをしており、馬超にド突かれ引きずられて行った。

――

「王奕さん……」

「桃香、もはや何も言つまい。」

「……あの方が総大将なんですよね」

既に作戦成功の兆しを見出した太公望だったが、何処か疲れた顔をして歩いていた。

そして、三人がゲツソリした顔で自分たちの天幕へと入ると――

「おや、お久しぶりですな劉備殿。そして……………王奕殿」

昇り龍が風を望んで座していた。

龍は風の下に（後書き）

書き溜めなくなりました……
これから暫く更新できなくなります。

舌戦、悪徳ロリータ

「趙雲さん！」

軍議……もといただの総大将決めを終え、自軍の天幕へと帰還した三人を迎えたのは、見知った顔。

かつて黄巾賊の討伐に於いて合力した趙雲だった。

「おぬしも久しいのう、健勝だったか？」

「ええ、そちらもご健在のようですねにより」

顔を見合わせ、小さく笑い合う。

初顔合わせとなる朱里は愛紗に小声で誰であるかを問っていた。

「趙雲さんはどうして此処へ？」

「いやなに、放浪の旅もようやく終着点に辿りついたのですよ」

「そっか、有力な諸侯が集まってるもんね！」

趙雲は何かに驚いたようで、値踏みするかのように桃香を見つめる。

「ほほう……中々どうして……いや、うむ」

「ど、どうしたの？」

「いやいや、劉備殿に感じ入るモノがありましてな。どうやら私の勘は正しかったようだ」

一人で納得する彼女に首を傾げる桃香。

太公望もなにやら頷いており、何かを察したようだった。

少しの間を置き、劉備の前に跪く趙雲。

「劉備殿。旅の結果、貴女こそ仕えるべき主であると私は判断しました」

「うえ！？わ、私！？」

「どうか私を貴女に仕えさせてはもらえませぬか？」

頭を下げたまま懇願する趙雲。

桃香は突然のことに慌てていたが、ふと太公望と目が合った。彼は優しく微笑み、小さく頷いている。

「……私でいいんですか？」

「ええ、貴女のその仁徳を支えたく思っております」

趙雲の決意を感じ取り、動揺していた気持ちが霧散する。

「……わかりました。趙雲さん、私の理想を叶える為、力をお貸しください」

優しくも凜々しい声で趙雲の気持ちに応えた。

顔を上げた趙雲は、心底楽しそうに口角を吊り上げている。

「ふふ……なにが彼女を強くしたのですかな？ 王奕殿？」

「地に足がついた。ただそれだけのことよ」

「それが如何に難しい事が知っていたの『ただそれだけ』なのですかな？ いやはや、厳しい軍師殿だ」

「さてのう？」

趙雲と太公望。

この二人は『直線的な表現を使わずに会話を楽しむ』という点で似たモノ同士だった。

簡単にいえば……この二人は腹黒コンビだということである。

「趙雲殿、よろしく頼む」

「私の真名は星。皆さん、宜しく願います」

「私は桃香だよ。星ちゃん、これからヨロシクね!」

こうして、劉備軍に新たに『龍』が加わったのだった。

（ここでこやつが仲間になってくれたか……嬉しい誤算よ）

太公望は内心嬉しい誤算にほくそ笑んでいた。

「ほう……中々面白いことをお考えになる」

「武で名を挙げたいと思っておるおぬしには悪いがのう」

真名を交換し合い、晴れて劉備軍の一員となった星。

そんな彼女に、間者に悟られぬよう小声で今回の戦の概要を説明した。

星は元々察しが良く頭の回転も早いので、最小限の言葉だけで伝える事ができた。

そんな時――

「関將軍！ 関將軍は何処か！」

桃香達の陣を騒がせる一団がやってきた。

大きな声で愛紗の名を呼びながら、三人の少女が天幕へと入ってくる。

「…………え？」

「おぬしらは…………」

突然天幕内に入って来たのは、軍議で袁紹と言い争いをした曹操。

軍議で彼女の後ろに控えていた二人の武将…………夏侯惇、夏侯淵姉妹を従えての訪問。

「関羽は私だが…………なんだ貴様ら！ 名乗りもせずに無礼であろう！」

「誰なのだ？」

突然の乱入者に不快感を覚えた愛紗と鈴々の抗議。

だが、指名した張本人は詫びることなく喚きはじめる。

「貴様が関羽だと…………？ 馬鹿にしているのか！？」

「馬鹿にしているのは貴様らの態度であろう！」

一触即発の雰囲気になる天幕内。

朱里と雛里は後方で怯え、鈴々と星は桃香の側で身構えている。

今にも斬り合いが始まりそうな空気の中、曹操と桃香がそれぞれ二人を止める。

「春蘭、止めなさい」

「か、華琳様……」

「愛紗ちゃんも落ち着いて」

「桃香様！　しかし……」

二人が一步引いたのを見て、曹操が微笑みを浮かべて口を開く。

優しくそうに見えるその笑みはどこか威圧感を放っている。

「はじめまして関羽。その三人は……先ほどぶりといったところかしら？」

「はい、そうですね」

「名乗るのが遅れたわね。私は曹孟徳。いずれ覇道を極め、天下を治める者よ」

自信満々に言い切る曹操に、その場に居た全員の視線が釘付けになる。

曹操もまた、桃香と違った『人を惹きつける能力』を有していた。そんな彼女は再び関羽に向き直る。

「関羽、貴女の噂は耳にしているわ。美しい容姿で戦場を駆ける義の将であるってね」

「……何が言いたい？」

手放して褒められた愛紗は喜ぶでもなく、警戒心を抱いたまま睨みつける。

そして、次に曹操が言った言葉は――

「つまり、私はこう思うのよ。その優れた容姿と實力は、霸王たる私の下でこそ輝く、とね」

心底楽しそうに微笑み、驚きの一言を放った。

一気にどよめく天幕内。

「なっ……！？」

「どう？ こんなちんけな軍じゃ貴女の実力は埋もれたまま……それは余りにも勿体無いわ」

一瞬、目線を桃香へ向けた曹操は、再び愛紗に向き直りうつとりとした表情を浮かべた。

だが愛紗は拳を震わせて大声で叫ぶ。

「ふ、ふざけるな！ 我が軍を、桃香様を愚弄する気か！？」

「事実を述べたまでよ。貴女は今の主で満足かしら？」

「貴様に桃香様の何がわかる！ 桃香様のお覚悟を愚弄するな！！」

宥めようとする桃香を振り切り、愛紗は怒りを収める素振りを見せない。

曹操はそんな彼女の言葉を聞いて興味が沸いたように桃香を見た。

「へえ……義勇軍上がりの貴女にどんな覚悟があるのかしら？」

挑発染みた言葉を投げかけられた桃香は一瞬身体を強張らせる。

それでも動揺を隠し、真っ直ぐに目を向けた。

「……私は、劉の名に恥じないよう、世に平和をもたらす為に戦います」

「それって矛盾してないかしら？ 平和を謳いながらも剣を取るの？」

「それもわかってます。その矛盾を乗り越えて平和な世の中を作る……私は、その覚悟があります」

一瞬目を丸くした曹操だったが、すぐに先程の表情に戻る。

「随分と傲慢な偽善ね」

「傲慢なのはわかってます。偽善だと言われようと、私は道を違えるつもりはありません」

震えた声で語る桃香がチラリと見た時、太公望は微笑んでいた。

一方、曹操は少々予想外だったようで少し間を置いた。

そして、再び口角を上げて言葉を発する。

「……中々面白いわね貴女。印象を改める必要があるかしら？」

「そ、そんな……」

肩の力が抜けた桃香ははにかみながら両手を振る。

「でもね、現状貴女の軍が非力で矮小である事に変わりはないわ」

確かに劉備軍は連合に参加している軍の中で最も規模が小さい。

文武官の粒は揃っている方だが、それでも矮小と言われれば否定できない。

「関羽、もう一度言うわ。こんな非力な軍ではなく、私の下で共に覇道を歩むつもりはないかしら？」

自分が信じて所属してきた軍をバカにされた愛紗は、既に我慢の限界が訪れていた。

「……もう我慢できん！ 今すぐここから立ち去れ！！」

「貴様っ！　華琳様に向かってなんて無礼な物言いを！！」

曹操の強引な勧誘に業を煮やした愛紗が手を振って退出を促すと、夏候惇が大剣を構えた。

再び場に険悪な空気が流れる中……

「ククク……だーっはっはっは！　もう我慢できぬわー！！」

一人の男が大声で笑い始めた。

「ブフッ……ブッ……ブハハハハ！　わーっはははは！！」

「お、王奕さん……どうしたの？」

突然の出来事に言葉を失う曹操と夏候姉妹は若干引いている。

桃香たちもまた、異常な程に笑い続ける太公望を見て啞然としていた。

そして太公望はヒィヒィ言いながら曹操を見て言い放つ。

「クククク……笑かしよるのう、この小娘は」

曹操はその言葉にピクリと眉を動かす。

「……何がおかしいのかしら？」

「おぬしのような者が霸王と名乗る、これを笑わずにおられるか？」

「なんですって……？」

挑発的な笑みを浮かべたまま彼女を否定。

口調こそ丁寧なものの、曹操の言葉には明らかな怒りが顕われている。

「わしは不死の道士故、これまでも色々な王を見てきた。そやつらは一様に王に相応しいモノを持っておったわ」

補佐してきた文王と武王、そして敵対した紂王を思い出しながら話を続ける。

「おぬしもそうか？ 否、才能はあれど、わしにはただ『霸道』と

いう名目を振りかざしている子供にしか見えぬ」

「貴様っ！ 何様の分際で華琳様を侮辱するか！！」

主を侮辱された夏侯惇は大剣を構え、太公望に斬りかからんとしている。

しかし、彼はそれに動じる事無く……逆に自ら近づいて、低い声を発した。

「……黙れ下郎。おぬしこそ誰に向かって口を聞いておる」

その余りにも冷たい目と声に、天幕内の空気が急冷された。

「っ……！？」

瞬間、天幕内に風が巻き起こる。

いつもと違う、明らかな『敵意』の込められたその風に、桃香や愛紗、鈴々達は身体を固まらせた。

朱里や雛里に至っては顔に一切の血の気がない。

「おぬしこそ何様だ？ 今この場で切り刻んでくれようか」

太公望の言葉に応えるように、荒れ狂う一筋の風が夏侯惇の頬を薄く切り裂いた。

「う……あ……」

「わしは今曹操とやらと話をしておる。娘童は黙っておれ」

「っ……」

太公望に睨まれた夏侯惇と夏侯淵は声にならない声で返事をした。

曹操さえも額に汗を流し、圧倒的な雰囲気には圧されている。

そんな彼女たちを見た太公望は……

「なーんてのう!」

腰に手を当てて、ニヤニヤと笑っていた。

「「「……………は？」」」

呆けた声を出したのは、曹操たちだけでなく桃香達も同じ。

いつの間にか風は止んでおり、先程の威圧感も既に霧散していた。

「によほほほ、脅かすつもりだったが…………ちいとやりすぎたかの？」

「え、お…………王奕さん…………？」

うって変わって陽気な振る舞いを見せる太公望。

暫しの間を置き、全員が我に帰ったのを確認してから再び曹操に対して口を開く。

「さて曹操よ。先程の続きだが…………」

そう言って太公望は桃香の隣に立つ。

なにがなにやらといった表情の彼女の頭に優しく手を置く。

「わしは、この桃香こそ相応しいモノを持っていると思っておるのだ」

その顔は先程とは違い、穏やかなものだった。

「民を憂い、民を愛し、民に愛されるこやつは、最も困難な道を選んだ。恐らく乱世において誰もが避けて通るような道を選」

「王奕さん……」

「今は未だ他の諸侯には到底及ぶまいが……いずれ大器となるであろうと考えておる」

太公望の言葉にだらしない笑みを浮かべる桃香。

「おぬしは此度の連合に大義がないことを知っておるクチであろう？」

「……それが何だというのかしら？」

「なに、『弱いモノいじめ』や『火事場泥棒』を働くとは大した霸王だと思つてな」

最大の皮肉に顔を歪ませる曹操。

彼女とて、檄文の内容が偽であることは把握している。

それを承知のうえで名を挙げる為に参加したのだ。

「……あら、同じ事をしている貴方達が言えるの？ 平和を愛しているにもかかわらず」

「おぬしが言ったように、わしらは『非力』で『矮小』で『ちんけ』な軍だからのう……今は矛盾していても力を得る必要があるのだよ、『霸王』様の軍と違ってな」

「なっ……！？」

このような切り替えしをしてくるとは思ってもいなかった曹操が絶句する。

一方で、したり顔をしている太公望を見た星は必死に笑いを堪えていた。

「わかってもらえたか？ 霸王・曹操殿」

ニヤリと笑う太公望。

曹操は間を置いた後、表情を崩して大きく溜息を吐いた。

「……ふふ、貴方は面白いわね。この私を言い負かせるなんて」

「ケケケ、わしとて口にはそれなりの自信があるのだよ」

困ったように微笑む彼女に太公望も穏やかな笑みで返す。

「興味が沸いたわ。王奕と言ったかしら……どう？ 私の軍師になる気はない？」

「ダアホ。非礼を詫びず、部下の驍も禄にできておらぬ主に仕えようとは思わぬわ」

「な、なんだとっ……」

ずっと呆けていた夏侯惇が我に帰り、すかさず太公望に噛み付く。

「挨拶もなしにいきなり訪問し、名乗る前に呼びつけ、勧誘し、主を貶し、あまつさえ刃を向ける……これを非礼と言わずになんと言うのだ？」

「ぐっ……」

「覚えておくがよい。仕える部下こそ主がなんたるかを顕す基準になることをな」

一瞬のうちに論破される夏侯惇。

ただでさえ武将気質な彼女が、口で太公望に勝てる要素は一つもなかった。

「春蘭、控えなさい。彼の言う通りよ」

「し、しかし華琳様！」

「私の言う事が聞けないの？ それとも、これ以上私に恥をかかせたいのかしら？」

窘められ、肩を落とす夏侯惇。

そして曹操は改めて桃香たちに顔を向ける。

「非礼を詫びるわ。すまなかったわね、劉備、関羽」

「あ、いえ……」

あっという間に切り替え、素直に詫びを入れる彼女に太公望は心の中で感心した。

「とりあえず今日はこの辺で失礼するわ。春蘭、秋蘭、行くわよ」

「は、はい……」

肩を落としたままの姉を夏侯淵が支えながら天幕を出て行く。

曹操は外に出る瞬間、首だけ太公望に向けて妖しい笑みを見せた。

「王奕、私は諦めないわよ？」

「かかか！ わしが欲しくば、まずは部下を賤け直すがよい！」

「なっ……！？」

「ふふっ……そうするわ。さようなら」

自分の事だと悟った夏侯惇が絶句する中、曹操は笑いながら颯爽と自陣へと戻って行った。

その様子を見てほっと一息つく面々。

「まったく……なんだというのだ、曹操め」

「鈴々はお兄ちゃんが怖くてそれどころじゃなかったのだ……」

「うう……」

先程の太公望の様子を思い出して震え上がる少女たち。

太公望は苦笑いをしながら取り繕った。

「仕方あるまい。ああでもせんかったら斬り合いに発展しておつたろくに」

「す、すみません……」

言われた愛紗は身を小さくして謝罪した。

「ま、これで彼奴はわしらをバカにはできまい」

「え……？」

「名を売るのに必要なのはなんにも武勲だけではないのだよ、愛紗」

優しく諭す太公望。

その様子に、遂に堪えきれなくなった星が笑い始めた。

「ふっ……ふふふ……王奕殿、貴方はやはり面白い御仁だな」

「折角有力諸侯が集まっておるのだ。戦力を見極め、名を売る絶好

の機会よ」

ニヤニヤしながら得意気に話す太公望。

星も心底楽しそうに笑っている。

「董卓殿も、まさかこのように利用されているとは思ってもおりませんまい」

「たーわけ！ 利用するのは月ではなく『機』よ！！」

「ふふふ……」

「ケケケ……」

互いに黒い笑いを零す龍と風。

他の者はその光景をポカンとした表情のまま眺め続けるのだった……。

「華琳様……私はあの男が恐ろしいです」

自分たちの天幕へ向かう最中、無言を決め込んでいた夏侯淵が口を開いた。

「……そうね。この私が言い負かされるなんて、忌々しいわ」

口ではそう言いつつも、曹操の笑顔はこれ以上にならないほど輝いていた。

「私はあの男が欲しいわ」

「か、華琳様！？ あんな無礼な輩など……」

「あら、無礼だったのはこっちよ？ 貴女も言われたでしょうに」

「くっ……」

未だに納得できていない夏侯惇を見て思わず溜息が漏れる。

「はあ……認めなさい春蘭。彼が本気だったなら貴女はとつくに殺されていたわ」

「っ……！」

言いながら先程の光景を思い出す。

身動きが取れなくなる程の氣を放ち、暴風を意のままに操る道士。

（ふふ……王奕とやら、必ず私に平伏させてみせるわ。『霸王』として、ね）

その考えこそ普段の彼女どおりなのだが……

本人は気づいていない。

それがいつもの『人材としての欲求』ではなく、『純粋な興味』からきていることに。

何故ならば……言い負かされた筈なのに、彼女の胸中は晴れやかな
気持ちで一杯だからである。

舌戦、悪徳ロリータ（後書き）

別に悪徳じゃなかった……

？水関撤退戦

曹操と夏侯姉妹をやり過ごし、一息ついた劉備軍に再び客が訪れた。

「こんにちはー！　ここ劉備軍で合ってるよな？」

元気な声と共に入って来たのは涼州連合が誇る将——馬超。

見るからに活発的な彼女は挨拶にも元気が乗っている。

曹操とは違い、良い意味で空気をブチ壊してくれた訪問者に太公望が声を掛ける。

「馬超か、どうしたのだ？」

「お！　太公……ぼつはあ！？」

太公望、と呼ぼうとした彼女は後ろから小さな影にド突かれた。

「ホントたんぽぽついてきて正解……王奕さま、こんにちは！」

「おお、馬岱ではないか！」

蹲る従姉を尻目に無邪気に挨拶をするは馬岱。

「何するんだよ！ たんぽぽ！」

「お姉さまってウマとシカだと思ってたけど……ニワトリなの？
啼くの？ 三步で忘れるの？」

「何を言って……………あ」

ジト目で辛辣な言葉を浴びせられ、そこで言いつけを思い出した馬超は顔を赤くして俯いた。

一方、劉備軍の面々は突然現れた二人に困惑中。

「あの……王奕様、この者たちは…………？」

「うむ、馬騰の娘と姪、馬超と馬岱よ」

「ほう、あの『西涼の錦』と呼ばれる馬超殿でしたか」

なにやら赤くなっている馬超をジロジロと見る星と鈴々。

馬騰、と聞いて安堵した桃香が笑顔で用件を聞く。

「二人はどうしてここへ？」

「し、進軍を開始するって袁紹軍からの伝令で、劉備軍は最後尾に配置だって」

何とか取り繕うとするも、よほど恥ずかしかったのか顔を赤くしたまま。

「了解だ。わざわざご苦労だったな」

「あ、それから袁紹の作戦も伝えられてたんだった」

「ほう、あの総大将サマはどのような策を考えついたのだ？」

先程の彼女を見る限り到底大した器ではないことがわかる。

が、それでも一応は総大将という立場にあるので、いったいどのような作戦を考えているのか興味が沸いた。

「それが……あのー、うん」

なにやら言い辛そうにしている馬超。

その様子に首を傾げていると、彼女は苦笑いしながら伝えられた作戦を述べた。

「あー……『華麗に雄々しく突撃・撃破！　ですわ！』……ですわ……」

頬を掻きながら言った马超は何故か口調が崩れていた。

そして、それを聞いた太公望たちはというと……

「……………はい？」

「あわわわ……だ、大胆な策です……」

「いや雛里……そういう問題ではなかるう……」

全員がもれなく口元を引き攣らせ、乾いた笑みを零した。

「なんともまあ……見た目どおりというかなんというか……」

「はわわ……これまたステキな策ですね……」

劉備軍の中で最も衝撃を受けたのは軍師陣だったようで。

これまでの軍師人生を真っ向から否定されたような、そんな気持ちになった。

「たんぽぽ達は他にも回らなきゃならないから、行くね！」

「わ、わかったよ、二人ともありがとうね」

「それじゃ、また戦場で！」

ヒラリと去っていく二人の背中を見送る一同。

そのあつさりとした態度に、全員が好感を持った。

「あれが錦馬超と従妹の馬岱か。中々気持ちの良い者たちでしたね」

「少々迂闊なのだが……」

「おや、何がですか？」

合流したばかりの星はまだ太公望の正体を知らず、あくまで『王奕』として認知している。

「星ちゃん、この戦いが終わったら言わなきゃいけないことがあるの」

「ほう……面白いことですか？」

何か小さな予感を感じた星は小さく微笑んだ。

このあたりの鋭さは劉備軍といえる。

「まあ馬超の迂闊さはまだ可愛げがあるとして……袁紹という者があれほどとは思わなんだ」

常に色々なパターンを想定してコトを進める太公望なのだが、彼女の思考はその斜め上を爆進していた。

……ある意味で、袁紹は太公望の意表を突ける数少ない一人というる。

彼女のおかげで、なんとも言えない空気になってしまった劉備軍。

しかし黙ったままというわけにもいかないのです、気を取り直して朱里と雛里に声を掛けた。

「さて、わしらは後ろだ」

「は、はい！ とりあえず出陣準備をしてきます！」

「愛紗ちゃんと鈴々ちゃんも、よろしくね？」

「お任せあれなのだ！！」

天幕を飛び出していく少女たちを眺めつつ、太公望は一息いれる。

(華麗に、ねえ……さて、袁紹とやらの性格が吉と出るか凶と出るか)

――

その頃、？水関――

「おお、来おったで！　よくまあ、ここまで集めたもんな」

「ふん……連合とは言え所詮は烏合の衆だろう！」

「そうやとええんやけどな……」

『張』と『華』の牙門旗の下で、霞と華雄が舌先に雑談を交わして

いた。

呑気に、とは言っても既に部隊の準備は整っている。

「にしても、ここに正面から突っ込んで来るか？ 普通」

「奴らの総大将はよっぽど無能と見えるな。正面突破など愚策だ」

「……人の事言えへんやん」

霞のツツコミはともかく、華雄の意見は的を得ていた。

この？水関というのは、洛陽に向けて進軍する際に立ちほだかる難所。

周囲を山に囲まれたこの要塞は、正面から突っ込んで落とせるほど柔ではない。

「だが……あの場では王奕に納得したが、未だに『逃げる戦』の意味がよくわからん」

「あん？」

「？水関や虎牢関から撤退する際にひと当てしなければならないのは何故だ？ 戦わずに退いた方が犠牲が少ないではないか」

この作戦を言い渡された時から思っていた疑問をぶつける。

すると霞は肩を竦め、頭を振りながら呆れたように溜息を吐いた。

「はあ……ええか？　ここも虎牢関も鉄壁の要塞や。それなのに抵抗するでもなくウチらがただ退いたら敵さんはどない思う？」

「この臆病者め！」

「ちやうわボケ！　『なんで守らへんねん』って思うやろ！」

華雄の答えを一蹴し、更に続ける。

「ほんで、なんの苦勞もなしに洛陽着いてみたら、今度は総大将だけが死んどる……たいした被害出てへんのに、や」

「む……おかしいな」

「せやろ？　やからウチらは突ちんが言ったとおり、あくまでも敗走に見せ掛けなきゃならんねん」

ようやく理解した華雄が大きく頷く。

「華雄、挑発されても乗っかったらアカンで？」

「わかっている。王奕や洛陽の民の想いを無下にはできん。なににより、月様のためなら泥でも被る」

華雄の性格は諸侯の抱いている通りなのだが、この戦に於いての彼女は違う。

月のために己を殺す覚悟を決めた華雄を見て、霞は素直に感心していた。

「……なんや、一皮剥けたな」

霞とて生粋の武人であるため、敵に背を向けることに抵抗を感じている。

だが、今回ばかりは仲間と戦友のために一肌脱ぐ気持ちでいた。

「よし、ほんならウチらも最終確認といくか」

「ああ。霞、ヘマをするなよ？」

「だからアンタが言っないってんねん!!」

この数刻後、連合の？水関への攻撃が始まった――。

？水関への攻撃が始まってから暫く経った頃……

劉備軍は最後方から戦局を見守っていた。

そして、現在の太公望はというと……

「あー……空が青いのう……」

馬の上でダラダラとしていた。

「あわわわ……す、師叔……あの……一応、開戦したので……」

「あ、あんまりそんな姿は見せない方が……」

器用にも半ば寝そべる形で馬に乗っている彼を見兼ね、横に控えていた朱里と雛里が控えめに諫める。

「何を言う。？水関の門は固く閉ざされたまま。前線は手をあぐねておるではないか」

「それはそうですが……」

「連合全体に大した動きがないのだ。後ろの我々は傍観しておればよい」

トンデモ理論を振り翳す太公望に、二人はただただ口元を引き攣らせる。

戦に於いて、最後だからといって油断していると痛い目に遭う。

例えば後方奇襲を受けた場合、真っ先に狙われる位置にあるのが現在の劉備軍の配置された場所。

太公望とてそれは重々承知しているが、此度の戦は『共同作戦』なのである。

「わしらが他の軍と比べても貧弱なのも事実だからのう。攻城戦などは『雄々しい軍』の仕事よ」

「本当に箆ったままですね……」

雛里の言う通り……連合が目の前にいるにも関わらず、先程から？水関はウンともスンとも言わない。

攻城兵器が投入されようものなら上から火矢の雨が降り注ぐ。

野戦にならない以上、騎兵が主力の公孫贇軍と涼州連合も出来る事がなく、沈黙したまま。

「師叔、涼州連合への合図はいつ出すのでしょうか？」

「そうなのう、連合が虎牢関を突破した時だな………周倉はおるか」

「はっ！」

「よし、おぬしにスペシャルコスチュームを授ける！」

「は、はあ………」

前線の部隊とは裏腹に、非常にのほほんとしている劉備軍なのであった。

「どうした華雄！ 母・文台に辛酸を舐めさせられたにも関わらず、その娘たる私に対しても何も感じないのか！ 臆病者め！！」

前線では、孫策軍がどうにか華雄を引っ張りだそうと四苦八苦していた。

先程から華雄に対して罵声を浴びせ続けているのだが、その度に矢が降って来るだけで直接出張ってくる気配はない。

この現状に孫策は大変ご立腹だった。

「ちょっと冥琳！ どうなってるのよ！！」

「私に言われてもな……」

しこたま罵声を飛ばしても反応がないので、仕方なく己が軍師、周瑜に八つ当たり。

「本当に華雄がいるの？ なーんかおかしいと思わない？」

「確かに……他の者ならまだしも、雪蓮の挑発にも乗らないというのはちよつと変だ」

「何か企んでるのかしら？」

「伏兵か……いや、それにしても動きがなさ過ぎる」

華雄はかつて孫策の母・孫堅に敗れた。

故に、彼女にとって孫策とは因縁の相手の筈なのだが……

「猪の事だから簡単に挑発に乗ってくれと思ったんだけどねー」

「大方、張遼が必死に宥めているのだろうな」

周瑜の頭の中では、？水関内で華雄を宥めようと四苦八苦している張遼の姿が思い浮かんでいた。

「……本当にそうかしら？」

だが孫策はなにか含むところがあるので、腕を組んで唸っている。
何かを感じ取ったであろう彼女に気がついた周瑜。

「何かを感じるのか？ 雪蓮の『勘』が」

「うーん……何がどうだって感じじゃないんだけど、少なくとも何か企んでると思うわ」

「……お前の勘は当たるからな、念のため注意しておこう」

「とりあえずは暫く様子見ね」

出張る気配はないものの、迂闊に近づこうものなら矢の雨が降り注いでくる。

この状態が続く以上は出来る事が限られてくるため、孫策は仕方なく現状維持を選択した。

——？水関に動きがあったのは、その日の真夜中の事だった。

「報告！　？水関から敵部隊が出撃してきました！！」

「なんですって？」

突如として？水関から出てきた騎兵が、兵を休ませていた連合に襲い掛かってきたのだ。

混乱する連合を嘲笑うかのように各陣営に火を放っていく董卓軍。

そして、連合が臨戦態勢を整える前にアツサリと引いていった。

「……冥琳、あれって張遼の部隊かしら」

「そうだろうな。恐ろしいまでに統率がとれている」

「引き際も鮮やかな……やってくれるじゃない」

完全に虚を突かれ、孫策は齒軋りして悔しがる。

こうして、奇襲を受けた連合は予想外の被害を被ってしまったのだ。
った。

次の日、太公望の下に伝令が届く。

「華雄が出てきた？」

「はっ。曹操軍の挑発を受け、？水関から出てきた模様です！」

孫策軍に代わって前線に出た曹操軍に煽られ、遂に連合の待ち人が？水関から出陣、曹操軍と交戦中との連絡が入った。

（ふむ……？水関『は』もうよいのだな？）

予想よりも早い展開だったが、それでも想定の範囲内。

（出来れば因縁のあるらしい孫策からの挑発に合わせられたら違和感が残らなんだが……こればかりは仕方がないのう）

遠目に見える砂塵を眺めながら、太公望は作戦の第一段階成功を確信していた。

「曹操、確かにおぬしは優れておる」

先日自陣を訪問してきた彼女を思い出しながら言葉を繋ぐ。

舌戦に負けたとはいえ、言うだけあって曹操という少女は才能と確固たる自信に満ち満ちていた。

「だがわしとて譲れぬ……？水関一番乗りはくれてやる故、今回はわしの思っように動いてもらうぞ？」

彼女が知ったらなんて思うか、と考えながら口角を吊り上げる太公望だった。

「どうした！ 曹操軍は腑抜けの集まりか！！」

現在、華雄は？水関前で曹操軍を相手に猛攻を仕掛けている。

大斧を振るう度に舞い上がる血を一身に浴びつつも手を緩めない。

「行けえ！ 義なき連合など力で押し切ってしまえ！！」

鬼人の如き暴れまわる華雄の前に、曹操軍の兵は為す術もなく倒れていく。

そんな中、大剣を構えて真っ向から突撃をかける将が現れた。

「華雄！ 覚悟！！」

大剣を振りかぶり襲い掛かるは、曹操軍が誇る猛将、夏侯惇。

「ふん、単騎で私に挑むか！ この猪武者が！！」

「挑発されて出てきた貴様に言われたくない!!」

乱戦の中心で大剣と大斧が激しく衝突する。

「ぬんっ！」

夏侯惇が振り下ろされる大斧をいなし、素早く突き出すと……華雄はそれを避け、斬り上げる。

「ちいつ！」

剣戟を重ね、互いに一撃必殺の刃を繰り出す。

二人の攻防は暴風となり、他の者を一切寄せ付けない。

「喰らえ!!」

「そんなものが……ぐっ!？」

先に態勢を崩したのは華雄。

重い一撃を正面から受け、一瞬の隙を作ってしまった。

「！もらったぞ！！」

その一瞬を夏侯惇が見逃す筈もなく、迷わず大剣を振りかぶる。

しかしー！。

「があっ！？」

「なっ……！！？」

流れてきた一本の矢が夏侯惇の目に突き刺さった。

激痛で蹲る夏侯惇。

重傷を負った彼女は、それでも大剣を支えに再び立ち上がった。

「はあっ、はあっ……うあああああ！！！」

咆哮と共に眼に刺さった矢を抜き取ると、そのまま口へと運び、一気に胃まで押し流した。

そして大量の血を流したまま、大喝一声。

「はっ、はっ……兵よ、とくと見よ！ この夏侯元讓、親から貰った身体を捨てる真似はしない！！」

まるで不死身の如くの振る舞いに、連合軍も董卓軍も大いに畏怖した。

「ふうう……さあ華雄、続きだ！」

流れる血もそのままに剣を構える彼女を見て、華雄は身体が奮えるのを感じた。

身体を巡る武人としての血が滾る、滾る。

大斧を握り締め直し、さて第二幕という時――

二人の下に神の速さで影が迫ってきた。

「華雄！ 退くで！！」

「むっ！？」

突如として現れたのは、待機していたはずの神速・張文遠。

堰月刀を携えた彼女はそのまま華雄に馬を寄せた。

「虎牢関まで退却や言うてんねん！ 文句は言わせへんで！！」

「……わかった」

渋々と、それでも素直に応じ馬に跨った彼女に対し、夏侯惇が抗議の声を上げる。

「待て華雄！ 勝負はついておらんぞ！！」

「……これ以上兵を失うわけにはいかん」

二人は気がついていなかったが、董卓軍は連合軍によって押され始めた。

「それに、怪我人と戦り合ったところで意味はない」

「このくらいなら問題ない！　続きだ！！」

なおも戦闘の継続を希望する夏侯惇に……一切れの布が投げ渡された。

「アンタも生粋の武人やな。ゾクゾクするわ……ウチも戦り合つてみたいなあ」

「ぬ……」

「でもアカン。折角なら万全の状態でないとオモロないよ」

布を投げた彼女は馬上で歯を見せて笑っているが……眼光鋭く、闘争心が溢れ出ていた。

「ウチは張遼や。よろしゅうな」

「……夏侯惇だ」

「とりあえず今は退かなアカンから……惇ちゃんも先ずは止血しい！」

「と、惇ちゃんだと……」

初めての呼び名に困惑する夏侯惇を尻目に、二人は馬腹を蹴って走り出した。

「悪いな！ ほななー！！」

あっという間に場を離脱した神速・張遼と華雄。

二人の背中を眺めた後、手渡された布を見つめていると……そこに夏侯淵が駆け寄ってきた。

「姉者、大丈夫か！？」

「うむ、問題ない」

「問題あるだろう！ 衛生兵！ 早く来い！！」

自分が重傷を負ったことで慌てている妹を見て、小さく笑う。

「張遼か……奴の眼は猛る獣のソレだったな」

「姉者？」

布を何処か嬉しそうに巻く彼女を見て、不思議に思う夏侯淵なのだ

った。

「こんのドアホお！　ひと当てや言つてんのに何マジになつとんねん！」

「む、だから『よきところ』で退くつもりだったぞ！」

「ナニが『よきところ』や……矢が流れて来んかったら斬られてたやないか！」

虎牢関へ向かいつつ、馬を並べてギャーギャー喧嘩を始める二人。

ともあれ……曹操軍が？水関一番乗りの功を挙げ、？水関攻防戦は連合の勝利に終わった。

太公望の意表をつく者（前書き）

移動時間は省かれます。

太公望の意表をつく者

こちらは虎牢関。

「よっしゃ、あとはここで足止めしとればええな」

「ええ、詠殿の準備も滞りなく進んでいるとの報告ですぞ」

必要なだけの人数を残して他の兵は既に洛陽へと帰還させてある。

大部分の撤退が完了すれば、あとは虎牢関を投げて脱出するのみ。

ねねは確実に撤退するための手筈を既に整えていた。

「報告！ 連合軍がこちらへ向かって進軍してきています！」

伝令を受けた四人は石壁に登り、連合の動きを確認。

「ちっ、？水関で調子づきおったか」

「恋殿がいれば大丈夫ですぞ！　そうでしょう恋殿！」

隣にいた恋に確認を取る。

が、当の本人はある一点を見たままで返事をする様子がない。

「？　恋、どないした？」

「……………王奕」

「は？」

恋が指差した方向へ目を向けると、連合の先頭で『劉』の旗が翻っていた。

「劉備軍って……………王奕殿の軍でしたな？」

「え、奕ちゃん達が先鋒なん？　どないするつもりやねん」

「……………協力者と討ち合うわけにもいかんだろう」

先鋒を務めるのが彼らと知って動揺する四人。

すると、先鋒の劉備軍から一人の……………馴染みのある顔が颯爽と飛び出した。

「あれって……『豊満の弟の方』じゃないか？」

「呂化……確か廖化言ったな」

一歩前に出てきたのは、十常侍討伐の際に協力してもらった筈の廖化。

そんな彼は手に弓を握っており、言葉を発する事無くそれを構える。

「……ちょ、待てや」

霞の抗議の声も虚しく、廖化の弓から火矢が放たれた。

火矢が向かう先は……『呂』旗。

撃ち抜かれた恋の牙門旗はメラメラと燃え盛り、あっという間に炭と化する。

「これは……どういっつもりなんだ？」

「……恋に出て来いっちゅーコトかいな」

突然の出来事に目を白黒させる華雄と霞。

二人で混乱していると、今度はねねの叫び声が耳に届く。

「恋殿！？ どちらへ行かれるのですか！？」

見ると、いつの間にか下に降りた恋が出撃しようとしていた。馬に跨り、方天画戟を携えて今にも飛び出そうとしている。

「ちよつ、恋！ 出る気か！？」

「……王奕が呼んでるなら、出る」

「いや、まだ意図がそうと決まったわけでは……」

霞と華雄が止めるも、躊躇わずに開門。

重い扉が開かれた後、部下を引き連れそのまま出陣してしまった。

そして、門を抜けたところで恋を待っていたのは……

「りよりよっ、呂布さん！」

「多勢に無勢で申し訳ないが……」

「鈴々たち三人がお相手するのだ!!」

桃園三姉妹だったー！。

――

刻は少し遡る――。

？水関を攻略した連合は勢いそのままに軍を進め、虎牢関近くに布陣。

この最大の難所を前に、諸侯は再び集められた。

「さて皆さん、緒戦は我々の勝利です！ このまま一気に虎牢関も落としますわよ？」

「そう簡単に言っけどさあ……次は呂布が出てくるんだろ？」

公孫賛が苦々しそうに吐き出したその言葉に、場の誰しもが同意した。

この難攻不落の要塞は？水関以上に突破するのが難しい。

しかも、ここを守るのは……一騎当千、万夫不当、天下無双の飛將軍、呂布。

「それに、次こそ神速・張遼も出張って来る筈よ」

「張遼か……夜襲の時と言い、見事な撤退だったな」

押され始めたのを確認してからの張遼は、優れた判断力で迷わずに兵を退かせた。

その判断力と、見事に殿の役割を果たした張遼もまた、呂布に並び脅威の対象とされていた。

「今回は上手くいったけど……麗羽、どうするつもり？」

「ホホホ、この私に素晴らしい策が無いとも思いません？」

「次はどんな表現をするのやら……」

先の戦いに於ける、彼女の策は『華麗に雄々しく突撃』だった。

今度はどんなステキな策なのか想像もつかなかった。

（とはいえ、連合にはせいぜい苦勞してもらうがな。ケケケ……）

太公望は心の中でほくそ笑んでいた。

基本的に準備は詠やねねに任せてあるし、こちらとしてはコトが済むまである程度傍觀していればよい。

……だが、この目論見は予想外にも、ある人物に崩されることになる。

「虎牢関攻略の一番槍は、劉備軍にお任せしますわ！」

袁紹が立ち上がり、高らかに今作戦を述べた。

「な、なんだと!？」

「え、ええええつ!？」

突然の指名に驚く二人。

諸侯は例外なく全ての者があつけにとられていた。

「よって、貴女たちで呂布さんをなんとかしてみなさい」

「どどどど、どうして私達なんですか!？」

「そうだそうだー! わしらは一番兵力が少ないのだぞ！」

思いつきり動揺する桃香と、ブーイングを飛ばす太公望。

だが、袁紹はキツと睨んで指を突きつける。

「お黙りなさい！ 私知っているんですわよ？」

「な、何を……」

「先日の？水関攻撃の際、劉備軍が後ろでダラダラしていたのをですわ！」

……沈黙。

「軍事行動中にダラダラするなんて軍にあるまじき行為ですわよ！」

「ぐっ……なんという正論……！！」

珍しく言い負かされる太公望の横では、桃香は若干涙目になっていた。

「そ……それにしてもだ、わしらの兵だけで挑むなど」

「ふん！ 道士というなら、その風でなんとかすればよいのじゃ！」

「ぐぬっ……こ、こやつら……」

袁紹を援護したのは、もう一つの袁家を束ねる袁術。

この二人は水関一番乗りの功を曹操に獲られ、イライラしていた。

八つ当たりにも、身勝手な言い分にも聞こえるが……ダラダラしていたコトは事実だし、それについては反論できない。

だからといってこの場で先鋒を務める予定は計画にない。

（どうする……未だ時間は稼がねばなるまいが、ここで簡単に敗走しては後々面倒だろうし……）

太公望は月と詠の保護と合わせ、洛陽への一番乗りの功を狙っていた。

時間も稼がなければならぬので、傍観しようと思っていたのだが……

まさか最大の難所の一番槍を、最も規模の小さい自分たちが任せられるとは思ってもいなかった。

「ま、まあ待て袁紹殿。呂布というのは、ある意味この戦におけるキングだ」

「ふん、それがどうかしまして？」

「なれば、キングの相手ができるのはクイーンしかおるまい！」

ピクリと耳を動かす袁紹。

それを確認した太公望は捲くし立てるように続けていく。

「では、連合におけるクイーンとは誰か？ 強大で華麗で雄々しく麗しい軍を従える素晴らしい総大将！ すなわち袁紹殿である！！」

ブンツ、と腕を振上げ、声高々に演説する太公望。

それを聞いた袁紹はというと……

「へ、へえ……まあ確かに？　貴方の言う事は一理ありますが」

明らかに機嫌を良くしていた。

「虎牢関は云わば雄大に聳える山！　華麗に登ること出来るのは、それ以上に雄々しく猛る、袁紹軍のみよー！」

「な、なるほど……」

「これこそ袁紹軍の……輝かしい栄光の始まりなのであるー！」

「お、おおー……」

このやりとりを呆然と眺めていた諸侯だったが……

その中で曹操がおもむろに口を開いた。

「言い包められてるわよ」

「はっ！？」

彼女の忠告に我に帰る袁紹。

「これ曹操！ 余計な事を言うてない！！」

「あら、なにか都合が悪かったかしら？」

「……………おぬし、言い負かされたことを根にもっておるな？」

ニヤニヤしている彼女を睨むも、時既に遅し。

袁紹は身体を怒りに震わせて叫んだ。

「とにかく！ 呂布さんは貴方たちがなんとかなさいな！ これは決定事項です！！」

頭を抱えて唸る太公望の服の裾を引き、小声で聞く桃香は困ったように目を潤ませていた。

「……………王奕さん、どうしよっか」

そして、暫くの間を置いた後…………

「……………わかった。一番槍はわしらが引き受けよう」

諦めた太公望は溜息を吐きながら了承の意を唱え、トボトボと天幕を出て行ったのだった。

「というわけで、何故か先鋒をすることになりました」

桃香が軍議の結果をそのまま伝え、太公望に向けて怒号が飛んできた。

「何をしておられるのですか！！」

「だだだだ、だから言ったじゃないでしゅか！」

「はわわわ……師叔はダラダラしすぎなんですよう！！」

愛紗だけでなく、朱里と雛里も非難を浴びせている。

三人の剣幕に気圧されながら、太公望はなんとか宥めようとする。

「ま、待て待て、少し落ち着くがよい！」

「これが落ち着いていられますか!!」

鬼の形相で迫る愛紗。

愛紗だけではなく、珍しく朱里と雛里も怒りを露にしていた。

「むう……わしもここで先鋒を託されるのは予想外だった。このままでは作戦に支障をきたす恐れがある」

真面目な顔をした太公望を見て、三人は渋々怒気を収めた。その代わり、今度は心配そうな表情をして太公望に迫る。

「それは困りますが……」

「お兄ちゃん、どうするのだ？」

腕を組んで考える太公望は、ふと二人の軍師に視線を向けた。

「難里、朱里……仮にこの戦が『共同作戦』ではなかったとしたならば、おぬしらはどのように対処する？」

「あわつ……わ、私たちだけでは呂布さん率いる部隊は恐らく抑えきれないと思います」

「後退するフリをして、後方の袁紹軍になすりつける……でしょう」

二人の仮定に頷く。

「うむ。だが今回はそういうわけにもいかぬ。ある意味で同士討ちになってしまうからのう」

今回の作戦は董卓軍を無事に逃がすこと。

故に、衝突してお互いの兵を傷つけることは無意味でしかない。

「王奕殿、如何する？」

考え込んでいる彼に、試すかのような言い方で星が問う。

そして、暫しの間を置いて太公望は口を開いた。

「……こうなったら、危機を好機として捉える他あるまい」

そして刻は再び現在へと戻る。

「秋蘭、なんとしても張遼を捕らえるのよ？」

「はっ」

「ふふ、神速・張遼……待ってなさい」

既に功を挙げた曹操軍には若干の余裕が生まれていた。

一番槍を任された劉備軍には気の毒だが、所詮は他人事……十中八九、曹操が邪魔したせいなのだが。

彼がどのような手際を見せるかは気にはなるが、今は張遼捕縛へ気持ちが向いている。

「華琳様あ……張遼は私が……」

「春蘭、貴女は怪我をしているのよ？ 自重なさい」

「これしき問題ありません！」

隻眼となった夏侯惇を見た時は内心激しく動揺したが、命に別状がないことを聞いてとりあえずは安心した。

未だ視野に慣れていないであろう今の彼女では、張遼相手に荷が勝ちすぎる。

そう判断した曹操は張遼捕縛を夏侯淵へ一任。

「張遼は秋蘭に任せる。言葉を違えるつもりはないわ」

「うう……」

ピシヤリと言い捨てたモノの、これは彼女なりの優しさでもあるのだ。

「華琳様！ 虎牢関から呂布が出てきました！！」

「そう……張遼が出てくるまでお手並み拝見といくわよ、王奕？」

視線の先では……

虎牢関の前で桃園三姉妹が呂布と対峙している。

暫く睨み合いが続いていたが、先に動いたのは三姉妹。

「ふっ！」

「うりゃー！」

関羽と張飛が同時に己の武器を振り下ろすが、呂布はそれをなんなく躲す。

その隙に背後を取った劉備が斬りかかるものの……

「……甘い」

「うきやつ!？」

剣閃に方天画戟を重ね、弾き返す。

吹き飛ばされた彼女を庇うように堰月刀を構え、再度斬りかかる関羽。

「でええええ！」

「まだまだなのだ!!」

軍神と呼ばれる武を発揮するも、呂布には届かない。

合わせるように張飛が蛇矛を振り回すが、それも届かない。

一騎当千であるはずの彼女たちの攻撃を真っ向から受け、更に押し返す。

「くっ……!？」

「うわわっ!？」

単純な力による、たった一振りで二人を弾き飛ばした。

「……呂布、本当に化け物ね」

「……三人がかりでもあのザマか」

その余りの武力にただただ驚愕する。

曹操は、本来であれば呂布すらも手に入れたいを考えていた。だが、実際に彼女の実力を見てそれは叶わないコトだと知る。

「呂布は無理ね……諦めましょう」

無理して相手をしようものならば、こちらが手痛い被害を被る事必至。

それほど彼女の武は烈しく危険なモノだった。

「二人とも、大丈夫!？」

「くっ……話には聞いていましたが、まさかこれ程とは……」

「お兄ちゃんの言ったとおりなのだ……」

吹き飛ばされた三姉妹が気遣うように寄り添いあう。

態勢を整え、諦めることなく再度三人同時に挑むのだが……

「……遅い。三人でも、無理」

向かってきた三つの得物を同時に戟で防がれた。

そして、再び彼女たちを吹き飛ばそうと力をいれた、その時――。

四つ目の得物が呂布へと襲い掛かった。

「ならば四人で挑むまで！ 卑怯と思われるな――！」

背後から閃光の如き突きを繰り出してきたのは……常山の昇り龍、
趙子龍。

「四人！？」

「あれは……確か趙雲だったかしら？」

「はい。しかし、いつの間に劉備軍に……」

かつて客将として迎え入れていた龍が突然現れた。

「趙子龍、推して参る！！」

「む……」

連続で繰り出される瞬速の突きを防ぐ呂布。

そこに桃園三姉妹も加わり、新たに四人で取り囲んだ。

前方から槍が突き出され

右方の堰月刀が薙ぎ

左方から蛇矛が振り下ろされ

後方の剣が斬り上げる

まるで暴風の如く吹き荒れる猛攻に、呂布は次第に防御一辺倒になつていく。

気がつけば、曹操や夏侯姉妹もその光景に手に汗握つて釘付けになつていた。

四人の猛攻は暫く続き、そして遂に――

「んにゃあああああ――！」

背後の劉備の一撃に気を取られた刹那、関羽と張飛が最大の力を籠めた一撃を放つ。

「……………あ」

「「もらった!」」

堰月刀と蛇矛が同時に繰り出され、戟を宙へと弾き飛ばした。

そこにすかさず趙雲が槍を翳し、呂布の喉元に突きつける。

「ふむ、些か卑怯ではあるが勘弁なされい」

そして、暫しの静寂の後――

「敵将呂布! 我ら劉備軍の将が降した!」

名乗りと共に、周囲からの大歓声。

天下無双の武を誇る飛將軍は劉備軍によって捕縛された。

「死んじゃうかと思ったよお……」

呂布を捕らえるという功績を挙げた劉備軍は、現在天幕で会議を開いていた。

將軍を捕縛された呂布軍は虎牢関へ退却。

勢いに乗った連合が突破を図るが、それから一切の進展を見せずに日が暮れた。

「すまぬ。よくぞ耐え切ったな、桃香」

「後ろからセコセコ動いてただけだねっ」

成長したとはいえ、愛紗や鈴々の武には遥かに劣る。

桃香がやっていた事といえば、本人の言う通り背後で気を取らせようと動いていただけ。

「まあ、我々からしてみれば全力だったわけですが……いやはや、呂布殿の武には驚かされた」

「すごい強かったのだ……」

他軍の斥候に気を張りながら、周囲の人払いを済ませる。

「まあ猛将三人プラスワンならば生け捕りでもそこまでおかしく見えまい」

「それって私のこと!？」

「恋、よくそこちらの意図に気がついてくれた」

「……ん」

小声で話しかけられ、恋は縄で縛られたままコクリと首を振る。

「すまん……わしらもよもや先鋒を任されるとは思わなんだ」

「……皆、驚いてた」

捕虜として連行されてきた恋に対して、太公望の『尋問』がスタート。

「して、準備の方はどうなっておる？」

「……殆どが逃げ終わった」

「ふむ、ならば……あとは洛陽にいる少数の部隊と、霞たちだけだな？」

首肯で応える恋。

「よしよし……残るは詠の偽装だけか。思ったよりも早かったのう」

「ん……皆、頑張った」

太公望は優しく微笑んで恋の頭を撫でる。

特徴的な二本の跳ね髪をピコピコ揺らせてくすぐったそうに目を細める恋の姿に、その場にいた全員が悶えた。

「も、萌え萌えええー……！」

「くうっ……あの呂布がまさかこのように小動物な一面を持ってい

たとは……」

「か、可愛いです……あう」

呂布を捕らえるという大金星を挙げた劉備軍は、あとはコトが終わるまで傍観していればそれでいい。

これで虎牢関攻略には未だ功を挙げていない軍が躍起になるだろうし、おまけとして洛陽一番乗りが出来ればそれで満足である。

「曹操が少し心配だが……なんとかなるか」

「曹操さんがどうかしたの？」

「いや、霞……張遼を本格的に狙っていると聞いたのでな」

撤退する際、恐らく殿を務めるのは霞。

最後の最後で彼女だけが捕らえられては意味がないので、それだけが太公望の懸念事項だった。

だが、恋はそれに頭を振って否定。

「……ねねがいるから、大丈夫」

こうして、太公望はなんとか『先鋒』という危機を『呂布捕縛の功』という好機に変えることに成功した。

虎牢関撤退戦

桃香たちが恋を捕らえてからというもの、連合と董卓軍は一進一退の攻防を繰り返した。

功を焦った袁紹軍や袁術軍が出張れば、霞と華雄の部隊に押し切られ孫策軍や曹操軍などが援護に向かうと、迷わず退いて再び籠る。

かと思えば、今度は深夜に虎牢関を開放、出陣して火を放って周る。

互いに決定打がないまま、時間と兵力だけを消耗していった。

そんなある時、再び諸侯が集まったの軍議が開かれた。

「なんでたかが関のひとつ落とせないんですの!？」

机をヒステリックに叩く袁紹の顔からは焦りの色が見て取れる。

総大将という立場にありながら、功をひとつも挙げていないのだから当然だ。

彼女だけでなく、他の諸侯についても同様で……天幕内には重い空気が流れていた。

「……そうは言っけどね、あんなやり方されたらどうしようもないわよ」

「てつきり大軍でぶつかってくると思ったんだが……中々厭らしい動きをする」

孫策と周瑜が忌々しげに呟き、それに馬騰と公孫賛が続く。

「陳宮つて軍師もいるんでしょ？ 完全に翻弄されてるわね……」
「コホッ！」

「まるで他人事みたいな言い方だな……」

「私たちは自慢の騎馬隊を機能させてもらえないのよ？ そりゃ他人事にもなるわよ」

「それは……そうだけど」

完全に決め手を欠いた連合はほぼお手上げ状態。

遠征の身でもあるので、下手をすれば兵糧切れで撤退せざるを得ない。

「王奕、貴方はどう思う？」

「攻城兵器も機能しておらぬし……このままならジリ貧だな」

曹操と太公望、この二人の軍は功を挙げている為、他の諸侯よりは冷静である。

それでも、曹操は更なる功を欲しているので現状を打破しようと画策していた。

「私たちや孫策軍と見ればすぐに退く、か……どうしたものかしら」

「やっぱり恐れるは私たちだけって思ってるんじゃない？」

「孫策！ それはどういう意味なのじゃ！――」

「そのままの意味よ。事実でしょ？」

苛立つ面々は些細な事で言い争いを始める。

大した収穫がないまま、軍議は無言で続いていく。

と、その時――。

慌てた様子の兵士が天幕に転がるように飛び込んできた。

「失礼します！」

「なんですの？　今は軍議中ですわよ！！」

「はっ、虎牢関から董卓軍が出撃してきました！　旗は華、張です！！」

その知らせを受けた袁紹は更に頭に血が上った。

「くっ……此処で撃って出てくるんですの！？」

「春蘭、秋蘭、行くわよ！」

「冥琳、私たちもすぐ出るわ！」

完全に虚を突かれた諸侯は軍議を中断し、慌しく各々の陣へと散っていく。

そんな中、太公望だけが悠然とした足取りで考え事をしていた。

（自ら動いたか……遂に準備が整ったようだな）

――

「オラ、奴さんは未だ混乱中や！　一気に攻め立てんかい！！」

「駆ける！　唸れ！！　董卓軍の獅子奮迅ぶりを見せ付けてやるのだ！！」

初動を制した董卓軍は破竹の勢いで連合に襲い掛かる。

連合が混乱しているのをいいことに、広い戦場を自在に駆けてゆく。

「霞！」

「なんや！」

「退く機を逃すヘマをするなよ!!」

「アンタが言うなって何遍言わせんねん!!!」

九割がた怒りの籠ったツツコミをしながらも二手に分かれて次々と兵を斬り進んでいく。

大軍とはいえないもののその速さは凄まじく、連合の戦力を悉く削って行った。

勢い止めることなく暴れまわる霞だったが、一本の矢が飛んできたことによつて馬を止めた。

「あん……?」

「張遼だな? 私は夏侯淵。姉者が世話になったな」

集団の中から現れたのは曹操が片腕、夏侯淵。

「姉者? 誰やねんな」

「私は……お前が? 水関で布を渡した、夏侯惇の妹だ」

「……惇ちゃんの?」

「うむ、惇ちゃんの」

首肯する彼女を見て、合点がいったように頷く霞。

「成る程なあ……んで、何の用や？　ただ礼を言いに来たわけちゃうやろ？」

「我が主がお前を欲しがっていてな。どうだ？　降ってはくれないだろうか」

夏候淵がシレッと勧誘してきた。

その余りにストレートな物言いに、思わず噴出しそうになりながらも答える。

「ウチも買われてるみたいやな」

「ああ、『神速の張遼』程の人材などそうそういまい」

「嬉しい事言ってくれるやん。でもな……………」

馬上で堰月刀を旋回させ、猫のような笑顔を向ける。

「アカンな。ウチにはまだやるコト残っててん」

「……そうか」

「どうしても言うのなら、ウチに勝ってみせや!!」

馬から降りて、一気に駆け出す霞。

それを見た夏侯淵はすぐさま弓を構え、躊躇うことなく矢を放つ。

「ひゅー……やるやん!」

「私とて華琳様と約束してるのだ、ここは退けぬよ」

堰月刀で矢を払いながら、止まる事無く走り続ける。

内心、彼女の正確な狙いでの速射に素直に感心していた。

「アカン、滾ってきたで……董卓軍に張文遠在りっちゅーコト思い知らせたる!!」

頭上で得物を振り回しながら叫ぶ霞は、心底楽しそうに笑っていた。

一方、華雄の下にも立ちふさがる者が現れた。

「せい！」

「むっ？」

背後から襲ってきた刃を躲し、その姿を確認する。

「やーっとお出ましくてわけね、華雄」

「孫策か……！」

目の前で佇んでいたのは、先日散々罵声を浴びせられた宿敵・孫策。ギラギラした眼を向けたまま、南海霸王をその手で弄っている。

「まったく、アンタが出てきてくれないせいで功を逃しちゃったじゃないの」

「そうか。私には関係ないな」

「だから……ここでアンタの頸を貰うわ……よっ!!」

今回の戦に於いて、孫策軍も『目的』のためになんとしても功を挙げなければならなかった。

それも相俟って、彼女の中のフラストレーションは溜まりに溜まっている。

「あんなに挑発したのに出て来ないなんて……私がバカみたいじゃない!!」

「知るか!!」

半ば八つ当たり気味に華雄の大斧に剣をぶつける。

「ふんっ!!」

「くっ……やるじゃないの!!」

重い大斧を受け止めながら、孫策の顔は嬉々としている。

彼女は常日頃から最前線に立つことを望んでおり、その度に周瑜に叱られていた。

だが……劉備が自ら出張り、四人がかりとはいえあの呂布を捕らえた事は彼女にとって大きな刺激となった。

「でもね、私はこんなところで立ち止まってるられないのよ！」

「私とて同じだ!!」

甲高い金属音をかき鳴らしながら、戦場に舞う二人。

「ちっ……猪武者だから楽勝だと思ってたんだけどね……」

「悪いな。今の私には目的があるのだ」

「それに向かって爆進中なのかしら？」

「ふっ……猪には猪なりのプライドがあるん……だあっ!!」

遠心力と共に、己が力を籠めた一撃を放つ。

孫策はそれを紙一重で躲し、連続で斬りかかった。

（目的……？ 私を前にしてこの冷静さ……やはり何か企んでるわけ？）

冷静に攻撃を防ぐ華雄を見ながら、何かを感じ取る孫策なのだった。

「はあああつ！」

「甘いでー!!」

霞と夏侯淵の戦いは激しさを増していた。

霞が間合いに飛び込んで堰月刀を振るうも、弓で防がれる。

夏侯淵が距離を置いて矢を放つも、堰月刀に弾かれる。

（ちっ……牽制のつもりやろうが、正確さがハンパやないな）

（動体視力と反射神経が尋常ではない……一筋縄ではいかんな）

互いに得意とする間合いで戦えないことに苛立ちを覚えるが、それでも手を休めることはない。

「うつらあああ!!」

大地を蹴って一気に間合いを詰める霞。

夏候淵は近距離では分が悪いのをわかっているので、なんとか弓で防いで間合いを取ろうとする。

「逃がさへんよ! アンタの弓の腕は厄介やから……な!」

「くっ……!?!」

一旦距離を置こうにも、連続で襲い掛かってくる刃がそれを許さない。

紙一重の回避が続き、夏候淵は段々と追い詰められていく。

「もろうたで!!」

そして、霞から本日最速の斬撃が飛び出した。

「ちいつ……！」

その一撃を辛うじて躲し、地面に手をつきながらも態勢を立て直す。
だが、最高の一撃を躲された筈の霞はなにやら笑っていた。

「一先ずウチの勝ちだな」

「何を言っている？ 私は未だ負けてないぞ」

「いや、今はアンタの負けや」

「？ この距離ならば私の弓が………っ！？」

勝利宣言をする彼女に戒めの矢を放とうとして、あるコトに気がつく。

手を伸ばした先にある、矢筒が真つ二つに斬られていた。

「……確かに『とりあえず』私の負けだな」

「どないする？ 他から矢筒貰って来てもええで？」

その気遣いを受け、夏侯淵が兵士に声を掛けようとした時――

銅鑼の音が戦場に響き渡った。

「なんだ……？」

「……アカン。悪いけど、ここまでみたいやわ」

霞がそこまで言うと、董卓軍の兵が霞の馬を引いてきた。それに飛び乗り、心底残念そうな顔を向ける。

「悪いなあ……ホンマはもっと戦い合ってたんやけど、堪忍な」

「え、な……は？」

「オラ、退却や！遅れたら置いてくで……！」

困惑したままの夏侯淵を無視して兵に退却を指示する霞。

「楽しかったわ。また機会があったら戦い合っや、淵ちゃん……！」

最後に、人懐っこい笑みを見せて馬を走らせる。

そしてその姿はあっという間に彼方へと消えていった。

「……………淵ちゃん？」

「はあっ、はあっ……………孫策、悪いが……………ぐうっ……………こ、ここまでだ」

「ふう……………黙って逃がすと思う？」

銅鑼の音はこの二人の下にも届いており、鏑迫り合いを中断、少し離れて大斧と剣が降ろされた。

華雄の身体には至るところに切り傷があり、己の血で全身を真紅に染めていた。

「ふっ、思わんが……はあっ……それでもっ、退かなければならぬのだ！」

「あら、手負いとはいえ猪が背を向けるの？」

なんとしても功を挙げる必要がある孫策は、逃すまいと挑発染みた言葉を投げかける。

しかし……華雄はそれに激昂するでもなく、ただ笑った。

「今度は……あちらに向けて猛進するんだよ」

思ってもいなかった返答に目を丸くしたままの孫策を背に、華雄は馬に跨った。

そして、首だけ振り向いて小さな声で言う。

「功が欲しいなら、虎牢関の一番乗りでもいいだろう？」

出来るならな、と言い捨て馬を飛ばし去っていく彼女から数滴の血が飛び、風に乗って空に舞う。

その背中を呆然と見つめていると、周瑜が駆け寄って来た。

「冥琳！ 無事か！？」

「はぁ……」

「……どうした？」

華雄を逃がし、てっきり地団駄を踏んで悔しがると思っていたので周瑜は少々拍子抜けした。

そして、孫策は丸くしていた目を細め……楽しそうに笑う。

「猪も変わるもんなのねー」

「……は？」

先程の華雄を思い出す。

自信過剰ではないが、確実に自分は押していた。大斧をすり抜けて届いた刃は数知れず。

にも関わらず、彼女は最後まで冷静さを失うことはなかった。

「やっぱり何かあるわ。目的とか言ってたし」

「目的か……何を狙ってるのか」

「うーん。戦術云々ってより、もっと根本的な……大切な何かのため？ わからないけどね」

その余りにも漠然とした返答に首を傾げる親友に、孫策は微笑みで応えた。

「さて！ 虎牢関一番乗りは私たちで貰うわよ！！」

「？ まあいいか……全軍前進！ 一気に乗り込め！！」

気を取り直し、突撃の指示を送る彼女の隣で孫策は南海霸王を弄くり回しながら思案する。

（なーんだ……アイツって猪じゃなくて狼だったのね）

狼という獣は、孤独を嫌い群れを為す。

アルファやベータと呼ばれる上位の者の指示に忠実に従う動物なの

だ。

「……ま、私は功さえ挙げられたら他はどうでもいいんだけどね」

何かを悟った孫策の笑みは……狼を喰らう獣の如く獰猛でもあり、
聖母のように慈悲深くもあった。

三者会談、ひとまずの決着（前書き）

展開が早いのと、場面が切り替わり過ぎで読みづらいかと思ひますが、ご容赦を……

三者会談、ひとまずの決着

崩れた董卓軍を追撃して、連合が虎牢関に殺到する。

「虎牢関の一番乗りは貰いますわよ！ 駆けなさい！！」

なんとか功を挙げようとする袁紹が躍起になって部隊を突貫させる。

今まで散々してやられた分をやり返そうと必死だった。

その気持ちは兵も同じで、とにかく勢いのまま門を越えようと走り続ける。

だから彼らは気がつかなかった。

晴天であるにもかかわらず、門から先に見える一帯が濡れていた事に。

「申し上げます！ 虎牢関から火の手が上がりました！！」

「なんですって!？」

煉獄の炎は無粋な連中を拒絶した。

――

「あー、燃えてる燃えてる。ケホッ」

「うー、叔母さま、近づかなくて良かったね」

「うわー、エグい事するなあ……」

虎牢関の様子を右翼から眺めていた馬騰はまるで他人事のように感想を漏らす。いや、正しく他人事なのだが。

「最初から近づく必要もなかったのよ……ん？」

「失礼します」

そんな彼女の下に、一人の西涼連合の兵士が近づいてきた。

肌は浅黒く、髭を蓄えているその兵士は…… 跪き、下を見たまま低い声で用件を伝える。

「『酒はいずれ西涼へ届ける』……だそつです」

突然意味不明な事を言う兵士を不審な目で見る馬超。

「伝令か？ 何を言ってるんだ？」

「……いつから？」

「はっ、？ 水関からでございます」

馬騰は、その返答を聞いて納得したように頷いた。

「成る程ね……わかったわ。彼に『高級酒をしこたま』と伝えておいてね」

「母様？」

その兵士を下がらせた後、馬超と馬岱に指示を飛ばす。

「さーで、私たちは西涼に帰るわよ」

「は……？ どうしたんだよ母様？」

「あれはうちの兵じゃないわ。彼の『合図』よ……っと、私は総大将サマの所に行くから、あとヨロシク！」

「ちよつ、母様！？」

伝令した兵士こそ、太公望から『スペシャルコスチューム』を与えられた周倉だった。

「涼州連合が軍を退いた……？ 桂花、確かなのかしら？」

「はっ、どうやら馬騰軍の斥候が洛陽から帰還したらしく……」

「……檄文の内容が虚偽であると気がついたってこと？」

「恐らくは……袁紹がなにやら喚いていたようですが『漢の臣下はガキの使いじゃない』と言い捨てて去っていったとか……」

曹操軍軍師・荀？は報告をしながらも眉を潜ませており、不審に感じている様子。

それは曹操とて同じで、腕を組んで眉間に皺を寄せる。

「だからといってこの機？ 虎牢関もほぼ突破したというのに」

「私もおかしいと思いますが……虚偽だからこそ、洛陽まで攻め入る前に退いたのではないかと……」

馬騰の、自然であり不自然な行動に疑問を覚える。

「攻め入る、ね……尤もらしい理由だけれど、やはりおかしいわね」

「……と、言いますと？」

天をも焦がす勢いで燃えている虎牢関へと視線を移す。

（虎牢関から火が上がった瞬間の撤退……火の手は合図？ でも、一体何の？）

腕を組んだまま思案しつづけ、やがて小さく息を吐いた。

「まあいいわ。今は捨て置くことにしましょう」

「よろしいのですか？」

「……桂花、一応劉備軍……王奕から目を離さないようにさせておいて」

「御意」

「むう、火を放つのは想定しておったが……ねねのやつ、油を撒きおったな？」

太公望は異常なまでに燃え続ける虎牢関を離れた場所で眺めていた。袁紹軍と袁術軍が消化に取り掛かっているが、火の勢いは未だ衰えないでいる。

「華雄さんって人が大怪我したみたいだけど……大丈夫かなあ？」

「確か孫策が相手をしておったそうだ。生きてはおるそうだが」

その孫策軍は現在袁紹軍のすぐ側で待機している。

消化が終わり次第、虎牢関の一番乗りを虎視眈々と狙っていた。

「ま、命があるだけで大勝利よ。桃香、兵を今のうちに休ませておけ」

「うん！ 虎牢関は譲つても、まだ洛陽一番乗りがあるもんね！」

「うむ、そういうことだ」

兵に向けて指示を出すため、桃香は馬を進めた。
それを確認した後、太公望は星を呼びつける。

「星、おぬしに頼みがある」

「おや、何ですか？」

懷をガサゴソと漁り、『あるモノ』を取り出した。

「こ、これは……………っ!？」

そのある『モノ』を星に手渡し、ニタリと笑う。

「あとは『仕上げ』だ。手伝ってもらえるか？」

「…………ふふふ。任せられよ」

この一半刻後、消化を終えた瞬間に孫策軍が虎牢関を突破。

難攻不落と呼ばれる虎牢関を突破した連合は、兵糧が尽きる前に洛陽へと向けて軍を進めた。

――

洛陽へと進んだ連合が目にしたモノ、それは……

煌々と燃え盛る董卓の根城。

何故か周りに董卓軍の兵は一切おらず、もぬけの殻と化していた。

最後の抵抗があると踏んでいた連合は大いに拍子抜けし、そのまま軍を進駐。

反発する洛陽の民から話を聞くと、どうやら董卓は部下を逃がすために自ら命を絶ったとのこと。

諸侯のうち、孫策と曹操が何かに気づいたようだったが……

互いに今回の自分たちの目的は果たしたということで、それ以外で行動を起こすことはしなかった。

「詠ちゃん……暑いね……」

「しっ！ 我慢しなさい！」

現在、月と詠は『豊満』の酒蔵に身を潜ませている。

蔵、とはいっても大層なモノではなく……二人が隠られるスペースがあるだけ。

「さすがに略奪はしないと思うけど……無人の酒屋ならわからないわね」

城に火を放った直後に此处に飛び込んだため、それからの情報は一切入ってきていない。

もしかしたら、袁紹が追撃を指示しているかもしれない……

もしかしたら、偽の死体を看破され、搜索に乗り出しているかもしれない……

もしかしたら、連合が略奪をはじめたかもしれない……

暗い蔵の中で、良くない想像ばかりが頭に浮かんでくる。

その時、なにやら物音が聞こえてきた。

「足音……？」

「王奕さんが来てくれたのかな？」

月が一瞬嬉しそうな顔をするが、詠は眉間に皺を寄せたまま。

謎の足音は無人の店内を歩き回っているように聞こえる。

「王奕ならまっすぐ此処に来るでしょ………ちっ、略奪しに来た
ってわけ？」

「え、詠ちゃん……」

「大丈夫、ボクが絶対守るから」

小声で月を励ます詠だが、彼女の額にも汗が滲んでいる。

静かな店内に響く足音は次第に近づいてきた。

やがて足音は二人の隠れる蔵の前でピタリと止まる。

息を飲む二人。

そして、外からゆっくりと扉が開かれ………

「正義の味方、華蝶仮面参上!!」

なんか怪しい人がいた。

蝶の仮面をつけ、変なボーリングをしている。

「……………は？」

ポカンとしたままの月と詠に、自称・華蝶仮面が声を掛けてきた。

「ふふん。友人の王奕殿の頼みでな、二人を救いに参上した」

「え、王奕さんの……?」

「アイツどんな変ちくりんと付き合ってるのよ……」

ともあれ、信頼する者の名を聞いて胸を撫で下ろす。

「ボク達はてつきり王奕が来るもんだと思ってたんだけど」

「ふむ。王奕殿は曹操から目をつけられると踏んで、この趙……華蝶仮面に代役を頼まれたのだ」

お気づきの方もあると思うが、自称・華蝶仮面の正体は……星。

先に渡された仮面をいたく気に入った彼女は、完全にノリノリでこの任に臨んでいた。

「そう、なんでもいいけど。裏口から路地に出られるわ」

「あいや待たれい！」

「な、なに……？」

月の手を引いて裏口から出て行こうとした時、華蝶仮面が後から声を掛けてきた。

「この高級酒が引つかかってですな……」

「こんな時にネコババすんなっ！ この変態仮面！！」

先程足音が店内をうろついていたのは、彼女が酒を見繕っていたことによる。

「よし、では護衛は私に任せてもらおう。では、行くぞ！」

「あ、はい！」

「はぁ……大丈夫かしら、ホント」

――

「あ、王奕さん！ あれ！」

「愛紗、兵で垣を作るのだ」

「はっ」

太公望と桃香の下に、待ち侘びた二人がやってきた。

「星、ご苦労だった」

「待たれい！　今の私は華蝶仮面ですぞ！」

「め、めんどくさいのう……」

適当に与えただけの役者にこだわりの持っている彼女に気圧されながら、彼女の背後の二人を見やる。

「その二人が……？」

「うむ、『月』と『詠』よ」

華蝶仮面の影に隠れていた二人がおずおずと前に出てきて、桃香に頭を下げる。

「私が月です。劉備様、この度はご協力していただき本当に感謝い

たします」

「ボクは詠。手を貸してくれたこと、礼を言っわ」

頭を垂れたまま礼を言う二人を見て、桃香は向日葵のような笑みを浮かべた。

「焼け跡から『董卓さん』と側近らしい人の死体が見つかったって報告が来てるよ」

「そうですか……」

「滞りなくコトは成った。安心するがよい」

安堵する月と詠の頭に太公望は優しく手を置く。

その光景を微笑みながら見ていた桃香は、気を取り直してすぐに指示を飛ばす。

「廖化さん、二人を囲うように兵を配置させて後方へ。周りから一切見えないようにお願いします」

「御意」

廖化が二人を引き連れて行こうとした時――

思い出したかのように再び声を掛ける。

「月ちゃん、詠ちゃん！」

「？」

「あとは任せて、今は休んでね？」

「あつ、ありがとうございました！」

「……………ありがとう」

見た事のないほど輝いている笑顔を見た二人は、溢れ出る涙を拭いながら離れて行った。

「ふいー……………ようやくひと段落だのう」

「ダメダメ、家に帰るまでが作戦です！」

「……………おぬし、本当に成長したな」

「えへー」

小さく笑い合う太公望と桃香。

敵將捕縛の功はともかくとして、今回の戦最大の目的を達成できた二人の顔は達成感で溢れていた。

そして、そんな彼らを尋ねてくる者が現れる。

「あら、楽しそうね？ 劉備、王奕」

「こうして直接話すのは初めてかしら？」

兵の垣を越えて姿を現したのは……霸王と虎兇。

「そそそ、曹操さんと孫策さん！？」

「そんなに慌てなくても、別に取って食いやしないわよ」

突然の来訪に慌てふためく桃香に、苦笑いしつつ手を振って返事をする孫策。

一方で太公望はしかめっ面。

「どうしたのだ？ 二人揃って尋ねてくるなんて」

「別に私は孫策と示し合わせたわけじゃないわよ？ ただ偶然そこで会っただけ」

孫策が一步前に出て、太公望と対峙する。

「ただ、解散する前にちょっと意見を聞きたくってね」

「何をだ？　というか、何故わしに？」

「いやね、今回の戦に違和感を感じたの。それで、曹操が一目置く貴方はどう思ってるかなって」

そう来たか、と太公望は内心舌打ちするも決して表情には出さず、いたって普通の態度で応対する。

「ふむ、例えば？」

「うーん……私は華雄とやり合ったんだけど、どうにも様子が変だったのよ」

「ほう？」

「目的とか言ってたし、なんか華雄らしからぬ冷静さだったわ。挑発にも乗らなかったし」

首を傾げて考える孫策。

太公望は心の中で華雄の迂闊さを怨んでいた。

「目的か……」

そして、今度は曹操が腕を組んだまま口を開く。

「どうも勝利に拘っていなかったと思うのよ。王奕、何か考え付く？」

「ふむ……防衛戦の筈なのに、引き際がアツサリとし過ぎておったな」

「でしょう？ 猛将二人が最後まで抵抗しなかった。虎牢関炎上と同時に涼州連合の退却、そして董卓の自決……おかしいと思わない？」

半ば誘導尋問のような口調に、太公望は敢えて乗る。

「考え付くとしたら……最初から逃げるつもりだったとか、か？」

「そう、私もそう思うのよ。もしかしたら涼州連合が手引きしたんじゃないかって……最初から董卓を逃がすために、ね」

「そうねー。それなら違和感がないし」

ニヤリと笑う曹操と孫策。

だが、太公望は態度を変えることなく答える。

「なるほど。だが仮に董卓が涼州連合と密約していて逃げたとしても……それこそおかしいとは思わぬか？」

「どうしてかしら？」

「漢の臣下を名乗る馬騰殿が董卓を匿う利点がないのだよ。実情はどうあれ……勝利せぬ限り、董卓は逆賊扱いなのだから」

人差し指を突き立てて説明を続ける。

「もし最初から逃げるつもりで手を貸したのであれば、汚名を被ることをわかってた筈よ」

「……成る程。そこに矛盾が生じる、か」

「うむ。それに、洛陽の民が『將軍たちは最後まで董卓様を止めたが、聞く耳を持たれなかった』と言っておる」

「うーん……街を見る限り民の言っていることはおかしくないわね。張遼も華雄も董卓の顔を立てて、泣く泣く逃げたって事かしら」

二人と普通に問答を続ける太公望の隣には、桃香が冷や汗を滝のように流している。

「確かに解せぬところはあれど……ま、わしとしては呂布を捕縛できたので、さほど気にしてはおらんというのが正直なところだの」

「ふーん……」

「へえ……」

頷く太公望を探るような目で見る二人。

そして、そのまま暫く無言の圧力が続き……やがて二人同時に小さな笑みを零した。

「まあ私たちは目的を達成できたからそれでいいわ」

「同じく。じゃ、私はそろそろ行くわ。コワイ軍師に怒られちゃうし?」

言いながら、手を振ってあつという間に去っていく孫策。

「私も行こうかしら。王奕、次もできれば戦場で会いたいわね」

「けっ、わしは戦場で会いたいとは思わぬわ」

「あら、そうすれば貴方を捕らえる機会があるもの」

「言っておれ」

シッシツと手を振る太公望にひとつ微笑み、曹操は颯爽と身を翻した。

足を運ぶ直前、背を向けたまま桃香に言葉を放つ。

「……劉備。いずれまた、ね」

桃香の返事を待つでもなく、今度こそ足早に去っていった。

太公望と桃香はそれを眺めつつ、大きく溜息を吐く。

「ふへえ……こ、怖かったあ……」

「勘付いておったか……油断できぬ連中よ」

そう言いながら、予想以上の逸材である二人に舌を巻く。

（奴らの目的が真に月の頸だったならば……この作戦は成功しなかったかも知れぬ）

曹操と孫策という二人は太公望の中でブラックリスト入りされた。

この二人が、今後どのような形で太公望の前に立ちふさがるかは…
…神のみぞ知る。

「さて桃香、わしらは兵の埋葬を手伝うぞ」

「うん！」

「主を守った英雄達を手厚く葬らなければな……」

「……うん、そうだね。皆が無事だったこと教えてあげなきゃ」

真の忠臣を憂う二人の目には若干の悲壮感が滲んでいた。

ともあれ、董卓軍の大脱出劇はこうして幕を閉じた。

表では連合の勝利、裏では被害を最小限に留め脱出に成功した董卓軍及び劉備軍の勝利として。

三者会談、ひとまずの決着（後書き）

連合軍対董卓軍＋α、これにて閉幕です。

太公望、目立たず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0431w/>

風の旅人、三国を歩く

2011年8月30日01時26分発行